県営圃場整備事業田原東地区における
埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅱ

—別所下ノ前・辻堂・大谷口遺跡　水間遺跡—

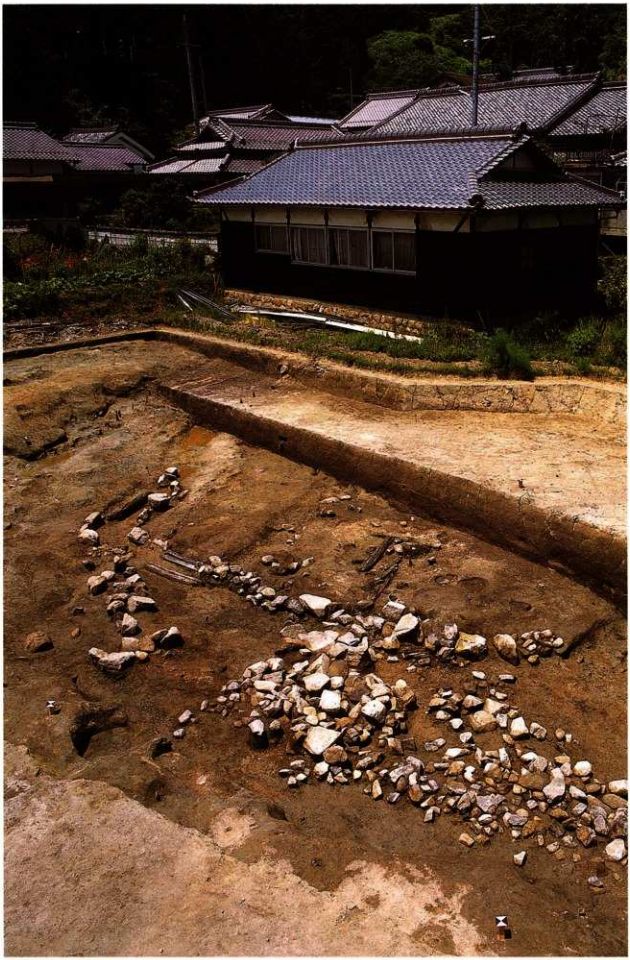
2007年

奈良市教育委員会

別所大谷口・下ノ前・辻堂遺跡周辺の航空写真（北東から）

別所下ノ前遺跡　E発掘区全景航空写真（東から）

別所辻堂遺跡　A・B・C・D発掘区全景航空写真（北東から）



別所辻堂遺跡　D発掘区庭園風石組全景（東から）

別所大谷口遺跡と水間遺跡航空写真（南から）

水間遺跡第８・９次調査地全景航空写真（東から）

序　　文

奈良市の東半部には、大和高原に連なる山地が広がっています。平成17年４月１日には月ヶ瀬村・都祁村と合併し、その範囲はさらに東へ広がることとなりました。この東部地域は「東山内」とも呼ばれ、奈良盆地北部にあたる西半部とは異なる独自の文化が形成されてきたところです。清流あふれる谷筋の近くで縄文時代の早くから人々の生活が始まりました。奈良時代には豊かな森林資源を都の平城京へと供給するとともに、風水にかなう理想的な死後の埋葬地を官人たちが探求した場所ともなっています。戦国の世には、有力な土豪が山城を拠点的に築いて勢威を示しました。

さて、太安萬侶墓の発見で有名な田原地域を中心に県営圃場整備事業が計画され、水間町・別所町・曙光町・柚ノ川町にまたがる田原東地区の埋蔵文化財調査を平成11年度から奈良市教育委員会が行なうことになりました。その調査成果の一部は、すでに『概要報告書Ⅰ』として平成18年度に公表しております。本書はその続編で、平成14～18年度に実施した別所町・水間町・柚ノ川町内の遺跡調査概要をまとめたものです。これまで不明な点が多かった古代以前の東部地域に関する多くの資料を得ることができたことは、資源豊かな山地で生活してきた人々の歴史を解明するための重要な糸口となりましょう。

最後になりましたが、現地調査から本書の作成に至るまで御指導・御協力いただいた関係機関・各位に心より御礼申し上げます。

平成19年３月

奈良市教育委員会
教育長　中尾　勝二

例　言

1　本書は、奈良県教育委員会からの委託を受けて奈良市が実施した県営圃場整備事業田原東地区に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書の第２冊である。本書には、平成14～18年度に調査した別所ドノ前・辻堂・大谷口遺跡と水間遺跡の発掘調査成果及び水間町・柚ノ川町遺物散布地の試掘調査成果を集録した。

なおその他の調査概要については、『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成12年度』・『県営圃場整備事業田原東地区に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅰ』に収録しているので、参照して頂きたい。

2　図中の方位・座標値は、改正前の日本測地系による平面直角座標系Ⅳで示した。また、高さはすべて標高である。その測量にあたっては、整備事業計画に基づいて作成された３級基準点測量成果を使用した。

3　調査成果を示した地図は、県営圃場整備事業田原東地区平面図２（柚ノ川町）・３（別所町）・４（水間町）を調整して使用した。

4　本書で使用した遺構の分類記号は、奈良市教育委員会刊行物に準拠して付した。

5　本書の写真図版に付した遺物番号は、本文中に示した遺物番号に対応する。

6　現地調査は、鐘方正樹・大窪淳司が担当した。現地では、奈良県教育委員会文化財保存課寺沢薫、西藤清秀、清水昭博、米川仁一の指導を頂いた。

7　現地調査にあたっては、工区長勝坂俊男・巽一郎をはじめ地元の方々に大変お世話になった。記して感謝したい。

本書所収の遺跡調査には下記の方々が参加した。

今中哲男　上西敏夫　上西チヅ子　上西喜典　梅木佳世子　大東實　大東サチ子
大東好子　大東眞由美　大矢寿恵子　鎌野雅章　木口茂　菊本芳子　金秉三
熊谷博志　大門淳一郎　大門精子　谷源以知　谷昭子　谷昭吾　辻正
徳西たか子　中村克子　林健太郎　東奥佳士　東田勁一　前田トシ　松本威
南勝美　峯村嘉明　向井いく子　森鳩トシ子　山本アイ　桝崎美代子　米谷貞子

8　本書の作成は、鐘方・大窪の他に松浦五輪美・熊谷博志（奈良大学大学院）が遺物整理を分担して進めた。石器は林健太郎の整理補助を受けた。また、製図作業は松本威・林健太郎・徳田奈穂子の援助を得た。遺物写真撮影は、秋山成人・松本威が分担して行った。

9　本書の作成にあたっては、下記の方々からご教示を頂いた。

泉拓良（京都大学）、井上智博（（財）大阪府文化財調査研究センター）、川村和正、小島孝修・鈴木康二（両名、（財）滋賀県文化財保護協会）、佐藤亜聖（（財）元興寺文化財研究所）、高瀬要一（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所）、橋本清一（京都府立山城郷土資料館）、福西貴彦（奈良大学大学院）、増子康眞（名古屋考古学会）、松田真一・岡田憲一（両名、奈良県立橿原考古学研究所）、柳浦俊一（島根県埋蔵文化財センター）、矢野健一（立命館大学）、山下勝年（知多古文化研究会）、横澤慈（泉南市教育委員会）　（敬称略　50音順）

10　本書の執筆分担者については、各章節の文末に記している。

11　遠部慎・宮田佳樹（国立歴史民俗博物館）、古環境研究所から頂いた自然科学分析報告を第４章として編集・掲載した。

12　本書の編集は大窪が担当した。

県営圃場整備事業田原東地区における
埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅱ
―別所下ノ前・辻堂・大谷口遺跡　水間遺跡―

目次

巻首図版

序文

例言

第１章　発掘調査の経緯と経過 …… 1

第２章　位置と環境 …… 4
　第１節　位置と自然環境 …… 4
　第２節　歴史的環境 …… 9

第３章　調査の方法と成果 …… 11
　第１節　別所下ノ前・辻堂遺跡 …… 11
　第２節　別所大谷口遺跡 …… 139
　第３節　水間遺跡 …… 165
　第４節　遺物散布地の試掘調査 …… 190

第４章　自然科学的分析 …… 204
　第１節　自然科学的分析の目的 …… 204
　第２節　放射性炭素年代測定 …… 204
　第３節　石器石材の産地同定 …… 212

第５章　総括 …… 219
　第１節　遺跡の調査成果 …… 219
　第２節　水間遺跡の検討 …… 224
　第３節　田原東地区における縄文時代の検討 …… 232

参考・引用文献 …… 246
　付載　概要報告書Ⅰの正誤表 …… 248

写真図版

図版目次

巻首図版

1　別所大谷口・下ノ前・辻堂遺跡周辺の航空写真

2　1．別所下ノ前遺跡E発掘区全景航空写真

　　2．別所辻堂遺跡A～D発掘区全景航空写真

3　別所辻堂遺跡D発掘区庭園風石組全景

4　1．別所大谷口遺跡と水間遺跡航空写真

　　2．水間遺跡第8・9次調査地全景航空写真

写真図版

調査地空中写真

1　田原東地区の空中写真

別所下ノ前・辻堂遺跡試掘調査①～⑦

2　1．調査前の別所下ノ前遺跡現況

　　2．調査前の別所下ノ前遺跡西方微高地E現況

3　1．調査前の別所辻堂遺跡現況

　　2．調査前の別所辻堂遺跡現況

4　1．第1発掘区

　　2．第2発掘区

　　3．第1発掘区縄文時代遺物包含層

　　4．第1発掘区縄文時代遺物包含層断面

　　5．第1発掘区黄島式土器出土状態

　　6．第3発掘区

　　7．第4発掘区

　　8．第5発掘区

5　1．第6発掘区

　　2．第7発掘区

　　3．第8発掘区

　　4．第9発掘区

　　5．第10発掘区炭窯検出状態

　　7．第11発掘区

　　8．第12発掘区

6　1．第13発掘区

　　2．第14発掘区

　　3．第14発掘区流路1

　　4．第14発掘区石組井戸

　　5．第14発掘区土坑

　　6．第15発掘区

　　7．第16発掘区

　　8．第17発掘区

7　1．第18発掘区

　　2．第19発掘区

　　3．第20発掘区

　　4．第20発掘区縄文土器出土状態

　　5．第21発掘区

　　6．第22発掘区

　　7．第23発掘区

　　8．第24発掘区

8　1．第25発掘区

　　2．第25発掘区古墳時代溝

　　3．第26発掘区

　　4．第27発掘区

　　5．第28発掘区

　　6．第29発掘区

　　7．第29発掘区

　　8．第30発掘区

別所下ノ前遺跡①～⑭

9　1．別所下ノ前遺跡A・B発掘区全景航空写真

　　2．別所下ノ前遺跡C・D発掘区全景航空写真

10　1．A発掘区全景

　　2．A発掘区垂直写真

　　3．B発掘区全景

11　1．B発掘区垂直写真

　　2．C発掘区全景

12　1．C発掘区垂直写真

　　2．SD01・02

　　3．SD02堆積土層

　　4．SK01

　　5．SK01堆積土層

13　1．D発掘区上層遺構面全景

　　2．D発掘区上層遺構面全景

14　1．SB01

　　2．SB01

　　3．SK03

4．ＳＸ01

5．Ｄ発掘区下層遺構面近景

15　1．縄文時代石敷炉と山流路2

2．縄文時代石敷炉周辺の上層堆積

3．発掘区南壁の堆積土層

16　1．縄文時代石敷炉検出状態

2．縄文時代石敷炉検出状態

17　1．縄文時代石敷炉

2．縄文時代石敷炉

18　1．Ｅ発掘区上層遺構面航空写真

2．Ｅ発掘区上層遺構面垂直写真

19　1．Ｅ発掘区上層遺構面全景

2．Ｅ発掘区上層遺構面全景

20　1．ＳＢ02

2．ＳＢ03

3．ＳＢ05

4．ＳＫ04

5．炭窯

6．ＳＫ08・09

7．ＳＤ04・05

8．ＳＤ07

21　1．Ｅ発掘区下層遺構面航空写真

2．Ｅ発掘区下層遺構面垂直写真

22　1．ＳＤ08

2．ＳＤ08

別所辻堂遺跡①～⑪

23　1．Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ発掘区全景航空写真

2．Ａ・Ｂ・Ｃ発掘区垂直写真

24　1．Ａ発掘区全景

2．Ａ発掘区縄文時代遺物包含層完掘状態

25　1．炭窯

2．ＳＤ02石組

3．ＳＸ01東壁の石組

4．ＳＫ01

5．ＳＫ02

6．ＳＫ02北壁の石組

7．ＳＫ03

8．ＳＫ04

26　1．Ｂ発掘区全景

2．石垣Ａと石垣Ｂ

3．石垣Ａと石垣Ｂ

27　1．ＳＫ05

2．ＳＫ05底の礫敷と貼床粘土

3．ＳＫ05東壁石組と貼床粘土

4．ＳＫ05東壁石組と貼床粘土の断面

5．ＳＫ06

6．ＳＫ06

7．ＳＫ07

8．ＳＫ08

28　1．Ｃ発掘区全景

2．ＳＫ09・10

3．Ｃ発掘区縄文時代遺物包含層

29　1．Ｄ発掘区垂直写真

2．Ｄ発掘区全景

30　1．ＳＫ12とＳＤ03

2．ＳＫ12

31　1．ＳＸ02

2．庭園風石組み

32　1．ＳＤ04と庭園風石組み

2．ＳＤ04屈曲部

3．ＳＤ04

4．庭園風石組み

5．庭園風石組み

6．庭園風石組み

7．庭園風石組み

8．庭園風石組み

33　1．Ｅ発掘区全景航空写真

2．Ｅ発掘区全景

別所大谷口遺跡①～⑦

34　1．調査前の遺跡現況

2．調査前の遺跡現況

35　1．第１発掘区

2．第２発掘区

3．第３発掘区

4．第４発掘区

5．第４発掘区古墳時代土坑

6．第４発掘区拡張区

7．第４発掘区拡張区炭土坑

8．第５発掘区

36　1．第６発掘区

2．第6発掘区拡張区掘立柱建物
3．第6発掘区拡張区掘立柱建物
4．第7発掘区
5．第7発掘区拡張区
6．第8発掘区
7．第9発掘区
8．第9発掘区

37 1．遺跡遠景航空写真
2．A発掘区中世遺構面全景

38 1．A発掘区縄文時代遺構面全景航空写真
2．A発掘区縄文時代遺構面全景

39 1．補足調査南区
2．補足調査北区

40 1．SK01堆積土層断面
2．補足調査北区縄文土器出土状態
3．補足調査北区西壁堆積土層

水間遺跡第8・9次調査①～⑩

41 1．調査前の遺跡現況
2．番上屋敷跡
3．番上屋敷近くの畔に置かれた石地蔵
4．調査地西端の道端に集められた石造物

42 1．第70発掘区
2．第70発掘区SD05
3．第71発掘区
4．第72発掘区
5．第72発掘区SB02検出状態
6．第73発掘区
7．第74発掘区
8．第74発掘区と番上屋敷跡

43 1．第75発掘区
2．第76発掘区
3．第77発掘区
4．第78発掘区
5．調査地遠景

44 1．L・M・N発掘区垂直写真

45 1．L発掘区全景
2．L発掘区全景

46 1．L発掘区谷部
2．SB01

47 1．SB02遺物出土状態
2．SB02・SK01

48 1．SB02北壁東側カマド
2．SB02北壁東側カマド東北隅の遺物
3．SK02、SD02・03
4．SB03
5．SD01
6．SX01・SD04
7．補足調査区
8．補足調査区堆積土層

49 1．水間城とM発掘区
2．M発掘区全景

50 1．N発掘区全景
2．N発掘区と番上屋敷跡

水間町遺物散布地試掘調査①～②

51 1．調査前の現況
2．第1発掘区
3．第2発掘区
4．第3発掘区
5．第4発掘区
6．第5発掘区
7．第6発掘区
8．第7発掘区

52 1．A発掘区全景
2．A発掘区谷部斜面堆積土層
3．A発掘区谷部斜面遺物出土状態

植ノ川町遺物散布地試掘調査①～②

53 1．調査前の現況
2．調査前の現況
3．第1発掘区
4．第2発掘区
5．第3発掘区
6．第4発掘区
7．第4発掘区炭窯
8．第5発掘区

54 1．第6発掘区
2．第7発掘区
3．A発掘区全景
4．A発掘区全景
5．A発掘区全景

6．SK01
7．A発掘区堆積土層
8．A発掘区縄文土器出土状態

別所下ノ前遺跡出土遺物①～⑨
55 縄文土器①
56 縄文土器②
57 縄文土器③
58 縄文土器④
59 縄文土器⑤・古墳時代の土器・勾玉
60 石器①
61 石器②
62 石器③
63 中世土器

別所辻堂遺跡出土遺物①～④
64 縄文土器
65 石器
66 中世土器
67 中世土器

別所大谷口遺跡出土遺物①～②
68 縄文土器①
69 縄文土器②・石器

水間遺跡第9次調査出土遺物①～③
70 縄文土器・石器①
71 石器②・古代土器
72 中世土器

水間町遺物散布地出土遺物
73 石器・奈良時代土器

植ノ川町遺物散布地出土遺物
74 縄文土器・石器

挿図目次

図1 県営圃場整備事業田原東地区の事業範囲
図2 大和高原西半郷の地形と地質
図3 水間町・別所町・植ノ川町一帯の航空写真
図4 水間町・別所町・植ノ川町一帯の地形と主要遺跡
図5 水間町・別所町・植ノ川町一帯の地質
図6 植ノ川町内の花崗岩の露頭
図7 同上 拡大
図8 別所町内の花崗岩の露頭
図9 別所町内の小野味泥岩層の露頭
図10 植ノ川町内の山盛の植生
図11 植ノ川町内の畦と水路の植生
図12 水間町内の畦の植生
図13 水間町内の打滝川付近の植生
図14 水間町・別所町・植ノ川町一帯の植生
図15 ド寺跡に散在する石造物
図16 西森の地蔵
図17 別所城郭図
図18 金刀比羅神社と薬楽寺
図19 別所下ノ前遺跡発掘区位置図
図20 別所辻堂遺跡発掘区位置図
図21 試掘調査第1・2発掘区、黄島式土器出土地点平面図・堆積土層図
図22 A発掘区平面図
図23 A発掘区縄文土器平面分布図
図24 A発掘区石器平面分布図
図25 ABラインより±2m間出土縄文土器垂直分布
図26 ABラインより±2m間出土石器垂直分布
図27 B発掘区平面図
図28 B発掘区縄文土器・石器平面分布図
図29 ABラインより±3m間出土縄文土器・石器垂直分布図
図30 C発掘区平面図
図31 SK01・02平面・断面図
図32 第20・C発掘区 縄文土器・石器平面分布図
図33 X＝-149,009～-149,012m間縄文土器垂直分布図
図34 X＝-149,014～-149,016m間縄文土器垂直分布図
図35 X＝-149,009～-149,012m間石器垂直分布図
図36 X＝-149,014～-149,016m間石器垂直分布図
図37 D・E発掘区上層遺構面平面図
図38 D・E発掘区下層遺構面平面図
図39 SB01平面図・断面図
図40 SK03・SX01平面図・断面図
図41 SA01平面図・断面図
図42 石敷墓平面図・断面図
図43 D発掘区縄文土器平面分布図

図44　D発掘区石器平面分布図
図45　Y＝-5,139.5～-5,140.5m間縄文土器垂直分布図
図46　X＝-148,999.7～-149,004.7m間縄文土器垂直分布図
図47　Y＝-5,139.5～-5,140.5m間石器垂直分布図
図48　X＝-148,999.7～-149,004.7m間石器垂直分布図
図49　SB02平面図・断面図
図50　SB03平面図・断面図
図51　SB04平面図・断面図、SB05平面図・断面図
図52　SK04・07・08・09、炭窯平面図・断面図、SK06平面図・断面図
図53　E発掘区縄文時代遺物包含層断面図
図54　E発掘区縄文土器平面分布図
図55　E発掘区石器平面分布図
図56　Y＝-5,113～-5,118m間縄文土器・石器垂直分布図
図57　X＝-149,893～-149,898m間縄文土器垂直分布図
図58　X＝-149,893～-149,898m間石器垂直分布図
図59　縄文土器分類模式図1
図60　縄文土器分類模式図2
図61　縄文土器分類模式図3
図62　縄文土器分類模式図4
図63　縄文土器分類模式図5
図64　縄文土器分類模式図6
図65　別所下ノ前遺跡出土縄文土器①
図66　別所下ノ前遺跡出土縄文土器②
図67　別所下ノ前遺跡出土縄文土器③
図68　別所下ノ前遺跡出土縄文土器④
図69　別所下ノ前遺跡出土縄文土器⑤
図70　別所下ノ前遺跡出土縄文土器⑥
図71　別所下ノ前遺跡出土縄文土器⑦
図72　別所下ノ前遺跡出土縄文土器⑧
図73　別所下ノ前遺跡出土縄文土器⑨
図74　別所下ノ前遺跡出土縄文土器⑩
図75　別所下ノ前遺跡出土縄文土器⑪
図76　別所下ノ前遺跡出土縄文土器⑫
図77　別所下ノ前遺跡出土縄文土器⑬
図78　別所下ノ前遺跡出土縄文土器⑭
図79　別所下ノ前遺跡出土縄文土器⑮
図80　別所下ノ前遺跡出土縄文土器⑯
図81　別所下ノ前遺跡出土縄文土器⑰
図82　別所下ノ前遺跡出土縄文土器⑱
図83　別所下ノ前遺跡出土石器①
図84　別所下ノ前遺跡出土石器②
図85　別所下ノ前遺跡出土石器③
図86　別所下ノ前遺跡出土石器④
図87　別所下ノ前遺跡出土石器⑤
図88　古墳時代の土器
図89　中世土器
図90　銭貨
図91　勾玉、石鍋・砥石
図92　A発掘区南壁堆積土層図
図93　A発掘区平面図
図94　炭窯平面図・断面図
図95　SD01・02石組平面図・断面図・立面図
図96　SX01・SK01平面図・断面図・立面図
図97　SK02平面図・断面図・立面図
図98　SK03・04平面図・断面図
図99　A発掘区 縄文土器・石器平面分布図
図100　Y＝-5,222～-5,224m間縄文土器・石器垂直分布図
図101　X＝-149,360.5～-149,361.5m間縄文土器・石器垂直分布図
図102　B発掘区堆積土層図
図103　B発掘区平面図
図104　石垣1・2平面図・立面図
図105　石垣2北端部平面図・立面図・断面図
図106　SK05平面図・断面図
図107　SK06・07・08平面図・立面図
図108　B発掘区縄文土器・石器平面分布図
図109　X＝-149,291～-149,293m間縄文土器・石器垂直分布図
図110　X＝-149,293～-149,297m間縄文土器・石器垂直分布図
図111　C発掘区平面図・南壁堆積土層図
図112　SK09・10・11平面図・南断面図
図113　D発掘区平面図・北壁堆積土層図
図114　SK12平面図
図115　庭園風石組み平面図・立面図
図116　E発掘区平面図図
図117　別所辻堂遺跡出土縄文土器①
図118　別所辻堂遺跡出土縄文土器②
図119　別所辻堂遺跡出土縄文土器③
図120　別所辻堂遺跡出土縄文土器④
図121　別所辻堂遺跡出土石器①

図122　別所辻堂遺跡出土石器②
図123　A発掘区出土中世土器
図124　B発掘区SK05出土中世土器
図125　B発掘区出土中世土器
図126　D発掘区出土中世土器
図127　漆器、銭貨・玉、砥石
図128　別所大谷口遺跡発掘区位置図
図129　第4発掘区古墳時代土坑
図130　第6発掘区平安時代後期の掘立柱建物と周辺の堆積土層図
図131　A発掘区中世遺構面平面図
図132　A発掘区縄文時代遺構面平面図
図133　西壁堆積土層図
図134　縄文時代遺物包含層堆積土層図
図135　A発掘区出土縄文土器平面分布
図136　A発掘区出土石器平面分布
図137　Y＝-4,879.5～-4,880.5m間縄文土器垂直分布図
図138　X＝-148,639～-148,641m間縄文土器垂直分布図
図139　Y＝-4,879.5～-4,880.5m間石器垂直分布図
図140　X＝-148,639～-148,641m間石器垂直分布図
図141　別所大谷口遺跡出土縄文土器①
図142　別所大谷口遺跡出土縄文土器②
図143　別所大谷口遺跡出土縄文土器③
図144　別所大谷口遺跡出土縄文土器④
図145　別所大谷口遺跡出土縄文土器⑤
図146　別所大谷口遺跡出土石器①
図147　別所大谷口遺跡出土石器②
図148　古墳時代～中世土器・砥石・銭貨
図149　水間遺跡第8・9次調査、水間町遺物散布地発掘区位置図
図150　L発掘区平面図
図151　SB01平面図・断面図
図152　SB02平面図・断面図・堆積土層図
図153　SB02東壁南側カマド平面図・断面図
図154　SB02北壁東側カマド平面図・断面図
図155　SB03平面図・断面図
図156　SX01、SK02・SD02・03平面図・断面図
図157　縄文時代遺物包含層補足調査区縄文土器・石器平面分布図
図158　Y＝-4,633～-4,635m間縄文土器・石器垂直分布図
図159　Y＝-4,623～-4,625m間縄文土器・石器垂直分布図
図160　M発掘区平面図
図161　番上塁敷及びN発掘区平面図
図162　水間遺跡出土縄文土器
図163　水間遺跡出土石器①
図164　水間遺跡出土石器②
図165　SB01・02出土土器
図166　SK02、SD01・04・05出土土器
図167　石造物実測図
図168　A発掘区平面図・堆積土層図
図169　水間町遺物散布地出土石器
図170　第6発掘区・A発掘区奈良時代遺物包含層出土の土器
図171　柚ノ川町遺物散布地試掘調査発掘区位置図
図172　第4発掘区炭窯平面図・断面図
図173　A発掘区平面図・堆積土層図
図174　A発掘区SK01平面図・断面図
図175　A発掘区出土縄文土器平面分布
図176　A発掘区出土石器平面分布
図177　A発掘区出土縄文土器垂直分布
図178　A発掘区出土石器垂直分布
図179　柚ノ川遺物散布地出土縄文土器
図180　柚ノ川町遺物散布地出土石器
図181　較正曲線と較正年代値
図182　炭素測定試料①
図183　炭素測定試料②
図184　試料NRNR－3
図185　前処理前の試料
図186　前処理後の試料
図187　出土黒曜石判別図（1）
図188　出土黒曜石判別図（2）
図189　黒曜石産地位置図
図190　柚ノ川イモタ遺跡の判別図（K/Ti×Fe/Ti）
図191　柚ノ川イモタ遺跡の判別図（Al/Si×K/Si）
図192　山田氏本拠地と別所・柚ノ川の位置関係
図193　水間遺跡変遷図①
図194　水間遺跡変遷図②
図195　水間柚の条里復原案
図196　奈良県押型文土器出土遺跡分布図
図197　田原東地区出土押型文土器変遷図
図198　奈良県出土複合鋸歯文と西日本複合鋸歯文出土遺跡
図199　押型文土器に伴う無文・撚糸文土器と厚手山形文土器
図200　田原東地区出土早期末前期初頭土器と参考資料

挿表目次

表1　県営圃場整備事業田原東地区における発掘調査一覧
表2　別所遺跡群　縄文土器出土点数一覧
表3　別所下ノ前遺跡出土縄文土器観察表①
表4　別所下ノ前遺跡出土縄文土器観察表②
表5　別所下ノ前遺跡出土縄文土器観察表③
表6　別所下ノ前遺跡出土縄文土器観察表④
表7　別所下ノ前遺跡出土縄文土器観察表⑤
表8　別所下ノ前遺跡出土縄文土器観察表⑥
表9　別所下ノ前遺跡出土縄文土器観察表⑦
表10　別所下ノ前遺跡出土縄文土器観察表⑧
表11　別所下ノ前遺跡発掘区別出土石器内訳表
表12　別所下ノ前遺跡C・D・E発掘区
　　層位別出土石器内訳表
表13　別所下ノ前遺跡出土石器観察表①
表14　別所下ノ前遺跡出土石器観察表②
表15　別所下ノ前遺跡出土石器観察表③
表16　別所辻堂遺跡出土縄文土器観察表①
表17　別所辻堂遺跡出土縄文土器観察表②
表18　別所辻堂遺跡発掘区別出土石器内訳表
表19　別所辻堂遺跡出土石器観察表
表20　別所大谷口遺跡出土縄文土器観察表①
表21　別所大谷口遺跡出土縄文土器観察表②
表22　別所大谷口遺跡出土縄文土器観察表③
表23　別所大谷口遺跡出土石器観察表
表24　水間遺跡出土縄文土器観察表
表25　水間遺跡出土石器内訳表
表26　水間遺跡出土石器観察表
表27　水間町遺物散布地出土石器観察表
表28　柚ノ川町遺物散布地出土縄文土器観察表
表29　柚ノ川町遺物散布地出土石器観察表
表30　採取した試料の情報
表31　採取した試料の分析状況
表32　測定結果と較正年代一覧
表33　奈良市内の分析一覧
表34　放射性炭素年代測定試料と方法
表35　放射性炭素年代測定の結果
表36　黒曜石製石器の分析結果
表37　産地原石判別群一覧
表38　ガラス質安山岩製石器の産地推定結果
表39　水間柚内検帳の名田一覧
表40　名田反数と定田・除田反数の関係
表41　奈良県内の押型文土器出土遺跡集成表
表42　田原東地区早期末前期初頭編年対比表
表43　田原東地区縄文時代遺跡消長表

第１章　発掘調査の経緯と経過

Ⅰ．経緯

奈良市東部山間の田原地域一帯において、生産性の高い地域農業の確立を図るために県営圃場整備事業（担い手育成型）を行なう計画があり、平成10年度に国の補助事業として採択された。この県営圃場整備事業は、田原東地区・田原西地区・田原南地区・田原北地区の４地区に大きく区分されて事業が進められている。県営事業であるため、原則的に奈良県で事業区域内の埋蔵文化財調査に対応する予定であった。しかし諸種の都合により、平成11年度から奈良県の委託を受けて田原東地区の埋蔵文化財調査を奈良市教育委員会が行なうことになった。

Ⅱ．経過

平成11年10月25日付教文第407号で奈良県教育委員会教育長から田原東地区事業予定地内の遺跡有無確認踏査願いの依頼があった。事業範囲が広域であるため、工事計画予定に合わせて４度の踏査を実施し、遺物散布の有無と試掘調査の必要箇所を確認した。そして、この踏査結果に従いつつ、各年度の工事対象範囲内で試掘調査および発掘調査を継続してきた。それぞれの調査経過について以下に概述すると共に、各年度に調査した遺跡の一覧を表１にまとめておく。

なお、圃場整備事業予定地については改正前の日本測地系平面直角座標系Ⅳによる測量網と基準点成果があり、それに基づく1/1000の地形測量図が作成されていた。そこで調査にあたっては、この成果を全面的に利用した。そのため、平成14年度から導入された世界測地系は、継続的な調査成果の整合性を考慮して基本的に使用していない。

平成11・12年度の調査

最初の踏査は平成11年12月３日に水間町内で行ない、上水間交差点南側区域の国道369号線以西を対象地とした。『東山村史』によると過去にここから石器や上器が出土しており、奈良県遺跡地図には国道369号線以東を包括する範囲が遺物散布地として記載されている。実際の踏査でも広域的に遺物の散布が認められたため、平成11・12年度に試掘調査を行なった（水間遺跡第１・２次調査）。その結果、ほぼ全域で遺物の出土があり、縄文時代から鎌倉時代頃の遺跡が周辺に存在する可能性が高くなった。そこで、やむを得ず圃場整備工事によって遺跡が削平される地点のみを対象に発掘調査を実施した（水間遺跡３次調査）。

また、２回目の踏査を平成12年９月27日に柚ノ川町内で行ない、石器と上器片の散布する地点を３箇所で確認した。

平成13年度の調査

柚ノ川町内の踏査によって遺物の散布が認められた箇所を中心に試掘調査を実施し、縄文時代遺物包含層

表１　県営圃場整備事業田原東地区における発掘調査一覧

調査年度	遺跡名	調査内容	調査期間	調査面積	報告
平成11年度	水間遺跡（１次）	試掘調査	平成12年2月21日～3月24日	1,266㎡	平成12年度概報
平成12年度	水間遺跡（２次）	試掘調査	平成12年７月24日～９月５日	790㎡	平成12年度概報
	水間遺跡（３次）	発掘調査	平成12年10月30日～平成13年2月15日	3,733㎡	平成12年度概報
平成13年度	柚ノ川イモタ・キトラ遺跡（１次）	試掘調査	平成13年6月20日～7月19日	690㎡	概要報告Ⅰ
	柚ノ川イモタ遺跡（２次）	発掘調査	平成13年10月２日～12月28日	2,189㎡	概要報告Ⅰ
	水間遺跡（４次）	試掘調査	平成14年1月17日～3月29日	1,892㎡	概要報告Ⅰ
平成14年度	水間遺跡（５次）	試掘調査	平成14年5月13日～14年6月11日	600㎡	概要報告Ⅰ
	水間遺跡（６次）	発掘調査	平成14年6月26日～10月11日	2,400㎡	概要報告Ⅰ
	柚ノ川キトラ遺跡（２次）	発掘調査	平成14年10月17日～11月20日	150㎡	概要報告Ⅰ
	別所下ノ前遺跡（１次）	試掘調査	平成14年12月２日～平成15年1月9日	835㎡	本書報告
平成15年度	別所法受遺跡（１次）	試掘調査	平成15年5月6日～6月4日	690㎡	本書報告
	水間遺跡（７次）	試掘調査	平成15年6月23日～8月28日	576㎡	概要報告Ⅰ
	別所下ノ前遺跡（２次）	発掘調査	平成15年9月16日～平成16年1月9日	2,150㎡	本書報告
平成16年度	別所法受遺跡（２次）	発掘調査	平成16年5月11日～16年8月30日	2,100㎡	本書報告
	水間町内遺物散布地	試掘調査	平成16年9月21日～16年11月5日	766㎡	本書報告
	別所下ノ前遺跡（３次）	試掘調査	平成16年11月12日～17年1月7日	1,090㎡	本書報告
平成17年度	柚ノ川町内遺物散布地	試掘調査	平成17年5月30日～17年7月12日	557㎡	本書報告
	別所下ノ前遺跡（４次）	発掘調査	平成17年7月14日～17年11月11日	1,580㎡	本書報告
	水間遺跡（８次）	試掘調査	平成17年11月28日～18年1月13日	555㎡	本書報告
平成18年度	別所大谷口遺跡（１次）	試掘調査	平成18年5月22日～18年6月28日	941㎡	本書報告
	別所大谷口遺跡（２次）	発掘調査	平成18年6月29日～18年9月5日	800㎡	本書報告
	水間遺跡（９次）	発掘調査	平成18年9月12日～18年12月8日	805㎡	本書報告

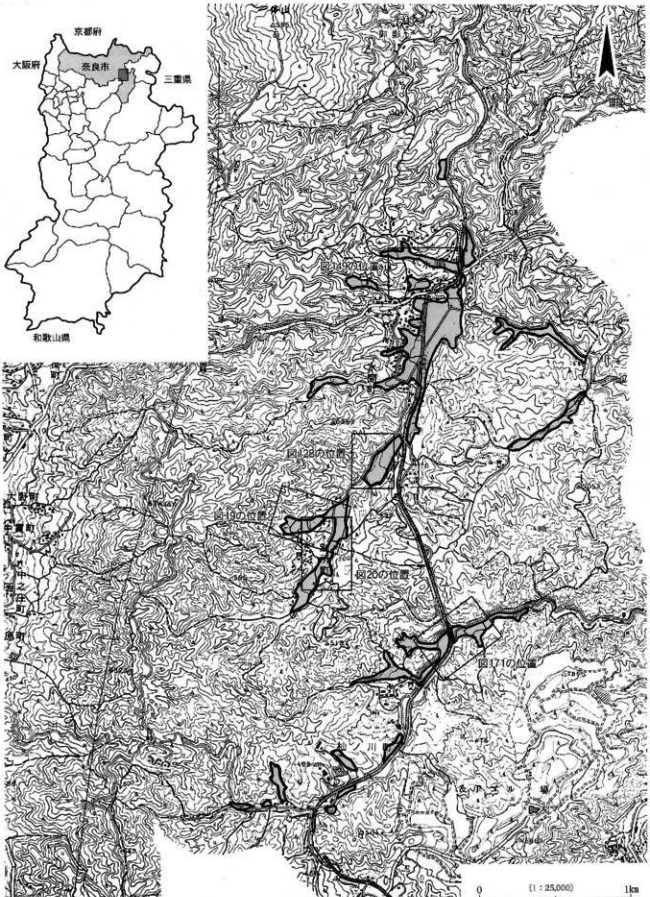


図１　県営圃場整備事業田原東地区の事業範囲（１/25,000）

が堆積する２つの遺跡を発見した（柚ノ川イモタ・キトラ遺跡第１次調査）。このうち、柚ノ川イモタ遺跡を発掘調査し、縄文時代早期から後期の土器・石器が多く出土した（柚ノ川イモタ遺跡第２次調査）。

さらに、整備事業の本格化に伴って広域的な遺跡の有無確認が必要となり、水間町・柚ノ川町内の未踏査区域と別所町・曙光町内で踏査を実施した。その結果に基づき、水間町内の国道369号線以東の一部を試掘調査した（水間遺跡第４次調査）。

平成14年度の調査

平成13年度から引き続いて水間町内の国道369号線以東の一部を試掘調査した（水間遺跡第５次調査）。その調査成果に基づいて、やむを得ず工事で遺跡が削平される地点のみを対象に発掘調査を実施した（水間遺跡第６次調査）。

また、柚ノ川キトラ遺跡についても協議がまとまり、盛土工法によって大部分を地下保存することになった。このため、削平されるわずかな範囲と土砂を採取する北側背後の丘陵上だけを調査した（柚ノ川キトラ遺跡第２次調査）。

さらに、別所町で確認した遺物散布地内を来年度から工事する計画となり、支道１号線東側の北半部を試掘調査して縄文時代と鎌倉時代頃の遺跡を発見した（別所辻堂遺跡第１次調査）。

水間遺跡第６次調査域周辺で発掘調査が急遽必要になった。調査を実施したところ、縄文時代の遺物包含層がほぼ全面的に広がることを確認した（水間遺跡第７次調査）。

昨年度に試掘調査した別所下ノ前遺跡を発掘調査し、縄文時代早期の流路跡や鎌倉時代の掘立柱建物跡などを検出した（別所下ノ前遺跡第２次調査）。

平成16年度の調査

平成15年度に試掘調査した別所辻堂遺跡の発掘調査を実施した。縄文時代早期の遺物包含層と室町時代の土坑・石垣・溝などを検出した（別所辻堂遺跡第２次調査）。

水間遺跡推定範囲よりも北側に位置する東西方向に細長い谷部を試掘調査した結果、局地的に奈良時代の遺物包含層を認めたが、遺構はなく、遺跡と認定するまでにはいたらなかった（試掘04－15）。

別所町では、別所下ノ前遺跡第２次調査地点の西側に広がる谷部を試掘調査し、縄文時代の遺物包含層や鎌倉時代の上坑・柱穴などを確認した（別所下ノ前遺跡第３次調査）。

平成17年度の調査

柚ノ川イモタ遺跡から東へ約300mの地点で工事が予定されたため、試掘調査を行なった。縄文時代早期末前期初頭の遺物包含層を局地的に確認したが、遺物量は極めて少なく、本調査するには当たらないと判断した（試掘05－08）。

別所町では、平成16年度の試掘調査結果に基づいて別所下ノ前遺跡第４次調査を実施した。縄文時代早期、中期末～後期の遺物包含層を確認し、早期の遺構面からは石敷のある炉跡１基を検出した。また、鎌倉時代の掘立柱建物跡・土坑なども認められ、第２次調査地と一連の屋敷跡が広がることが判明した。

さらに、来年度の工事が予定されている水間遺跡北端部で試掘調査を行なったところ、古代以前と鎌倉時代の土坑・溝などを確認した（水間遺跡第８次調査）。

現地調査と併行して、発掘調査概要報告書Ⅰの編集を進め刊行した。

平成18年度の調査

別所町の北口にあたる谷間地で今年度に圃場整備工事を行なう予定となり、まずここの試掘調査が必要となった。調査の結果、縄文時代の遺物包含層と古墳時代の土坑および平安時代後期（11世紀）の掘立柱建物跡を検出し、遺跡の存在を確認した（別所大谷口遺跡第１次調査）。そこで、やむを得ず削平される箇所に発掘区を設定して本調査を実施した（別所大谷口遺跡第２次調査）。縄文時代早期の遺物包含層が良好に遺存し、神宮寺式・「山芦屋期」・茨島式・石山式などの土器が出土した。

続いて、平成17年度に試掘調査を行なった地点で水間遺跡の本調査を実施し、縄文時代前期の包含層、飛鳥～奈良時代の竪穴式住居２棟、鎌倉時代の溝・土坑などの遺構を確認した（水間遺跡第９次調査）。

現地調査と併行して、発掘調査概要報告書Ⅱの編集を進め刊行した。（鍋方）

第２章　位置と環境

第１節　位置と自然環境（地形・地質、植生）

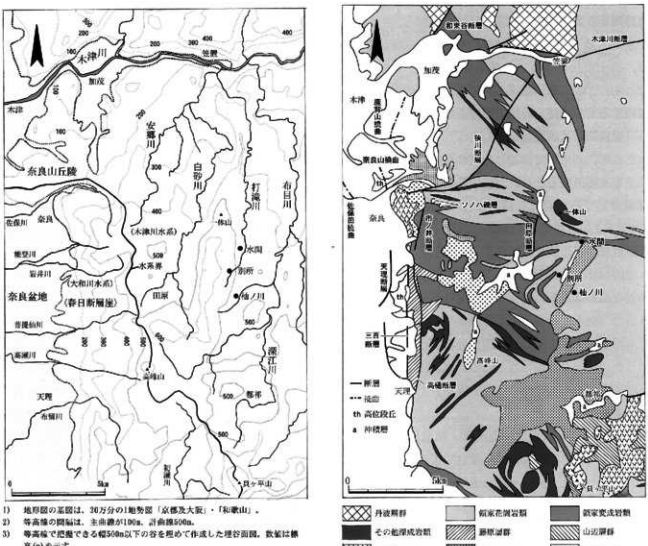
Ⅰ．位　置

別所下ノ前・辻堂・大谷口遺跡が位置する奈良市別所町、水間遺跡が位置する同水間町、柚ノ川町遺物散布地が位置する同柚ノ川町は、いずれも奈良旧市街地の東方約10kmで大和高原の西半部中央付近にあたる。

Ⅱ．地形・地質

大和高原　大和高原は、奈良盆地とその北にある奈良山丘陵の東側に広がる山地で、北は木津川を介して信楽山地と、西は伊賀盆地と、南は高見山地とそれぞれ接する。山頂部は南から北に向かって緩やかに低くなっており、標高400～500mの定高性を示す部分が広くみられる。奈良盆地に接する山麓には天理断層・三百断層・高樋断層といった南北方向の逆断層が走っており、西辺部は春日断層崖と呼ばれる急崖になっている。（図２左）

大和高原の基盤岩は、白亜紀後期（約6500万～9900万年前）の火山活動によって形成された領家花崗岩類と、ジュラ紀（約１億4200万～２億400万年前）の堆積岩である丹波層群の原岩が領家花崗岩類の形成時に接触変成作用を受けて変成した領家変成岩類であ



1)　地形図の基図は、20万分の1地勢図「京都及大阪」・「和歌山」。
2)　等高線の間隔は、主曲線が100m、計曲線500m。
3)　等高線で把握できる幅500m以下の谷を埋めて作成した埋谷面図。数値は標高(m)を示す。
4)　地質図は、20万分の1地質図「京都及大阪」(1988)・「和歌山」(1993)を一部改変し、再トレースして引用。

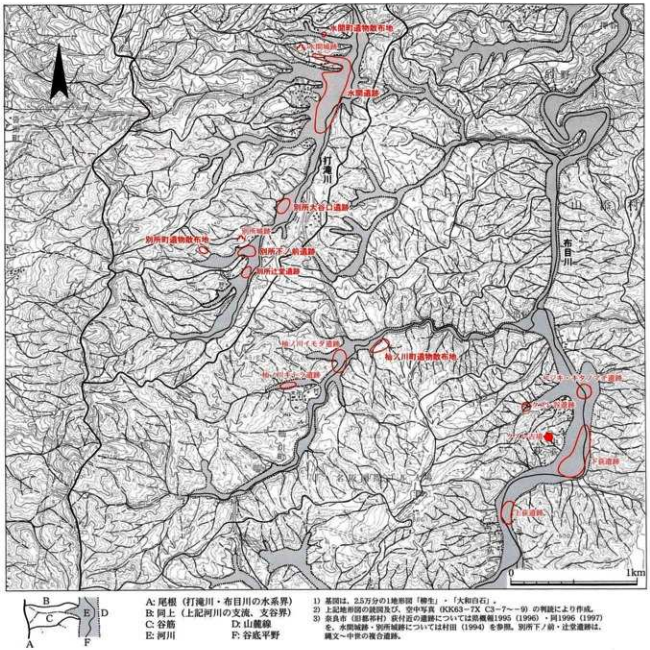
図２　大和高原西半部の地形（左）と地質（右）（１/200,000）

る。西半部の山頂部付近には、新第三紀の中新世中期（約1100～1600万年前）に形成された堆積岩（藤原層群・山辺層群・地獄谷累層・都介野累層・室生火砕流堆積物）が広く分布する。その他、西辺部では中新世中期に形成された三笠安山岩、同鮮新世後期（約180万～360万年前）に形成されたソノハ礫層が分布する。なお、西縁部や奈良山丘陵でみられる水成堆積層の大阪層群は、第四紀更新世前期（約70～160万年前）に形成された下部層に相当する。（図２右）

大和高原上を流れる河川は木津川水系であるが、西辺部の春日断層崖は佐保川・布留川・初瀬川といった大和川水系の河川の上流部になっている。西半部を流れる主な河川には白砂川・打滝川・布目川がある。いずれも北流していて、侵食により南北に細長い河谷と山ひだが形成されている。（図２左）

別所町・水間町・柚ノ川町　別所下ノ前・辻堂・大谷口遺跡がある別所町や水間遺跡がある水間町は、ともに打滝川の上流域にあたる。別所町はその上流寄りを占め、水間町はその下流寄りを占める。この地域の河谷は、左岸側の谷側面が高低差200m程度で線状の

図３　水間町・別所町・柚ノ川町一帯の航空写真（国土地理院 1963 年撮影　KK63-7X　C3-8 を 78％縮小、上が北）



A: 尾根（打滝川・布目川の水系界）
B: 河川（上記河川の支流、支谷界）
C: 谷筋　　D: 山麓線
E: 河川　　F: 谷底平野

1）基図は、2.5万分の1地形図「柳生」・「大和白石」。
2）上記地形図の範囲及び、空中写真（KK63－TX（3－7～－9）の判読により作成。
3）奈良市（旧都祁村）荻付近の遺跡については黒橋編1995（1996）・同1996（1997）を、水間城跡・別所城跡については村田（1994）を参照。別所下ノ前・辻堂遺跡は、縄文～中世の複合遺跡。

図４　水間町・別所町・柚ノ川町一帯の地形（起伏・水系）と主要遺跡（1/30,000）

侵食が顕著であるのに対し、右岸側の谷側面は高低差50m程度で線状の侵食がほとんどみられない。谷底には谷側面から流れ込んだ土砂が堆積して谷底平野が形成されている。土砂が左岸側から多量に流れ込んだ結果、川は右岸寄りを流れる。別所町と水間町の境界付近では狭隘部があり、これを挟んで下流寄りの水間町内の方が広くなる。別所下ノ前・辻堂・大谷口遺跡や水間遺跡は、いずれもこの谷底平野上に位置する。

柚ノ川町遺物散布地がある柚ノ川町は、奈良市（旧都祁村）下荻付近で分岐する布目川の支流の流域を占める。この支流の河谷は両岸とも谷側面の線状の侵食が顕著で、中流部付近の谷底では谷側面から流れ込んだ土砂が堆積して細長い谷底平野が形成されている。柚ノ川町遺物散布地は、この谷底平野の最も下流寄りに位置する（図３・４）。

これらの地域に広く分布する基盤岩の領家花崗岩類は主に阿保花崗岩と呼ばれる細－中粒黒雲母花崗岩で、他に城立トーナル岩と呼ばれる片状中粒角閃石黒雲母花崗閃緑岩もみられる。また領家変成岩類は泥岩や砂岩を原岩とし接触変成作用を強く受けた縞状片麻岩である。打滝川と布目川の水系界となる尾根上には、新第三紀の中新世に形成された都介野累層に属す

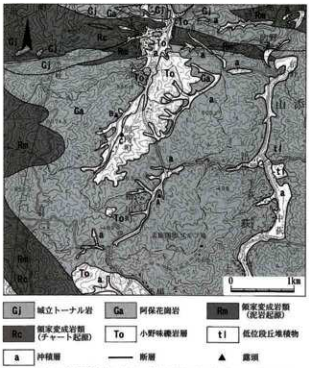


図５　水間町・別所町・柚ノ川町一帯の地質（1/60,000）

る小野味礫岩層と呼ばれる領家花崗岩・変成岩類の礫岩層が分布する。(図５～９)

なお、以上の記述は、主に太田・成瀬他（2004)、尾崎・寒川他(2000)、西岡・尾崎他(2001)、橋本(2005)をもとにしてまとめた。

Ⅲ．植　生

現存植生　別所町・水間町及び柚ノ川町一帯の植生は、いずれも河谷の谷側面となる山腹では広くスギ（スギ科）・ヒノキ（ヒノキ科）の植林となっており、谷底平野では広く水田となってイネ（イネ科）が栽培され、畦や路傍で雑草群落が成立しているのが特色である。図14は1985年に環境庁が発行した現存植生図であるが、現状も当時と大きく変わっていない。

かつて里山の雑木林を形成していたアカマツ（マツ科）や落葉広葉樹のクヌギ・コナラ（ともにブナ科）の群落は所々でみられる。谷底平野に面した山麓の斜面にはササ類（イネ科）の群落やワラビ（ウラボシ科）等のシダ植物の群落がみられる。水間町内の山麓の斜面では、チャノキ（ツバキ科）が栽培されている。

なお、水田の畦や路傍の雑草群落を構成する植物については、2005年10月末に現地で大まかな観察を行った。水田の畦や休耕地にはメヒシバ・エノコログサ(イ

図６　柚ノ川町内の花崗岩の露頭（図５のA地点、北から）

図７　同上　拡大（北から、実体視可）

図８　別所町内の花崗岩の露頭（図５のB地点、東から）

図９　別所町内の小野味礫岩層の露頭(図５のC地点、西から)

図 10　柚ノ川町内の山麓の植生（図 14 のＡ地点、南から）

図 11　柚ノ川町内の畦と水路の植生（図 14 のＢ地点、南から）

図 12　水間町内の畦の植生（図 14 のＣ地点、南から）

図 13　水間町内の打滝川付近の植生（図 14 のＤ地点、東から）

※5万分の1現存植生図「奈良」・「桜井」（ともに1985）を一部改変し、再トレースして引用。

図 14　水間町・別所町・柚ノ川町一帯の植生　(1/60,000)

ネ科）、ヨモギ（キク科）、イヌタデ（タデ科）等が多く、路傍にはカゼクサ（イネ科）やオオバコ（オオバコ科）が、荒地にはセイタカアワダチソウ（キク科、近現代の帰化植物）、ススキ（イネ科）やクズ（マメ科）がみられる。河道沿いや水路沿いはミゾソバ（タデ科）が占める。ヨシ（イネ科）は、水間町内の打滝川の河道内でみられる。（図10 ～ 13）

過去の植生　水間町付近と柚ノ川町付近については花粉分析による過去の植生の検討がなされている。水間町付近については、水間遺跡の第３・６次調査で古墳～江戸時代の谷内の堆積層を主な試料として行った花粉分析の結果から、森林については古墳～平安時代にはカシ林であったのが、鎌倉～室町時代にアカマツを主とする二次林化が進み、江戸時代以降はスギやヒノキの造林がなされたことが、耕地については古墳～平安時代には谷で小規模な水田が営まれていたのが、鎌倉時代以降に拡大し、水田とともにソバ（ソバ科）・ササゲ属（マメ科）などの作物を栽培する畑地が営まれたことがそれぞれ推定されている。

柚ノ川町付近については、柚ノ川イモタ遺跡の第２次調査で平安時代末～江戸時代の谷内の堆積層を試料として行った花粉分析の結果から、森林や耕地について水間町付近と同様の変遷が推定されている。（安井）

第２節　歴史的環境

柚ノ川町は旧田原村、水間町・別所町は旧東山村に属したが、1957年（昭和32年）の町村合併で奈良市となった。いずれも旧添上郡の東端に近く、大和高原の中央部に位置する。大和高原では、河川沿いや谷間などにおいて縄文時代の遺跡が見つかっており、山添村の大川遺跡は縄文早期の標識土器（大川式土器）が出土した遺跡として有名である。また、同村の桐山和田遺跡・北野ウチカタビロ遺跡・上津大片刈遺跡からは縄文草創期の遺物が出土し、縄文時代が始まる頃には周辺地域で人間が生活し始めていたことがわかる。

『東山村史』には水間でかつて石鏃が採集され、縄文時代の遺跡がここにも存在した可能性が述べられている。これまでに行なった水間遺跡や柚ノ川イモタ・キトラ遺跡の調査でも縄文早期、中～後期の遺物が出土しているので、縄文時代において断続的に人々が田原東地区内に住み着いていたのは間違いない。

大和高原における弥生時代の遺跡としては都祁に所在するゼニヤクボ遺跡がよく知られている。遺跡の盛行時期は、弥生時代中期と後期後半～古墳時代前期の２時期に大きく分かれる。柚ノ川イモタ遺跡では弥生時代中期の土器が出土しているが、造成土内に包含されていた遺物であり、その実態は不明である。

水間遺跡からは弥生時代後期後半～古墳時代前期の遺物が多く出土し、縄文時代からしばらく時間を置いて集落が再び営まれたと推定できる。そして、これ以降になると時間的に連続する遺物が継続的に出土するようになり、周辺での開発が本格化していく。なお、かつて古墳時代の土器が出土した地点の近くに「ツカノモト」という地名があり、『東山村史』では古墳の存在も想定されたが、試掘調査によって近世以降に石を盛り上げただけの小さな塚であることが判明している。何らかの信仰の対象となった時期もあるらしいが判然としない。

飛鳥～奈良時代になると、都城や寺院の建設に伴って山地の豊富な森林資源を開発する必要性が生じたのを契機に、その拠点として柚の整備が進む。水間が柚に編入された時期はよくわからないが、「東大寺政所下文案」（1056年）によって聖武天皇が施入した柚であったことがわかる。新薬師寺が東大寺の末寺別院であった関係から、後に新薬師寺の修造料として割かれたと考えられている。平安時代後期になると、柚の荘園化が進んで周辺の低地は水田開発されていく。「水間柚内検帳注文案」（1150年）には、各水田の字名や大きさと共に条里に基づく坪付け番号が記されており、条里による区画整理がこの時点で行なわれていた可能性が高い。

中世には、荘園村落の有力者などが独立性を高め、地侍となった水間氏や別所氏は山上に屋敷を構えるまでに成長する。中世後期の築造と推定される水間城や別所城はその屋敷跡で、当時の面影をよく残している。水間氏・別所氏ともに大乗院方の山田氏の配下にあったことが『大乗院寺社雑事記』文明３年（1471年）閏８月５日条「近年山内ハ悉皆山田成進退者也」の記事から想定されている。この頃になって、ようやくこの地域の動向が文献などの記録からわずかながらも読み取れるようになってくる。

水間城跡は方形単郭環壕形式の山内型館城で、水間遺跡の北西隅に位置する。水間遺跡第８・９次調査地は水間城跡の南東約100mの地点にあり、城跡の麓に近接する。城跡から小さな谷を挟んですぐ南側の尾根上には下寺（念仏寺）跡があり、水間氏の菩提寺と考えられている。現在は畑地となり、五輪塔の一部や石仏、台座が散在する。寛文６年（1666年）の念仏講碑が以前あったというが、今はなくなっている。この他に尾ノ上寺、観薬寺、多聞寺、薬師堂がかつて存在し、現存の西岸寺と合わせて六ヶ寺が水間にあったと伝える。尾ノ上寺跡は打滝川渡河点西側の尾根先端にあり、承応４年（1655年）の六字名号碑や文化元年（1804年）の十九夜観音像が祀られている。多聞寺跡はG発掘区（平成12年度調査）の南側に位置したようで、そ

図15　下寺跡に散在する石造物

こにあった念仏講碑は現在西岸寺に移されている。

城跡から東へのびる尾根の南側中腹に番上（バンジョウ）屋敷跡があり、石垣や石組井戸が残っている。番上屋敷跡の付近から水間氏に関わる骨壷がかつて出土したというが詳細は不明である。春日大社石燈籠に残る銘文から、遅くとも天文２年（1533年）には水間氏がここに居住し、春日大社の神事に奉仕していたことが知られる。

水間城跡の南側には、水間峠越えの奈良道（主要地方道奈良名張線）が東西に走っており、その道沿いには石仏が今なお幾つか認められる。峠の登り口にある「西森の地蔵（足痛地蔵）」は転石を利用した磨崖像で、道路北側の山林脇に残っている。

一方、別所城跡は技巧の進んだ山内型館城で、別所町の集落入り口西側にそそり立つ尾根の頂部に位置する。別所氏の墓地は、同じ尾根づたいに南西方向へ約150m行った南斜面中腹にある北浦殿様墓地と谷を挟んでその南側にある尾根上の庵ノ山殿様墓地の２箇所に分かれている。北浦殿様墓地には宗久・宗治夫妻の墓碑があり、庵ノ山殿様墓地には道清禅門の墓碑と多くの石仏・五輪塔などが残る。集落の北辺に別所氏の墓地があるのに対して、その南辺に位置する金刀比羅神社（六社権現）と極楽寺（阿弥陀堂）が別所氏の氏神と菩提寺であった。金刀比羅神社には『別所地下ノ神事当屋掟』(1567年）と『藤原氏人別所半右衛門尉正久　當社并歴代之廟所極楽寺江米壹石令寄進状』(1661年）が伝えられており、別所の歴史を考える上で非常に重要な資料となっている。また、極楽寺に伝わる本尊阿弥陀如来像と不動明王立像・地蔵菩薩立像

図16　西森の地蔵（左）と旧多聞寺跡念仏講碑（右）

図17　金刀比羅神社と極楽寺

図18　庵ノ山殿様墓地

の３像は、平安時代末期の優品として奈良県指定文化財になっている。ただし、どのような経緯でこのような仏像が別所にもたらされたのかはよくわからない。別所氏は豊臣政権によって本領を没収されて没落し、寛文元年（1661年）に村から退去していったという。

さて、田原東地区で今回遺跡を確認した水間・別所・柚ノ川を地形的に比較すると、最も大きく開けた土地が水間であり、別所・柚ノ川は本来それに近接した小地域に過ぎない。柚、荘園としての記録が古くから水間だけに残り、そこに庄司が存在した点を考慮すると、水間はこの地域の拠点的地位を得ていたとみられる。そして古代には、ここを拠点としつつ周辺域の開発や統合が漸次的に及んでいったのではないかと思われる。しかし中世後期になると、南から有力地侍の山田氏が別所・柚ノ川地域に勢力を伸ばして領有化し始めた可能性が考えられる。

別所が「水間ヶ別所」と呼ばれたり、元禄年間に柚ノ川村が水間村から独立したという記録は、近世以降に認められるもので、今のところ中世にまでさかのぼらない。この点で、両地域が再び水間に包括されるようになったのは近世になってからのことと思われる。おそらく、豊臣・徳川政権による地域再編の結果であろう。　（鐘方）

第３章　調査の方法と成果

平成15年度から別所町内で圃場整備工事が行なわれる予定となり、平成14～18年度にかけて４度の試掘調査を実施した。その結果、南北３つの区域で遺跡の存在を確認し、発掘調査の必要性が生じた。いずれも新規発見の遺跡であるため、調査地の字名に因んで北から別所大谷口遺跡、別所下ノ前遺跡、別所辻堂遺跡と命名した。

この中で、別所下ノ前遺跡と別所辻堂遺跡は近接しており、当初は併行して試掘調査を行なっている。そこで、調査過程を明示する必要性から両遺跡の調査成果については第１節に一括して記述することにしたい。別所大谷口遺跡および水間遺跡第８・９次調査の成果については第２・３節で試掘調査の概要を含めて述べ、その他の試掘調査成果については第４節を設けて報告する。

第１節　別所下ノ前・辻堂遺跡

Ⅰ．試掘調査の方法と概要

試掘調査は、事業地内での遺跡の正確な分布範囲とその時期を確定することを目的として、主に切土工事予定箇所を対象に発掘区を合計30箇所設定し実施した。対象面積が広いため、整備工事の進捗に合わせ３度に分けて試掘調査を行なっている。第１～７発掘区は別所下ノ前遺跡第１次調査として平成14年12月２日～平成15年１月９日まで、第８～17発掘区は別所辻堂遺跡第１次調査として平成15年５月６日～６月４日まで、第18～30発掘区は別所下ノ前遺跡第３次調査として平成16年11月12日～平成17年１月７日まで調査した。

各発掘区の平面図は1/100、土層図は1/20で基本的に作成し、平面図に旧国土座標を記入して調査地での位置関係を記録した。なお、発掘区番号及び地形の名称は、図19・20に示した通りである。遺構番号は本調査区のそれに従う。

１．各発掘区の概要

第１発掘区（92㎡）　高低差のある南北２枚の水田にまたがって調査を行なった。その結果、南側の高い水田において遺跡を確認したが、これより1.6m低い北側の水田は地下げによって大きく削平を受けており（地山の標高472.68m）、遺跡は遺存していなかった。南側水田の基本的な層序は、耕土の下に灰色土、暗灰褐色土（13世紀の遺物包含層）と続き、淡黄灰色礫混シルトないしは淡青灰色砂礫の地山を基盤とする遺構面（標高474.0m前後）となる。

発掘区西壁に沿って、遺構面から掘り込まれた溝ＳＤ05を検出したため、一部西側に発掘区を拡張してその幅を確認した。南北13m以上、幅１m前後、深さ0.3mで、北端で西へ曲がっていくと推定された。埋土は黄灰色砂礫で、13世紀後半の遺物が多く包含されていた。ＳＤ05は、発掘区西側の畦畔と南北にほぼ並行し、北端も畦畔と同じ位置で西へ曲がると思われるので、現在残っている畦畔の一部が13世紀後半の地割を踏襲している可能性が考えられた。

また、遺構面の一部が黄色シルトに変わる範囲があり、一部を試掘したところ、上層から縄文時代早期末前期初頭の条痕文土器１点、中層から早期中葉の黄島式上器１個体が割れた状態で出土した（図21）。この縄文時代遺物包含層は南北約７m幅で東西方向に広がっており、旧流路（ＳＤ08）の埋土中に遺物が堆積して形成された包含層と推定される。湧水のため底まで確認できなかったが、旧流路の深さは0.85m以上である。

第２発掘区（119㎡）　高低差のある東西２枚の水田にまたがって調査を行なった。西高東低に造成された水田面における比高差は1.36mあり、いずれの水田も地下げによって旧地形の西半分を大きく削平し造成されている。削平を免れた地点での基本的な層序は東西で概ね共通し、耕土の下に灰色土、暗灰褐色土（12～13世紀の遺物包含層）と続き、黄色礫混シルト・黄灰色砂礫などで構成された地山を基盤とする遺構面となる。東端付近では、東へ向かって徐々に低くなり、流路東肩部から急激に地山が下がっている。遺構面の標高は、一段高い西側で475.6m前後、低い東側で474.1m前後であり、同一水田面上において第１発掘区よりも遺構面が0.1m高くなっている。

西側で土坑ＳＫ04、東端で南北溝ＳＤ07を検出した。第１発掘区で確認したＳＤ05の南側の続きは検出

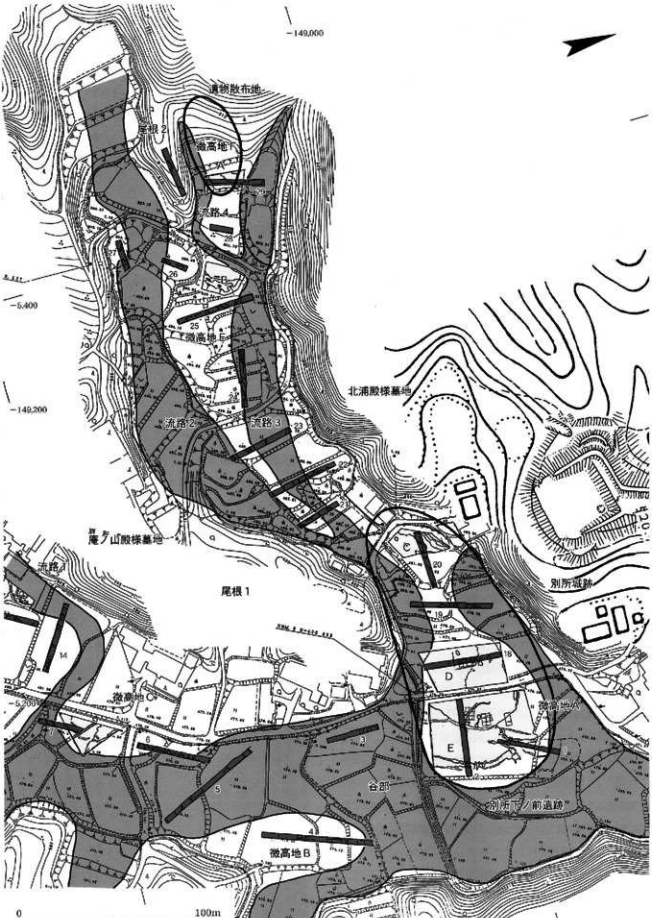


図19　別所下ノ前遺跡発掘区位置図（1/2,000）

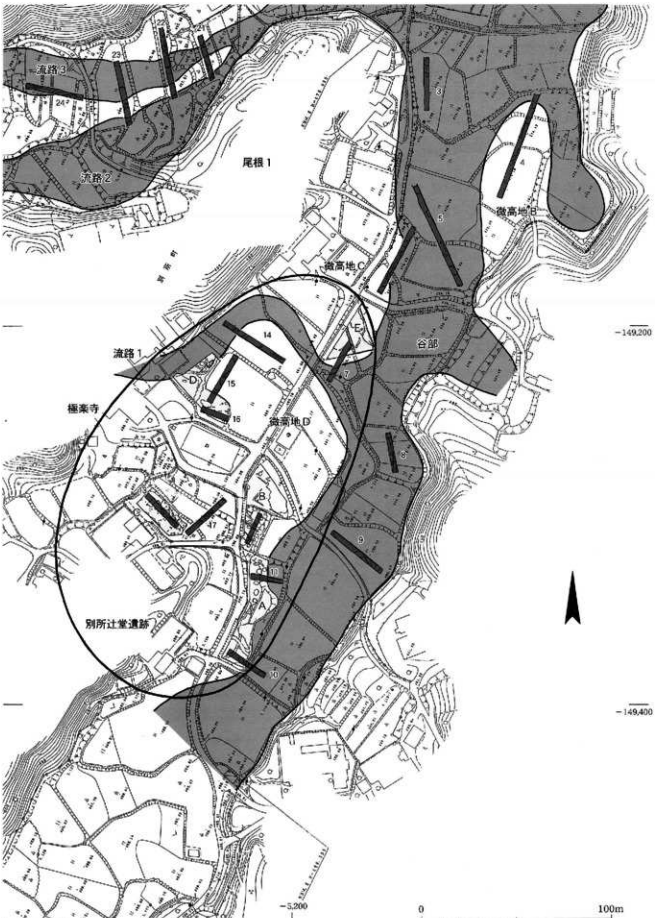


図 20　別所辻堂遺跡発掘区位置図（1/2,000）

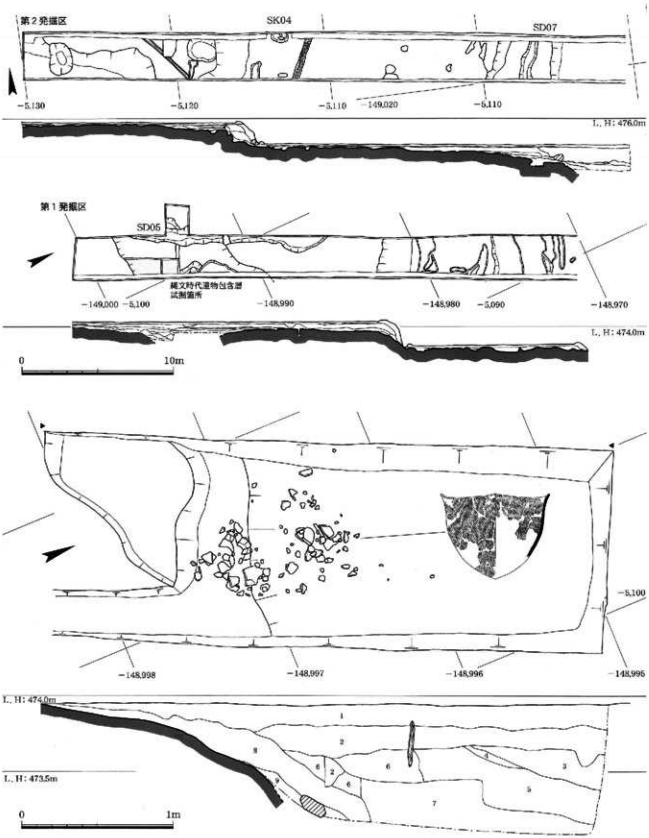


図21　試掘調査第1・2発掘区平面図・断面図（1/250）、黄島式土器出土地点平面図・堆積土層図（1/25）

されず、地下げによって南半が削平されたか、第2発掘区までの間で途切れるかの2つの可能性が想定される。

第3発掘区（83㎡）　基本的な層序は、耕土の下に灰色土、暗灰褐色土、黄灰褐色土、黄茶褐色腐植土と続き、黄褐色砂礫・青灰色シルトなどで構成される地山となる。地山の標高は、北側で473.75mと若干高くなる以外、概ね473.4～473.5mと平らである。黄茶褐色腐植土は枝葉、木根の堆積層で、12～14世紀頃の遺物を包含する。発掘区の全面がこの黄茶褐色腐植土に覆われており、この地点は谷部の低湿地域に相当する。

第4発掘区（175㎡）　南から北へ向かって張り出す南高北低の3枚の水田地割があり、これのほぼ中央に南北方向の発掘区を設けて調査を行なった。基本的に耕土の直下が地山であり、水田造成時に大きく全体が削平されていることが判明した。標高は、南側で最も高く475.0m、北側は473.55mである。北端では流路の層部を検出しており、北へ向かって地山が0.7m下がる。南端でも地山が0.1m下がっていくのを確認しており、本来は低い微高地状の地形であったと考えられる。

遺構は、北半部で検出した水田耕作に伴なう畦畦り溝のみである。中央部で認められた不規則に黄白色粘土が堆積する凹みは、無遺物のため地山を構成する堆積層の一部と判断した。また、地山直上で石鏃1点が出土したため、石器包含層の可能性が考えられた黄灰色砂混シルト層を4地点で試掘した。しかし、サヌカイト砕片1点が出土したのみであり、これについても包含層を形成するものではないと判断した。

第5発掘区（173㎡）　高低差のある南北2枚の水田にまたがって調査を行なった。南高北低の水田面での高低差は0.5mである。基本的な層序は、耕土の下に灰色土、黄灰色土、褐色腐植土（13～14世紀の遺物包含）と続き、シルトないし砂礫の地山となる。

発掘区の全面が褐色腐植土に覆われており、この地点は谷部の低湿地域に相当する。南端に小さな谷があり、幅6m以上、深さ0.5m以上（標高475.3m以下）で、褐色腐植土の下に暗茶褐色腐植土、灰色粗砂と褐色腐植土の互層が堆積する。湧水のために底まで掘削していない。この谷の北肩から2mほど北の地点（標高475.85m）を最高点として若干地形が盛り上がり、再度北へ向かって緩やかに地山が下がっていく。北端で大きく下がる流路の南肩（標高474.14m）を確認したが、流路内は湧水のために底まで掘削していない。発掘区中央部で検出した根株の腐朽に伴なう凹みに褐色腐植土が堆積しており、ここからは古墳時代の須恵器甕（図88-4）1点が出土した。

第6発掘区（118㎡）　高低差のある南北2枚の水田にまたがって調査を行なった。南高北低の水田面での高低差は1.16mである。基本的な層序は、耕土の下に灰色土、暗茶灰色腐植土（13～14世紀の遺物包含）と続き、シルト層の地山となる。微高地Cと谷部の境界付近に相当し、西から東へと大きく下がる傾斜地となっている。地山の標高は南西側が最も高く476.3m、北側で確認した谷部の南肩で475.3mである。

発掘区南端部には幅4m以上、深さ0.4mの流路があり、暗灰色砂土、青灰色シルト、黄灰色砂、灰褐色腐植土が堆積する。また、微高地C縁辺部に沿って砂礫層で埋まる小土坑が点在し、埋土からは14世紀前半頃の遺物が出土した。

第7発掘区（75㎡）　高低差のある南北2枚の水田にまたがって調査を行なった。南高北低の水田面での高低差は0.2mである。

基本的な層序は、耕土の下に灰色土、淡灰褐色土、暗褐色土（14世紀の遺物包含）と続く。

北側ではその下に縄文時代早期後葉の土器を包含する黄灰色礫混シルトが堆積しており、その直下が青灰色礫混シルトの地山となる。黄灰色礫混シルト層は厚さ0.1m前後で、南西から北東へ緩やかに下がっていく。その上面の標高は、479.02～478.56mである。

発掘区南半部では、南西方向から続く谷部と流路1を確認した。流路1は、幅8.8m以上、深さ0.8mで、暗褐色土の下に暗灰色土、青灰色シルト・灰色砂・暗灰色土の互層とブロック土が混合する造成土が堆積する。堆積層序の観察から、流路1は大きく2回の埋め立てによって埋没したと推測される。これらの埋土からは、14世紀前～中葉の遺物が多く出土した。

第8発掘区（63㎡）　0.42m高低差がある南北3枚の水田にまたがって調査を行なった。発掘区内の基本的な層序は、耕土の下に暗灰色土（旧耕土）、褐色腐植土と続き、黄（青）灰色砂礫・シルトの地山（南側

で標高478.0m前後）となる。発掘区全体が谷部の中にあり、南西から北東へと緩やかに地山が下がっている。地山上面での高低差は、南北で0.68mである。

発掘区南端で幅2.3m以上の流路跡を確認した。埋土は茶褐色シルト質腐植土、灰白色細砂の互層で、切断面が残る丸太が１本出土したが発掘区外南へと続いているため取り上げなかった。

また、発掘区中央付近でいくつかの小土坑を確認したが、不整形のため木根による凹みの可能性が残る。

遺物については、地山を覆う褐色腐植土から13世紀後半頃の土器が少量出土しただけで、流路跡や小土坑内からは出土しなかった。

第９発掘区（99㎡）　谷部を東西方向に横断するように発掘区を設けた。発掘区内の基本的な層序は、耕土の下に灰茶色土、灰褐色土、褐色腐植土と黄灰色砂の互層が続き、黄（青）灰色砂礫・シルトの地山（東側で標高480.36m前後）となる。

谷部の中央は概ね平坦であり、発掘区東端で幅2.5mの流路跡を検出した。埋土は灰色粘質シルト、暗灰色粘質シルト（木根・枝を多く含む）で、13世紀後半の土器が少量出土した。

第10発掘区（72㎡）　1.47m高低差がある東西３枚の水田にまたがって調査を行なった。微高地Ｄの裾部を削って造成された西側と中央の水田における基本的な層序は、耕土の下に淡灰色土、黄灰褐色土（シルト）の薄い層が続き、黄灰色シルトの地山となる。それに対して、東側の水田は谷部に相当するため、耕土の下に淡灰色土、淡黄褐灰色土、灰褐色腐植質シルト（有機質を含む）の厚い層が続き、灰色砂礫の地山となる。谷部の底は概ね平坦となっている。地山の標高は、発掘区の西端で484.5m、中央で483.74m、東側谷部で482.56mである。

発掘区中央で上部を大きく削平された炭窯１基を確認した。炭窯は、現状で全長4.05mが遺存し、焼成室の幅1.9m、深さ0.1mである。微高地Ｄ東側斜面を掘り込んで構築されており、焚口を南（谷部方向）へ向ける。床面は焚口に向かって緩やかに下っており、その角度は約３°である。窯内からは炭以外に土師器小片１点が出土したのみで、操業時期の詳細は不明である。

第11発掘区（51㎡）　1m高低差がある東西２枚の水田にまたがって調査を行なった。その結果、第10発掘区で微高地Ｄの端を確認した同一水田の北側は谷部に相当することが判明した。

発掘区西側では、耕土の直下が黄褐色砂礫の地山であり、水田造成時に大きな削平を受けている。一方、谷部に相当する発掘区東側での基本的な層序は、耕土の下に淡灰色土、灰褐色土、淡灰褐色土、暗灰褐色土と続き、黄褐色礫混シルトの地山となる。この谷部堆積土中からは、13世紀以降の土器と共に石鏃などの石器が若干出土した。

削平を受けた微高地Ｄ端部の上面で、いくつかの小土坑や焼土面が遺存するのを確認することができ、微高地上一面に遺構が広がっている可能性が高くなった。出土遺物から、遺構の時期は13世紀後半から14世紀と推定できる。

第12発掘区（57㎡）　１m高低差のある南北２枚の水田にまたがって調査を行なった。基本的な層序は、耕土の下に造成土、黄茶褐色土あるいは黄灰褐色土と続き、黄色砂礫土の地山となる。

微高地上を造成して水田化されているが、その段差部分の下から石列が検出された。14世紀以降の開発に伴うものと思われる。発掘区のほぼ全面から土坑や溝が検出され、かなり遺構密度が高い。平面形が一辺２m前後の隅丸方形となる土坑が３基あり、一部を掘削したところ深さ0.2m前後で13世紀後半～14世紀の遺物が出土した。また、その埋土中に炭や焼土が多く含まれているのが注意された。

第13発掘区（69㎡）　事業地内南端の微高地Ｄ中央にある水田を調査した。基本的な層序は、耕土の直下が黄褐色砂礫あるいは黄灰色シルトであり、水田造成時に地山面まで削平されていることが判明した。それにもかかわらず、ほぼ全面に土坑などの遺構が残存していた。

遺構には、埋土の違いや出土遺物から14世紀頃と近世の２時期に構築されたものがある。

また、発掘区南東端で縄文時代の遺物包含層（礫混黄色シルト）が遺存していた。一部を掘り下げたところ、八ッ崎Ⅰ式等の早期後葉の条痕文土器が出土した。

第14発掘区（112.5㎡）　基本的な層序は、耕土の下に造成土があり、その直下が青灰色砂・礫の地山となる。地山上の一部に旧耕土が残っており、近年にこの

水田周辺を一度造成したらしい。

発掘区東側で円形石組井戸、土坑を検出した。円形石組井戸の規模は、内法で東西1.15m、南北0.9mであり、やや楕円形を呈する。内部は0.2m掘り下げたにとどまるため、深さはわからない。花崗岩を積み上げて構築している。時期認定できる出土遺物がなく、時期は不明である。また、円形石組井戸の東側で土坑の一部を確認し、内部に何らかの施設を埋設していた痕跡が観察された。木棺墓である可能性も想定できるが、出土遺物がなく時期などの詳細は不明である。

さらに、発掘区西端では幅9m以上、深さ約0.8mの流路1を確認した。底の西端最下層に堆積した灰色粗砂中から13世紀後半～14世紀の土器が多く出土しており、微高地D上に存在した生活遺跡から供給された遺物と考えられる。第7発掘区で確認した流路1の出土土器と時期的に共通する遺物が出土している点から考えて、これらは同じ流路跡であると判断できる。

第15発掘区（84㎡）　0.8m高低差のある南北2枚の水田にまたがって調査を行なった。基本的な層序は、耕土の下に灰色土が堆積するだけで、直ちに青灰色砂混シルトの地山となる。南から北へ向かって下がる微高地上を造成して水田化しており、地山上面の大半が削平を受けている。地山の標高は、発掘区の南端で483.33m、中央で482.40m、北端で481.76mである。

発掘区中央で全長2m以上、幅3.2m、深さ0.7mの土坑を1基確認した。埋土から13世紀後半頃の遺物が出土している。

第16発掘区（42㎡）　第15発掘区の南側でそれと直交する東西方向に発掘区を設定し調査を行なった。耕土の直下がすぐに花崗岩岩盤の地山（標高483.40m）であり、微高地の稜線上に相当すると考えられるが、水田造成時に大きく削平を受けている。それにもかかわらず、いくつかの遺構が残存していた。

発掘区北西隅で確認した土坑SK12は、東西3.1m以上、南北1.3m以上の隅丸方形で、深さ0.3mである。土坑内には人頭大の花崗岩が多数埋めてあった。

第17発掘区（81㎡）　第13発掘区東端で縄文時代の遺物包含層を確認したため、その広がりを確認するため発掘区を設定し調査を行なった。基本的な層序は、耕土の下に旧耕土あるいは水田造成土があり、すぐに橙灰色砂質シルトの地山となる。特に第13発掘区を設定した水田の南東部（第17発掘区南側）は、厚さ1.1mの盛土によって近世に造成されていたことが判明した。造成土の下に旧耕土が残存している点からみて、縄文時代遺物包含層は東側においては大きく削平されていると考えられ、全く遺存していなかった。微高地Dを全体的に削平して水田造成されており、現状での地山の標高は南側で486.15m、北側で484.70mである。

発掘区中央を中心として中世の遺構が少なからず残存していた。直径1.9m、深さ0.3mの円形土坑からは、14世紀前半の羽釜が出土している。

第18発掘区（120㎡）　発掘区は微高地Aを南北に横断しており、中央北寄りが最も高くて耕土直下が地山（淡青灰色砂礫混シルト）である。微高地A上面の標高は477.15mで、地山は北側、南側に向かってそこから緩やかに下がっていく。北側では、地山の上に暗灰色土、淡灰色砂土、灰褐色土、耕土が約0.6m堆積する。発掘区北端の標高は476.4mで、発掘区内では谷部を確認していない。一方、南側では地山（黄褐色砂礫）の上に炭混暗灰色シルト、灰褐色土、灰色土、淡褐灰色土、淡灰色土、耕土が約0.75m堆積する。炭混暗灰色シルトからは12世紀の土器片が出土している。発掘区南端の標高は476.4mで、流路2までは達していない。

微高地A上では中世の土坑3基、小柱穴8基などを検出した。このうち、小柱穴6基は発掘区西壁に沿って直線的に並び、その間隔は2.1～2.5mである。これらの遺構については、一部を掘り下げるにとどめた。

第19発掘区（128㎡）　発掘区は微高地Aを横断しており、北側で谷部、南側で流路2の一部を検出した。微高地Aの上面および北側斜面は水田造成時に大きく削られており、平坦化した上面と谷部の間には約0.7mの段差が形成されている。

微高地A上面では耕土下すぐに地山（黄灰色砂礫）が現れ、その標高は479.6mである。第20発掘区で確認した縄文時代遺物包含層は全く遺存していない。

谷部では地山（黄褐色砂礫）の上に暗褐色腐植土、暗黄灰色粘土、水田造成土、耕土が堆積する。標高は北端で477.4mである。暗黄灰色粘土層から12～13世紀頃の土器片が出土した。

流路2では地山（黄灰色砂礫）の上に暗褐色腐植土、

黄褐色砂・灰褐色粘土・灰色砂の互層、粗砂混灰色シルト、砂混灰色土、水田造成土、耕土が堆積する。標高は南端で478.2mである。暗褐色腐植土から12～13世紀頃の土器片が出土した。なお、地山の一部からは花崗岩の岩盤が露出していた。

第20発掘区（88㎡）　発掘区は微高地Aを東西に縦断しており、一部で削平を受けているものの、ほぼ全域にわたって縄文時代遺物包含層の堆積を確認した。西から東に延びる尾根の先端部に隣接し、微高地Aへの傾斜変換点付近に相当する。基本的な層序は、地山（淡青灰色シルト）の上に黄灰色シルト（縄文時代遺物包含層）、褐灰色土（13～14世紀頃の遺物包含層）、淡茶灰褐色土、耕土が堆積する。地山の標高は西端で482.6m、東端で480.4mである。

発掘区東半部では平坦な地山面（標高480.4～480.5m）が広がっており、約0.2m前後の厚さで縄文時代遺物包含層が堆積する。この東端で長さ3.35m、幅0.7m、深さ0.4mの溝を検出し、縄文時代中期末の土器（図67-33等）や石器が出土した。なお、縄文時代遺物包含層の上から掘り込む小穴がいくつかあり、それを覆う褐灰色土との関係から13～14世紀頃の遺構が上層に重複していると考えられる。

第21発掘区（65㎡）　発掘区は微高地Eと流路3を南北に横断し、流路2の一部を検出した。北端は微高地Aへと続く尾根の裾部に相当する。地形的にみて、流路2と流路3の合流点付近に位置すると考えられる。全体的に大きく削平を受けており、微高地E上面では耕土下すぐに地山（淡黄灰色砂礫）が現れ、その標高は484.6mである。流路3は幅6.2m、深さ0.6mで、砂・シルト・粘土が互層に堆積する。出土遺物はなかった。流路2はその北肩を確認したのみであるが、水田造成時に改変を受けている。

第22発掘区（93㎡）　発掘区は微高地Eと流路3を南北に横断し、流路2の一部を検出した。北側は微高地Aへと続く尾根の裾部に相当するが大きな削平と攪乱を受けており、耕土下すぐに地山（灰色砂礫）が現れる。その標高は487.3m前後である。流路3は幅14m、深さ1.2mで、2時期の堆積が認められた。当初の堆積層は南肩に沿って幅3.5mほどが遺存する。灰色砂礫・黄灰色砂礫と黄灰色シルトが堆積し、黄灰色シルト層から石器が出土している。これと重複して幅10.5mにわたる土砂が後から堆積した。縄文土器数点と共に14世紀頃の土師器皿が出土しており、中世以降の堆積層とみられる。微高地Eの上面も削平を受けて平坦化しており、その標高は487.25mである。また、その上面幅は5.5m前後であり、この地点で最も狭くなっている。流路2はその北肩を確認したのみであり、段差の大きい現水田区画はほぼそれを踏襲している。

第23発掘区（103㎡）　発掘区は微高地Eと流路3を南北に横断し、流路2の一部を検出した。微高地Eの上面は旧耕土で覆われており、その上に造成土（厚さ0.35m）と現耕土が堆積する。よって、発掘区を設定した水田は一度かさ上げされていることが判明した。旧水田造成時に微高地Eの上面は削平を受けており、その標高は490.0mである。微高地E上で幅1.8m、深さ0.4mの溝を検出した。下層に灰色砂礫、上層に黄褐色シルト・黄灰色砂が堆積し、縄文土器・石器が若干出土している。流路3は幅20m、深さ1.4mで、下層に石器を若干包含する茶褐色砂礫・灰色砂礫、上層に13～14世紀の遺物を少量包含する褐色腐植質シルト・暗灰色シルトが堆積する。流路2はその北肩を確認したのみであり、段差の大きい現水田区画はほぼそれを踏襲している。

第24発掘区（87㎡）　流路3の南肩付近をそれにほぼ沿って掘削し、少し蛇行しながら西から東へと水が流れていたことを確認した。流路内の埋土は、地山の上に灰色砂礫、暗灰色シルト、暗茶褐色土、茶灰褐色砂、灰褐色土、灰色土、灰褐色土、耕土が堆積する。流路3底の標高は、西端で495.1m、東側で492.7mである。埋土から14世紀頃の土師器皿などが出土しているが、出土量はわずかである。

第25発掘区（112㎡）　発掘区は流路3南半部から微高地Eを南北に縦断する。微高地E上面での上層は、地山（淡茶褐色砂混シルト）の上に黄褐色粘質シルト、淡黄灰色土、耕土が堆積しており、地山上面の標高は498.9mである。微高地Eの南半部は水田造成時に約0.3m削り取られており、重機の爪痕が随所に残る。それに対して北半部はよく遺存しており、その北側で幅2.0～2.5m、深さ0.6mの溝を検出した。下層に黄灰色礫混粗砂、上層に暗灰色粘土・黄灰色泥質粘土が堆積し、下層から庄内式甕の破片が出土した。流路3

は深さ1.2mで、造成土で埋め立てられていた。造成土の下には、地山の上に茶褐色腐植質シルト・細砂、灰色砂混粘土、旧表土が0.35mの厚さで堆積する。発掘区北端での底の標高は497.65mである。

第26発掘区（39㎡）　発掘区は、微高地Eの南側から流路２の北端に相当する。微高地Eの上面には下から灰色土、旧耕土、造成土、耕土が堆積し、水田造成時の削平と攪乱を大きく受けている。微高地E上面の標高は501.8mである。微高地Eの南端部で検出した幅0.6m、深さ0.1mの素掘り溝からは中国銭と思われる銭貨１枚が出土したが、銹のために銭種は不明である。流路２は発掘区北端で深さ0.6m、底の標高は500.9mである。底から淡褐色礫混粗砂、暗褐色腐植質シルト、暗灰色粘質シルト、灰褐色土が堆積し、縄文土器片１点と少量の中世土器片が出土した。

第27発掘区（50㎡）　発掘区内で、流路２が北へ少し蛇行する地点の西肩部分を検出した。ただし、水田造成時の削平によって周辺が大きく改変されており、流路２の西肩も本来はもう少し東寄りであったと思われる。出土遺物はほとんどない。

第28発掘区（36㎡）　発掘区は微高地Fの中央部に相当し、耕土の下からすぐに地山（褐黄色・橙褐色砂混シルト）が現れる。その上面の標高は505.1m前後である。茶畑造成時に大きく削平されたらしく、本来の堆積土は全く残っていなかった。

第29発掘区（88㎡）　発掘区は微高地Fを南北に横断し、流路３の南半部、流路４の北半部を検出した。微高地Fの北側では地山（橙褐色礫混粘質シルト）の上に灰色土、耕土が堆積するのみであるが、南側は0.3m前後低くなって平坦面を形成し、そこに縄文時代遺物包含層（黄灰色砂混シルト）が堆積する。微高地F上面の標高は北側で506.7m、南側で506.4m前後である。

縄文時代遺物包含層を幅１mで試掘したところ、縄文土器と石器が集中的に出土する地点を認めた。

流路４は近代頃の造成土で埋め立てられており、その深さが１m以上に及ぶため完掘はしなかった。流路４は第30発掘区を設けた尾根２の北側に沿って流れると思われ、発掘区南端での深さは0.6m、底の標高は505.8mである。

第30発掘区（81㎡）　谷筋の西奥中央に西から東へ延びる小さな尾根２があり、その稜線上に沿って発掘区を設定した。表土下には茶畑造成時の攪乱土と思われる暗橙灰色シルトが堆積するのみで、すぐに地山（暗橙色粘土）が現れる。地山上面の標高は、発掘区西端で514.6m、東端で509.5mである。遺構は認められなかった。出土遺物は、中・近世土器の細片がわずかに出土しただけである。

２．試掘調査の成果

３度にわたり30箇所で試掘調査を行なった結果、調査地内の旧地形がおよそ復原できると共に、その違いによって遺構・遺物の分布が大きく２つの区域に分かれることが判明した。

調査地は、北側を起点にみて南側へ大きく続いていく谷筋と西側へ細く延びる谷筋に分かれている。その起点となる位置に微高地Aが西から張り出す。そして、微高地Aの南側には第４発掘区の位置に微高地B、第６・７発掘区より西側に微高地C、第10～17発掘区の位置に微高地Dがある。これらの微高地や東西の尾根に挟まれる低地が谷部となる。また、微高地Cと微高地Dを南北に分断するように流れる流路１が復原できる。

一方、西側へ延びる谷筋は、西へ上るにつれて勾配が徐々に急になる地形となっている。その西限に近い第29発掘区を設けた水田（標高507.0m）まで、水平距離300mに対してその高低差はおよそ30mもある。本来、この谷筋には３条の流路とそれに挟まれた３つの微高地が存在していたことが判明した。３条の流路を流路２・３・４と呼び、流路２と流路３に挟まれる微高地を微高地E、流路３と流路４に挟まれる微高地を微高地Fとする。微高地Eは流路２と流路３の合流点で途切れ、微高地Fは流路３と流路４の合流点で途切れる。

このような地形区分にしたがって、遺構の分布を次に検討してみよう。

微高地A　西から延びる尾根の先端部から派生しており、特にその先端部は南が開けた日当たりの良好な立地環境にある。微高地Aでは、縄文時代早期・中期末の遺物包含層、12～13世紀の溝や土坑などを検出した。したがって、微高地Aの全域にこれらの遺構が分布している可能性が高く、遺跡の存在をここに認めることができる。

微高地Ｂ　南から延びる低平な張り出し状の地形であったらしい。谷部の東側に位置するが、ここは東側に横たわる高い山によって日差しが遮られ、日当たりが悪い環境にある。ここでは顕著な遺構がなく、遺物包含層の存在も認められなかったので、遺跡はないと判断できる。なお、現在の住居の多くが谷部の西側に点在しているが、やはり日当たりの問題に起因した分布の偏りと考えられるので、谷部の東側は本来的に生活環境が良くなかったのであろう。

微高地Ｃ　尾根１の南東側に形成された小さな段丘状の地形に相当し、その縁辺部で縄文時代遺物包含層、14世紀前半頃の小土坑などを確認した。微高地Ｃ上に遺構が存在する可能性は十分にある。しかし、その東端をかすめるように調査したに過ぎず、その詳細はよくわからない。微高地Ｄと流路１を隔てて近接するので、一連の遺跡を形成していると想定することもできる。

微高地Ｄ　調査地南西隅に位置する段丘状の地形で、南西から延びる尾根の先端部に形成されている。ここには、縄文時代早期の遺物包含層と13世紀後半～14世紀を中心とする時期の遺構が多く分布していることが判明した。上面に水田造成時の削平が広く及んでいるにもかかわらず、遺構が全域的に残存する。したがって、微高地Ｄに１つの遺跡が存在するのは間違いない。

微高地Ｅ　西側の谷筋中央に細長く延びる低平な地形である。縄文時代や古墳時代の遺物を少量包含する２条の溝が認められたが、いずれも流路２・３とつながる小規模な支流と考えられる。この他に顕著な遺構は確認できない。

微高地Ｆ　流路３・４の間に小さく張り出すわずかな段丘状の地形である。その西側で縄文時代遺物包含層の一部を確認したが、東側では全く認められないので、それが局地的な堆積によるものか判断するのが難しい。

流路１　微高地Ｃと微高地Ｄの間で確認した流路跡である。埋土から13世紀後半～14世紀にかけての遺物が多く出土している。これらは微高地Ｄ上に想定される同時期の生活遺跡に起因する遺物と考えられる。

流路２　西側の谷筋を南端に沿って流れる。全体の規模は不明ながら、西側の谷筋内では最も大きな流路であったと考えられる。

流路３　西側の谷筋を北端に沿って流れる。全体的にみて、西側が深く、東へいくにつれて浅くなる。下層に縄文時代の遺物、上層に13～14世紀の遺物が少量包含されている。

流路４　尾根２の北側裾沿いに流れて、流路３と合流する。近代頃の造成土で埋め立てられており、現在はその痕跡を全くとどめていない。

谷部　腐植土層が広域的に堆積する低湿地である。谷底流路内にも土砂が厚く堆積するような状況は認められないので、激しい流水はほとんどなかったようである。腐植土層内からは古墳時代の遺物が若干出土するものの、広域的に包含されているのは12～14世紀の中世遺物である。谷部が水田化されていくのは、15世紀以降と推測される。したがって、谷部は遺跡範囲の中から除外して対応するのが妥当であろう。

以上の検討によって、微高地Ａ・Ｄに遺跡の存在を確認できる。そして、微高地Ｄの遺跡は流路１を介して微高地Ｃに及んでいる可能性がある。そこで、微高地Ａの周辺を含めた北側の区域を別所下ノ前遺跡、微高地Ｃ・Ｄと流路１を含めた南側の区域を別所辻堂遺跡と命名し、その範囲内で遺跡調査を実施する必要性が生じた。また、微高地Ｅで試掘調査できなかった箇所と微高地Ｆにおける遺跡有無の確認を合わせて行なうことになった。

Ⅱ．別所下ノ前遺跡の調査成果

整備工事で削平される箇所を対象として、平成15年度にＥ発掘区、平成17年度にＣ・Ｄ発掘区を設定し調査した。なお、平成17年度には同じ西側の谷筋上に位置する微高地Ｅ・Ｆで遺跡確認調査も行なっており、それをＡ・Ｂ発掘区として合わせて報告したい。各発掘区の位置は図19に示した通りである。

１．調査の方法

耕土及び表土を重機で除去した後に、調査地全体を基準点測量して、旧国土座標軸に沿った１ｍあるいは２ｍ方眼のグリッドを設定した。地区名はＸ・Ｙともに座標値下２桁で示し、各地区は南東隅の値で代表させた。

中世の遺物包含層出土の遺物はグリッドごとに回収したが、縄文時代の遺構や遺物包含層から出土した遺

物は、トータルステーションで出土位置の３次元データを記録しながら取り上げた。

発掘区の平面略測図を1/100で作成し、遺構の位置関係などの情報をそれに整理しながら調査を進めた。そして、個別の遺構図は1/10あるいは1/20、土層図は1/20で基本的に作成し、平面図に旧国土座標を記入して相対的な位置関係を復原した。

発掘区全体の平面図はヘリコプターによる航空写真から縮尺1/50で図化しており、Ｅ発掘区では上層遺構面と下層遺構面の２回に分けて航空写真撮影図化作業を行なっている。

２．調査の概要

（１）Ａ発掘区

Ａ発掘区は、西側の丘陵から微高地Ｆへの傾斜変換点からやや東に下がった付近に位置する。試掘調査第29発掘区で確認した縄文時代遺物包含層の広がりを調査する目的で設定した。

調査の結果、微高地Ｆと流路４の北半部を検出したが、東側は水田造成時の切り土によって約１ｍの段差となる。微高地Ｆの上面は流路４に向かって緩やかに下がっている。微高地Ｆ北半部は地山（橙褐色礫混粘質シルト）の上に灰色土、耕土が堆積するのみであり、その上面は水田造成時に削平されて平らである。一方、微高地Ｆ南半部は0.3m前後低くなる緩斜面を形成し、そこに縄文時代遺物包含層（黄灰色砂混シルト）が堆積する。微高地Ｆ上面の標高は北側で506.7m、南側で506.4m前後である。縄文時代遺物包含層からは、縄文時代中期末～後期前葉の土器と石器が出土した。ただし、当該時期の遺構などは全く認められなかった。流路４は近代頃の造成土で埋め立てられている。埋め立て前の堆積土は、旧表土の下に淡黄灰色泥質粘土が厚く堆積していた。深さ0.6～1.1mで、西から東へと深くなる。

図22　Ａ発掘区平面図（1/200）

ｉ．縄文時代遺物包含層の遺物分布

試掘および発掘調査で縄文土器22点、石器231点の遺物が出土した。時期不明の土器は煩雑となるため分布図から除外した。土器分類の詳細は、後述の縄文土器の項（p.51～57）を参照されたい。

平面分布は地山上面の旧地形に投影した（図23・24）。全体的な傾向を見ると、遺物分布は発掘区中央の谷状地形中央部に集中しており、これ以外の箇所にはほとんど分布しないことがわかる。土器はＶ群のものばかりで、大半が中期末～後期前葉に比定されるＶ群Ｆ類で占められる。石器は地形に沿った分布をしていることが認められるのみで、目立った傾向はない。

垂直分布は、試掘調査第29発掘区の土層断面に投影した（図25・26）。なお投影は、土層断面図が北に対し15°６′０″東に振れたラインで作成されているため、座標値をこの角度で回転してから行なっている。座標値の回転については、柚ノ川キトラ遺跡での分析同様、回転行列の数式によって行なった（奈良市教育委員会2006）。

これをみると土器・石器ともに層内に散在する様子が窺え、層境に分布のピークが認められない。遺物包含層が上下２層ある部分もあるが、両層からＶ群Ｆ類の土器が出土しており、ともに中期末～後期前葉の２次堆積層と考えられる。

以上のことから、遺物分布が谷状地形の中央に集中するのは地形の制約を受けて２次堆積したためであ

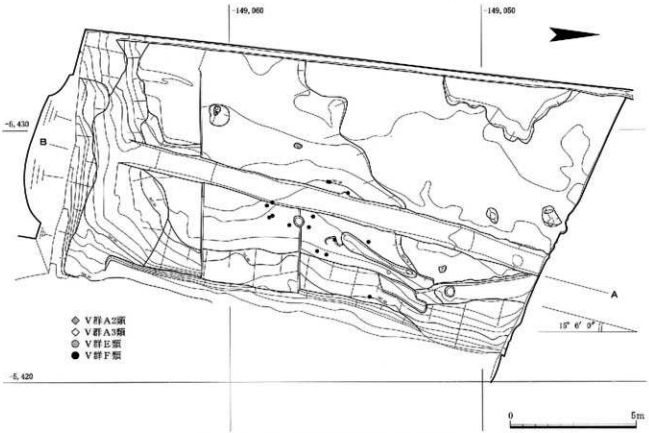


図23　A発掘区　縄文土器平面分布図（1/150）

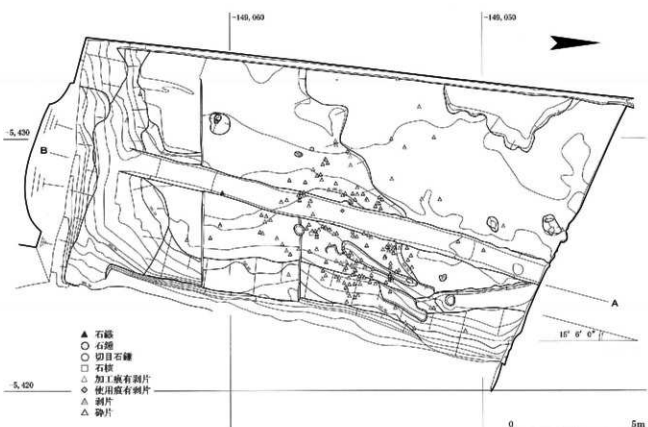


図24　A発掘区　石器平面分布図（1/150）

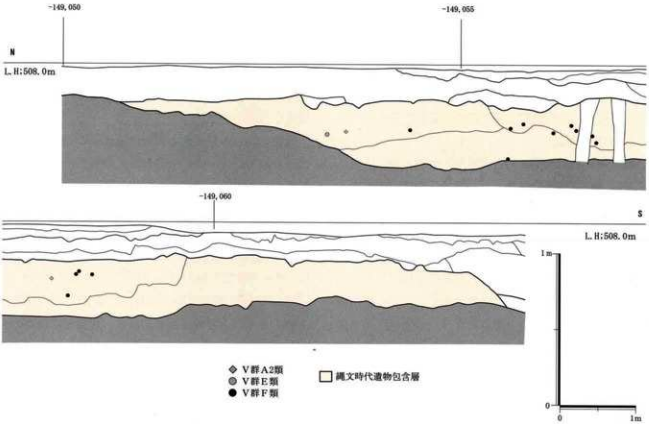


図25　ＡＢラインより±２m間出土縄文土器垂直分布（第29発掘区東壁土層図に投影）

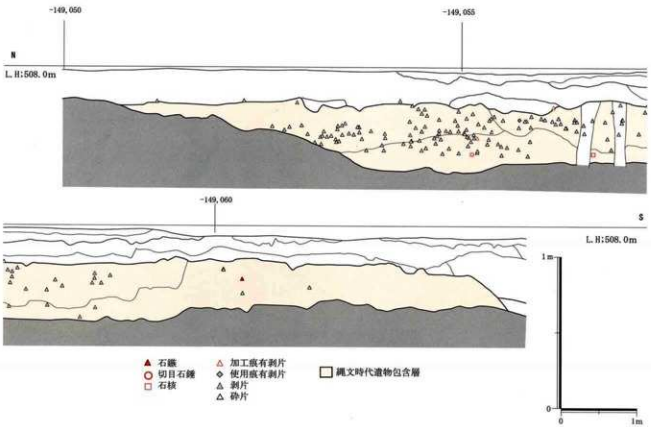


図26　ＡＢラインより±２m間出土石器垂直分布（第29発掘区東壁土層図に投影）

り、発掘区北西部に分布が希薄なのも後世の削平の影響を受けたからに過ぎないと考えられる。このため、分布は流入してきた遺物の様相を示していると過ぎず、本来の活動箇所は微高地Fのさらに上方にあったのではないだろうか。そして、その遺跡の時期は縄文時代中期末～後期前葉と考えるのが妥当だろう。

（2）B発掘区

試掘調査第25発掘区で古墳時代初頭頃の溝を検出したため、その西側に位置する一段高い畑地に関連する遺跡がないかどうか試掘調査を行なった。その結果、縄文時代遺物包含層の存在を確認したため、調査範囲を広げてB発掘区を設けた。

B発掘区の西北端で流路4の南東部を検出したことから、B発掘区は流路4の南側に西から延びる細い尾根の先端部に相当すると想定できる。B発掘区西半部はその頂部にあたるが、畑地造成によって削平されており、耕土の直下が地山である。また南東～北東部にかけては、地山が大きく削り取られて高さ1.0～1.7mの断崖状となっている。地山上面の標高は西端で501.95m、東端で501.0m前後である。縄文時代遺物包含層（黄橙色シルト）は、南東へ下がる尾根斜面が遺存した東半部で確認した。厚さ0.3mほどで、地山直上に堆積する。縄文時代早期中葉の穂谷式土器と石器が出土した。また、縄文時代遺物包含層の直上で古墳時代前～中期の土師器・須恵器が局所的に少量出土した。ただし、縄文時代および古墳時代の遺構は全く認められなかった。

流路4は、A発掘区と同様に近代頃の造成土で埋め立てられている。埋め立て前は、旧表土の下に黄灰色粘質シルトあるいは黄灰色粘土が厚く堆積していた。

i．縄文時代遺物包含層の遺物分布

縄文土器2点、石器31点の遺物が出土しているが、概して分析には点数が少なすぎる。土器分類の詳細は、後述の縄文土器の項（p.51～57）を参照されたい。

平面分布は地山上面の旧地形に投影した（図28）。先述のように、発掘区西半や南東～北東部は後世の大幅な削平を受けているため、縄文時代遺物包含層が遺存しない。遺物分布は概ねこの包含層の遺存範囲に従って散漫に分布し、これといった特徴はない。上器には穂谷式（早期中葉）に比定されるⅠ群F1類があるものの、分析には点数不足である。

垂直分布は、試掘調査の土層断面図に投影した（図

図27　B発掘区平面図（1/200）

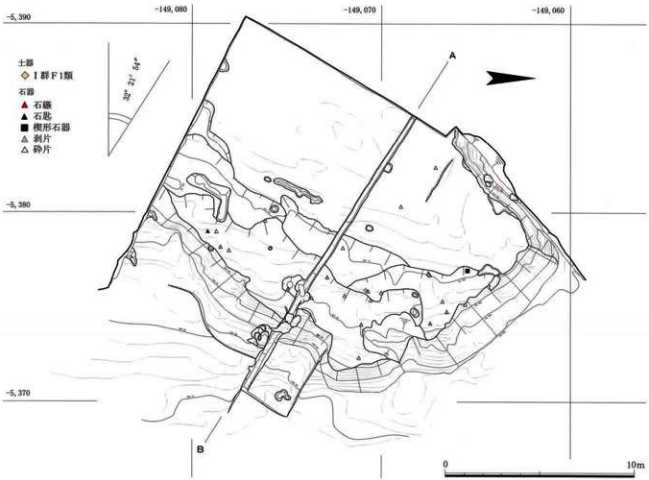


図 28　B発掘区　縄文土器・石器平面分布図（1/200）

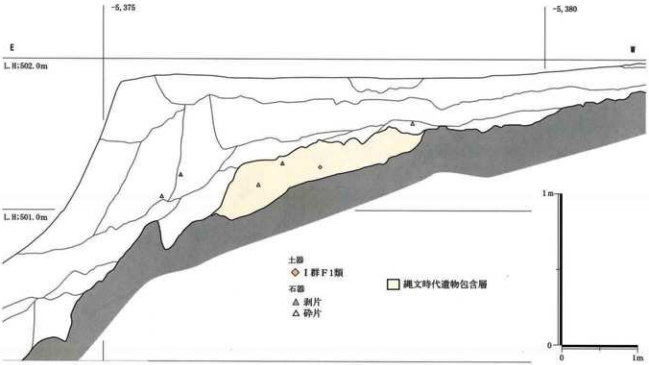


図 29　ABラインより±3m間出土縄文土器・石器垂直分布図（ABライン土層図に投影）

29)。なお投影は土層断面図が西に対し32°21′54″北に振れたラインで作成されているため、座標値をこの角度で回転してから行なっている。

垂直分布をみると、遺物包含層内には1群F1類の土器と石器剥片・砕片が1点ずつあるのみである。このため詳細は不明だが、いずれの遺物も層境から遊離して分布するため2次堆積と考えられる。遺物量が少なすぎるため判然としないが、地形から推測すると、遺物は削平を受けた発掘区西半、ないし発掘区外の南西方向から流入してきたと考えられる。このため微高地Eに縄文時代早期中葉の活動箇所があった可能性がある。

（3）C発掘区

C発掘区は、西側の丘陵から微高地Aへの傾斜変換点付近に位置する。試掘調査第20発掘区で確認した縄文時代遺物包含層の調査を目的として設定した。なお、第20発掘区東半部が位置する水田は整備工事による削平を受けないため、本調査を行なっていない。

発掘区西端は丘陵裾部にあたり、耕土直下が地山である。その標高は概ね482.6mである。そこから南東へ向かって緩斜面が始まり、微高地Aを形成する。微高地A上には耕土下に間層（灰色土・淡灰色土・淡黄灰色砂質土）を挟んで縄文時代遺物包含層（黄灰色シルト）が堆積する。その厚さは南東へ向かって徐々に増し、発掘区南東端では0.4mとなる。縄文時代遺物包含層からは、早期中葉・早期末～前期初頭・中期末～後期前葉・晩期前半の土器と石器が出土した。また、縄文時代遺物包含層の直上からは滑石製勾玉1点が出土している。

以下、主要な検出遺構と遺物分布について概述する。

i．中世の遺構

土坑1基と微高地A北の谷部へと流れる2条の流路跡を検出した。北側の流路をSD01、南側の流路をSD02と呼ぶ。

SK01　南北2.45m、東西1.7mの平面楕円形を呈し、深さ1.2mの土坑である。縄文時代遺物包含層上面から掘り込まれており、黄灰色系のシルトが土坑内の壁に沿って堆積した後、炭混じりの暗灰色系シルトが堆積して埋没している。堆積土層から長期間にわたって徐々に埋まった過程を観察できる。横断面形はほぼV字形を呈するものの、東壁が垂直に近い角度であるのに対して、西壁は約50°の角度がつくという特徴が認められる。このような特徴からみて、SK01は落とし穴である可能性が考えられる。ただし、底面の基盤層が泥質で軟盤が悪かったためか、逆茂木などの痕跡は検出できなかった。出土遺物は、石器剥片が埋土から少量出土しただけである。埋土中に含まれる炭の放射性炭素年代測定によってcal AD 1,040～1,260

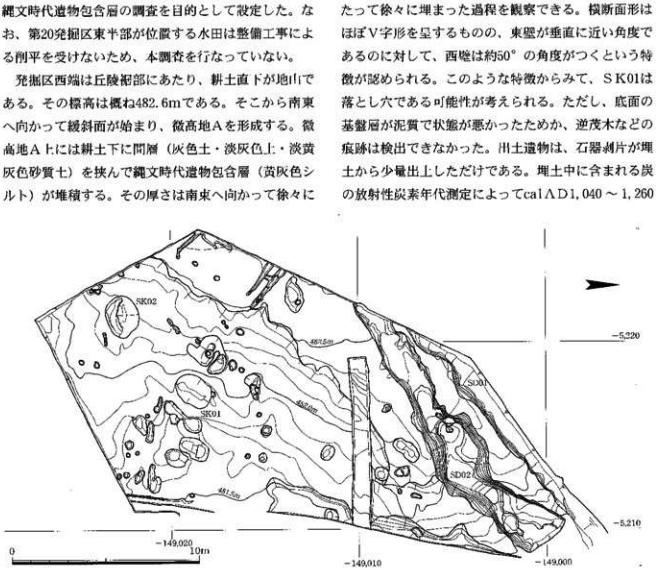


図30　C発掘区平面図（1/200）

年の暦年代値が得られたため、11～13世紀頃に埋没したと思われる。

ＳＤ01　南半部を検出したに過ぎず、深さは0.4m以上で南西から北東へと深くなる。

ＳＤ02　幅1.8～2.6m、深さ0.3～1.0mで、南西から北東へと深くなる。下層に堆積する黄褐色粗砂・礫層から土師器皿・羽釜小片が出土しており、15世紀頃には流水があったものとみられる。層位的にみて、近世以降に埋め立てられたのだろう。

ii．縄文時代の遺構

徽高地Ａの地山上面で土坑１基を検出した。なお、他にも大小の凹みを検出したが、そのほとんどは不整形で木根などの痕跡ではないかと思われる。

ＳＫ02　南北1.84m、東西2.15mの平面楕円形を呈し、深さ0.5mの土坑である。埋土から石器が少量出土したに過ぎない。

iii．縄文時代遺物包含層の遺物分布

試掘調査第20発掘区およびＣ発掘区で、縄文土器168点、石器520点の縄文時代遺物が出土した。これらの遺物分布を遺構平面図や断面図に投影する。なお、時期不明の上器は、煩雑となるため分布図から除外した。上器分類の詳細は、後述の縄文土器の項（p.51～57）を参照されたい。

平面分布は、Ｃ発掘区ならびに第20発掘区の地山上面の旧地形に投影した（図32）。全体的な傾向を見ると、Ｃ発掘区南半に分布するものと、Ｃ発掘区東端から第20発掘区にかけて分布する２つのグループがある。このうち上器の分布を見ると、Ｃ発掘区内では発掘区中央の小さな谷状地形にⅢ群Ｅ3類ａ種の集中があり、発掘区東端で第20発掘区と重なる部分には、Ⅴ群Ｆ類の集中がある。第20発掘区内では、Ⅲ群Ｅ1・2、Ⅲ群Ｆ類、およびⅤ群Ｆ類の散漫な分布があり、Ｃ発掘区中央のⅢ群Ｅ3類ａ種の集中箇所付近にはⅥ群が1点ある。このうちⅢ群Ｅ3類ａ種の集中は同一個体で構成されている。石器は型式による分布を追えないが、Ｃ発掘区南半の分布は谷状地形とその下に広がる平地に沿って分布しており、明らかに地形に沿った分布の様相を呈している。

垂直分布（図33～36）でこれらをみると、Ｃ発掘区中央のⅢ群Ｅ3類ａ種の集中は、地山上面付近に分布のピークがあることから、地山上面を遺構面とする

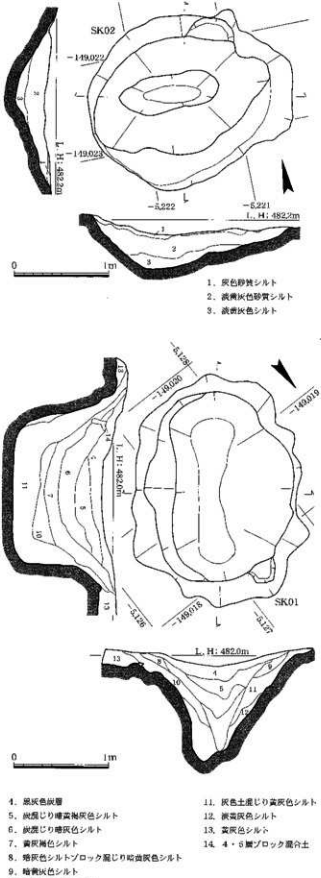


図31　ＳＫ01・02平面・断面図

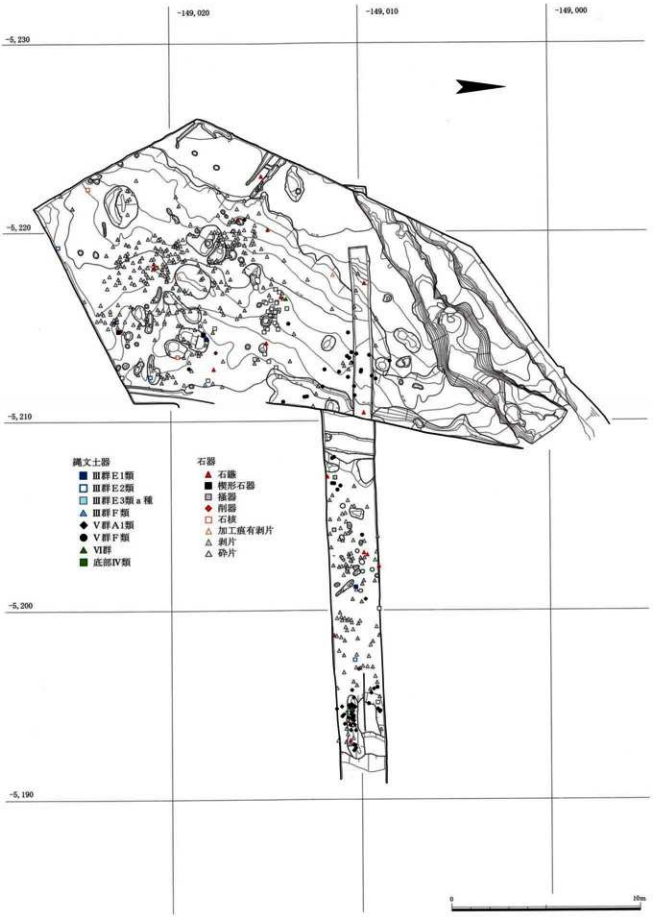


図32　第20・C発掘区　縄文土器・石器平面分布図（1/200）

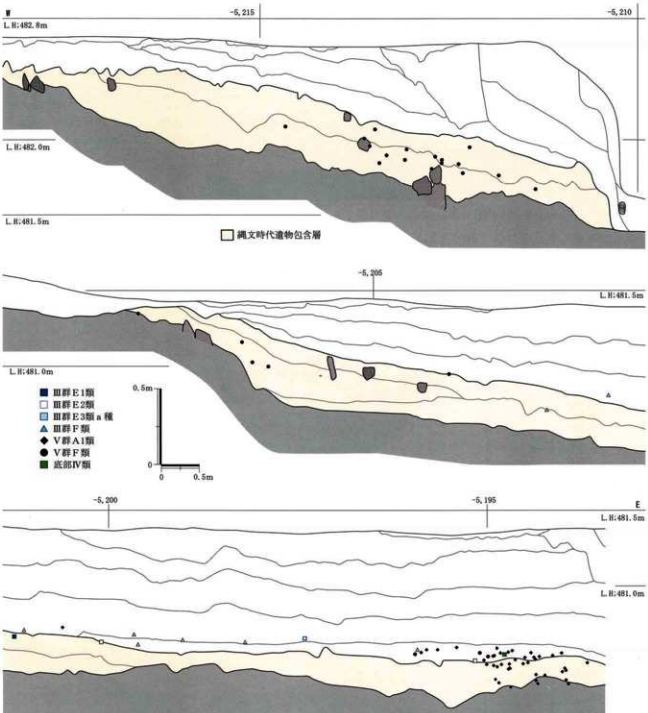


図 33　X＝－ 149, 009 ～－ 149, 012 m間縄文土器垂直分布図（第 20 発掘区北壁土層図に投影）

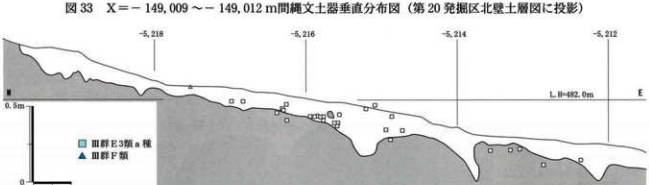


図 34　X＝－ 149, 014 ～－ 149, 016 m間縄文土器垂直分布図（X＝－ 149, 015 mライン土層図に投影）

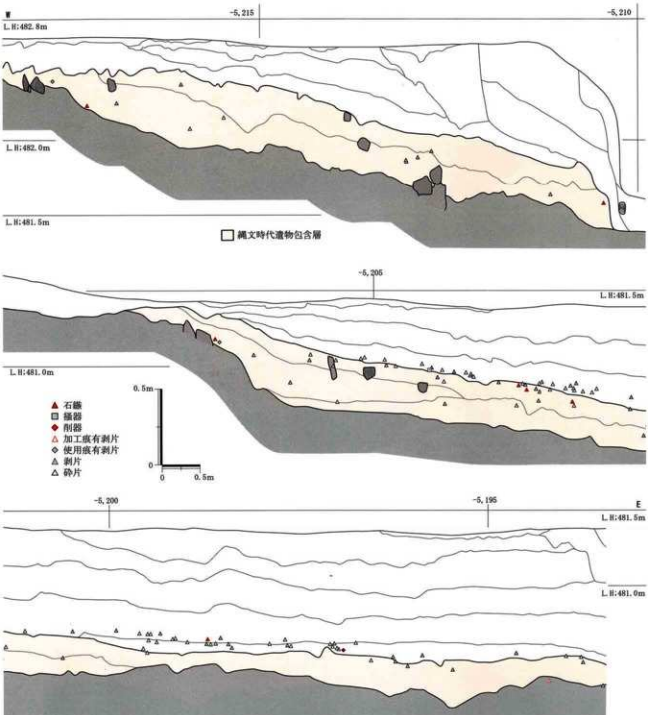


図 35　X＝－ 149,009 ～－ 149,012 m間石器垂直分布図（第 20 発掘区北壁土層図に投影）

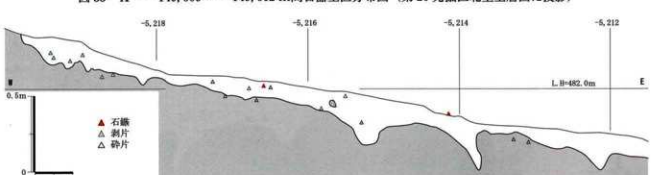


図 36　X＝－ 149,014 ～－ 149,016 m間石器垂直分布図（X＝－ 149,015 mライン土層図に投影）

遺物分布のようにもみえる。ただし分布図には表れないが、同一層からはⅥ群の土器も出土しており、石器分布でもピークといえるほどのものがない。Ⅵ群の土器が混入である可能性もあるが、平面的にも谷状地形に制約された分布を示すことから、２次堆積の可能性が高いと考えられる。

また第20発掘区の土層断面図に投影した垂直分布（図33）では、縄文時代遺物包含層内にⅤ群Ｆ類やⅢ群の土器が散漫に分布する様子が窺え、明らかな２次堆積と考えられる。石器分布（図35）は、縄文時代遺物包含層上面に分布のピークがあるが、これは中世遺構面である為原位置を保っているとは言い難い。他の層境には分布のピークがないことから、石器もまた２次堆積の可能性が高い。

以上のことから、当発掘区で確実に原位置を保っているといえる遺物はない。平面的な遺物分布が地形に左右された広がりを見せることから、遺物は上方に当たる北西方向から流れ込んだと考えるべきだろう。ただし同一個体の集中があることから、遺物はさほど原位置を遠く離れていない可能性もある。縄文時代遺物包含層は早期末～前期初頭、中期末～後期前葉、晩期中葉の土器を包含するが、晩期中葉は１点のみで、中期末～後期前葉が2/3を占める。こうした傾向は、ある程度当時の様相を反映しているのかもしれない。

なお、微高地Ａにおける遺跡の広がりはＤ・Ｅ発掘区の成果と併せて考える必要がある。当発掘区で確認した遺物分布が微高地Ａでどんな意味を持つのか、以下の各発掘区の成果をもとに再度考えることとする。

（４）Ｄ発掘区

Ｄ発掘区は、微高地Ａの中央部に位置する。試掘調査第18発掘区で確認した中世遺構の調査を目的として設定した。

発掘区西北部が一番高く、その上面と北端は水田造成時に削平を受けている。耕土の直下が地山であり、その標高は477.17mである。そこから南・東へと緩傾斜地が続き、発掘区南西隅において流路２の一部を検出した。緩傾斜地の堆積土層は、耕土の下に淡灰色土、淡褐灰色土、灰色土、灰褐色土、炭混暗灰色シルト（12世紀の遺物包含層）、縄文時代遺物包含層と続いて大型礫を含む灰白色砂質シルトの地山となる。地山の標高は南端で476.３～476.5m。なお、縄文時代遺物包含層は上中下３層あり、上から黄色シルト、淡黄灰色シルト、淡灰色砂質シルトとなる。中世遺構面（黄色シルト上面）の下に縄文時代遺物包含層と縄文時代遺構面（淡灰色砂質シルトないし地山上面）が存在することを確認したため、この２面において遺構調査をおこなった。

縄文時代遺構面で石敷炉１基と旧流路２の一部、中世遺構面で掘立柱建物１棟、掘立柱列１条、溝１条、土坑数基、流路２の一部などを検出した。なお、旧流路２は発掘区南半全体にわたるため、掘削は北岸側の一部にとどめた。また、縄文時代遺物包含層上面にめり込むようにしてＸ＝－149,016.15・Ｙ＝－5142.25の地点で土師器直口壺（図88－１）、Ｘ＝－149,012.60・Ｙ＝－5,154.90の地点で土師器高杯（図88－２）が単独で出土した。

以下に、主要な検出遺構と縄文時代遺物包含層の遺物分布について概述する。

ｉ．中世の遺構

ＳＢ01　桁行３間（6.6m）、梁間２間（4.1m）の南北棟総柱建物である。柱間は柱筋によって若干異同があるものの、桁行は西側柱列で北から2.1・2.3・2.2m、梁間は北側柱列で西から2.0・2.1mである。柱穴の深さは0.1～0.4mで揃わない。部分的に遺存した柱痕跡から柱の直径は0.08～0.1mほどであったとみられる。２つの柱穴で花崗岩礫を底に置く根石が認められたが、その中には焼石の利用もあった。柱穴埋土から12世紀頃の土器小片が出土した。

ＳＡ01　ＳＢ01の南側2.6mの位置にある東西方向の柱列である。東西３間（7.1m）で、柱間は西から2.3・2.2・2.6mである。柱穴の深さは0.1～0.2mで、西から３つめの柱穴には花崗岩礫の焼石を使用した根石が認められた。

ＳＫ03　ＳＢ01の北東で検出した南北1.57m、東西1.63mの平面円形土坑で、深さ0.2mである。埋土から花崗岩礫と共に12世紀の土師器・瓦器が出土した。

ＳＤ03　ＳＢ01の東側にほぼ沿って掘削された南北溝で、ＳＫ03の南東部に接続する。長さ10.2m、幅0.3m、深さ0.2mである。ＳＫ03との重複関係は認められず、それとの接続部からは12世紀の土師器皿がまとまって出土した。

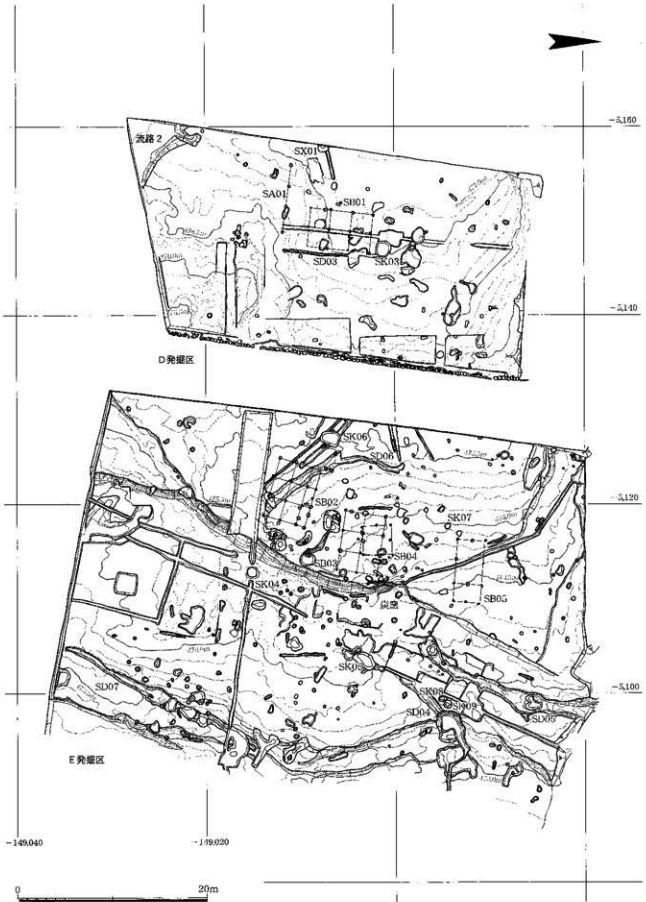


図37　D・E発掘区上層遺構面平面図（1/400）

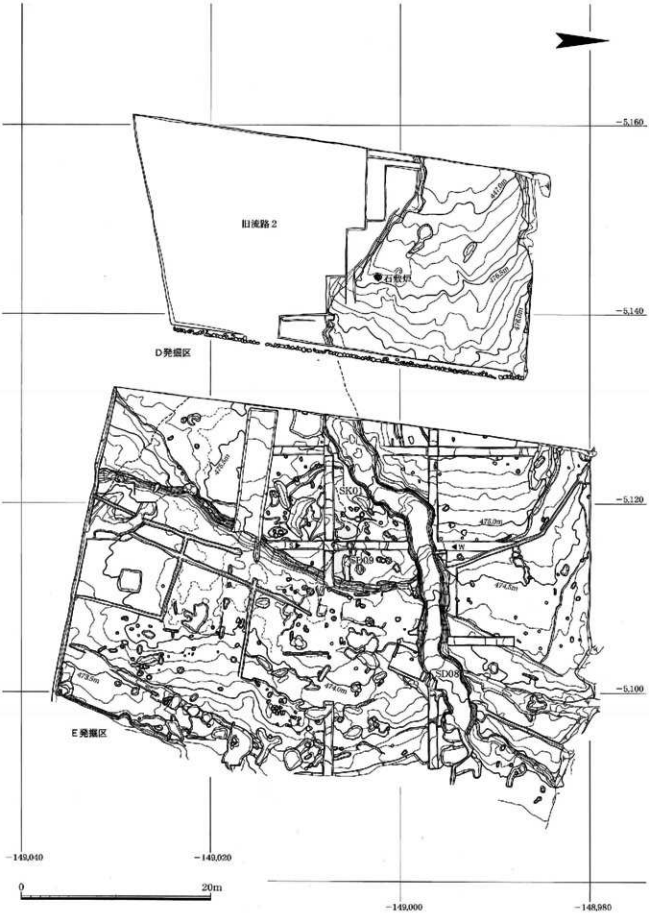


図38　D・E発掘区下層遺構面平面図（1/400）

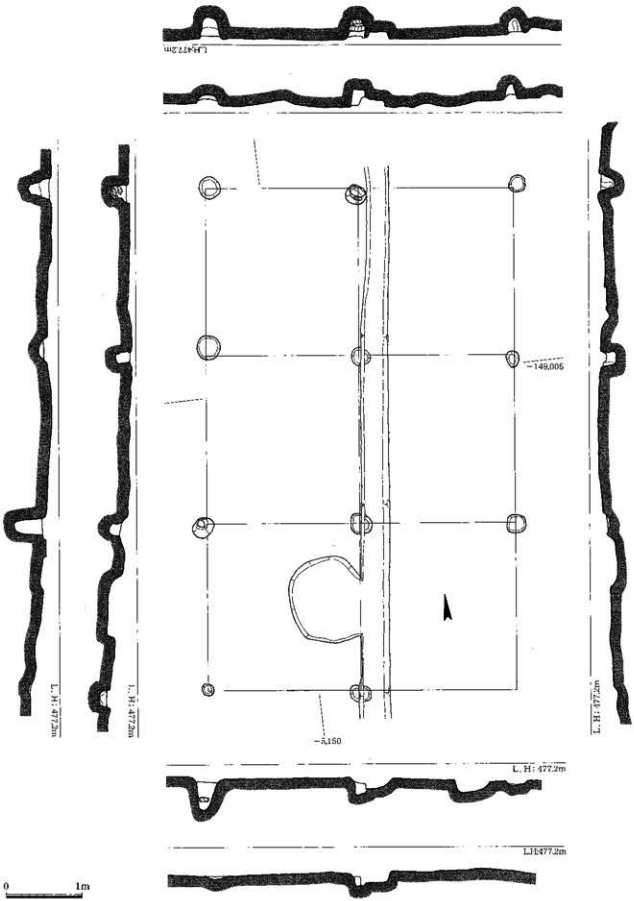
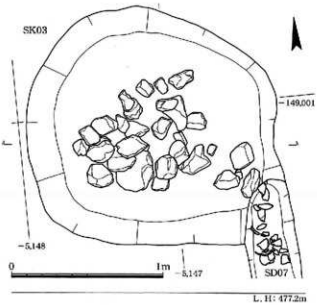


図 39　S B 01 平面図・断面図（1/50）



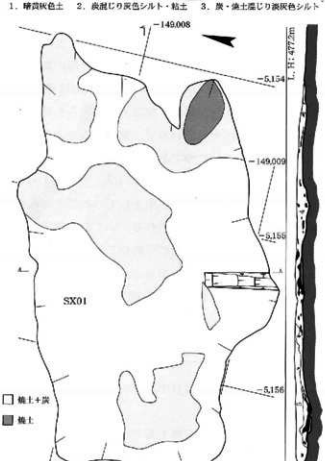


図40　ＳＫ03・ＳＸ01平面図・断面図（1/25）

ＳＸ01　多量の炭を混じえる暗黄灰色土の広がりとして当初認識した遺構で、暗黄灰色土下の床面は焼けて赤変している。南北2.83m、東西1.6mの不整形を呈し、深さは0.05mほどしか残っていない。床面には若干の凹凸があり、西側が約0.05m低くなるものの、ほぼ平坦である。炭窯であった可能性もあるが、判然としない。暗黄灰色土からの出土遺物はほとんどなかったが、灰褐色土の上から構築されているので、12世紀以降の遺構と推測できる。

流路２　発掘区南西隅でその一部を検出した。北側肩部を8.5m分確認したが、南側肩部は未確認である。深さ0.2～0.3mで、底から12世紀の遺物が出土している。

ii．縄文時代の遺構

中世遺構面の調査中において、微高地Ａ下層に縄文時代遺物包含層が存在することが明らかとなった。そのため、北側の一部でこの包含層を試掘し、その深さや包含される遺物の時期・量、遺構面の有無などを調査した。その結果、縄文時代遺物包含層は大きく３層に分かれることが判明した。上層（黄色シルト）からは縄文時代早期・中～後期の土器が多数出土し、異なる時期の遺物が２次堆積している状況が認められた。一方、中層（淡黄灰色シルト）・下層（淡灰色砂質シルト）からは遺物が少量出土したにとどまるが、下層上面で神宮寺式（新段階）の土器がまとまって出土しており注目される。下層の下は旧微高地Ａの地山面であるが、下層上面や地山上面には旧表土と考えられる暗灰色砂質シルトが一部で認められ、これが縄文時代遺構面と考えられる。遺構面は北西から南東へと下る緩斜面地で、発掘区北半部にのみ遺存した。発掘区南半部には旧流路２が広がる。なお、旧微高地Ａの南端に沿ってＥ発掘区から続くＳＤ08の堆積層が認められたが、旧流路２の堆積層によって南側が削られており、その幅は不明である。

石敷炉（図42）　縄文時代遺構面において石敷炉１基を検出した。旧流路２の肩部から北へ1.5mの地点に単独で存在する。南北8.1m、東西7.4m、深さ0.16mの丸い凹みを地面に掘り、その中に石をすり鉢状に並べて炉壁をつくる。石の並べ方をみると、中央の底に台形の石を平らに置き、斜めに立ち上がる壁には東側を除いて放射状に石を並べている。石と石の間に三

図41　ＳＡ01平面図・断面図（1/50）

角形の石を充填しているところもみられる。谷側となる東側では石を横方向に並べているが、これは焚口の方向を意図しているのかも知れない。炉跡の中には黒色の炭層と火を受けた多量の礫が堆積していた。周囲から住居跡が見つかっておらず、屋外に設けられた調理場の炉跡ではないかと思われる。炉跡から遺物が出土していないため、つくられた時期は確定できない。ただし、炉跡の南東約６ｍの地点で遺構面直上から神宮寺式土器片がまとまって出土しており、周辺での類例からみても縄文時代早期の遺構と考えて大過ないだろう。なお第４章で報告するが、炉跡内部に堆積した炭層の放射性炭素年代測定を行なった結果、calＢＣ8,800～8,620年の暦年代値が得られている。

ＳＤ08は今回出土土器がないが、重複関係から縄文時代遺物包含層上層より古く、中層より新しい。

旧流路２は重複関係から縄文時代遺物包含層上層より新しく、埋土からⅤ群Ｄ類の土器が出土していることから、中期末～後期初頭以降の堆積と考えられる。

ⅲ．縄文時代遺物包含層の遺物分布

試掘調査および本調査で、縄文土器380点、石器769点の縄文時代遺物が出土しており、これらの遺物分布を遺構平面図や断面図に投影した。なお、時期不明の土器は、煩雑となるため分布図から除外している。土器分類の詳細は、後述の縄文土器の項（p.51～57）を参照されたい。

平面分布は、北半の縄文時代遺構面と南半の中世遺構面を合成した平面図を作成して投影した（図43・44）。これを見ると土器には、ある程度の集中を持つⅠ・Ⅲ群と、散漫な分布を呈するⅡ・Ⅴ群という２つの様相を見ることができる。ただし、Ⅰ群では同一個体と見られる土器がまとまって出土しているのに対し、Ⅲ群は複数の上器が等高線に沿って大きく広がり、傾斜変換点付近に集中する傾向がみられる。このことから両者の性格は分けて考えるべきであろう。また石器は、土器と分布傾向がよく似ていることから、土器と同じ成因によって分布している可能性が高い。石鏃については石敷炉の東側、おもにⅠ群の土器が分布する範囲に多く見られる。

垂直分布（図45～48）は、Ｙ＝－5,140mライン、およびＸ＝－149,003.7mライン土層図に投影して検討したが、これを見ると、下層上面にⅠ群Ｂ2類ｃ種（神宮寺式新段階）が分布のピークを持つ様子が確認できる（図45）。このことから下層上面をこの時期の遺構面と認定できる。またⅠ群Ｂ２類ｃ種の集中は同一個体で構成されることから、遺物はほぼ原位置を保っている可能性が高い。なお下層中からも若干Ⅰ群Ｂ２類ｃ種が出土しているが、量的に落ち込みと考えて差し支えないレベルである。

中層は包含される遺物が少ないが、Ⅰ群Ｄ４・６類（「山芦屋期」～黄島式）が出七していることから早期前葉～中葉の堆積と考えられる。いずれも層境に分布のピークも持たず、層内に浮動して分布することから２次堆積層である可能性が高い。

上層はⅢ群、Ⅴ群の多数の縄文土器を包含するが、中層同様、分布が浮動と混在の様相を呈することから土器が原位置を遊離していることは明らかである。Ⅲ群の土器は平面分布である程度の広がりと集中を見ることができたが、やはり中期末～後期前葉以降の２次堆積の可能性が高い。

以上のことから、下層上面で検出したⅠ群Ｂ２類ｃ種以外の遺物は、ほぼすべて２次堆積と考えられる。下層遺構面に石敷炉があることから、本来は神宮寺式（新段階）の時期の遺物の広がりがあったと思われるが、早期前葉～中葉以降の堆積によって流出してしまったと考えられる。石敷炉の東側に分布する早期の上器や石器は、もともと石敷炉周辺やその上方にあた

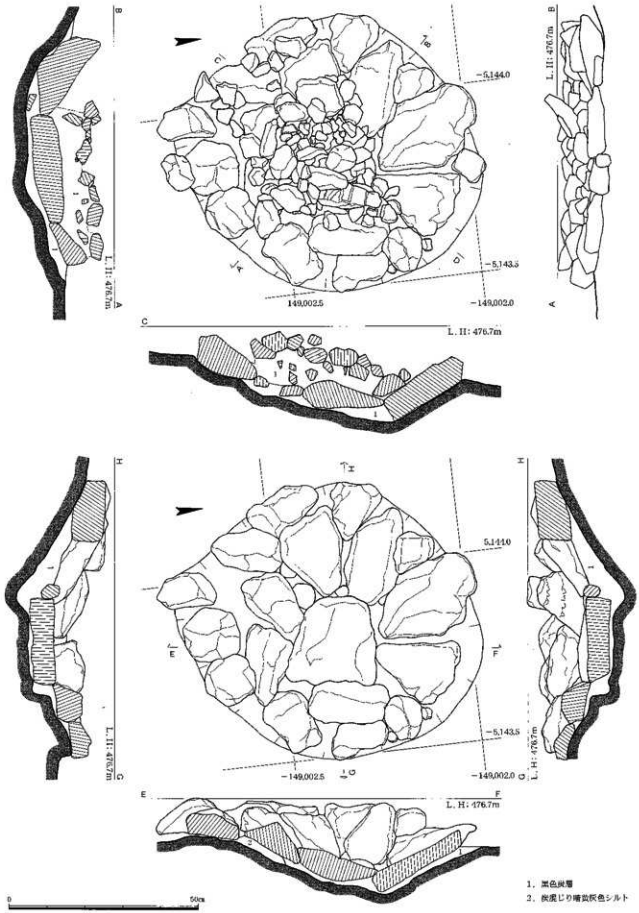


図 42　石敷炉平面図（上：検出状態、下：完掘状態）・断面図（1/10）

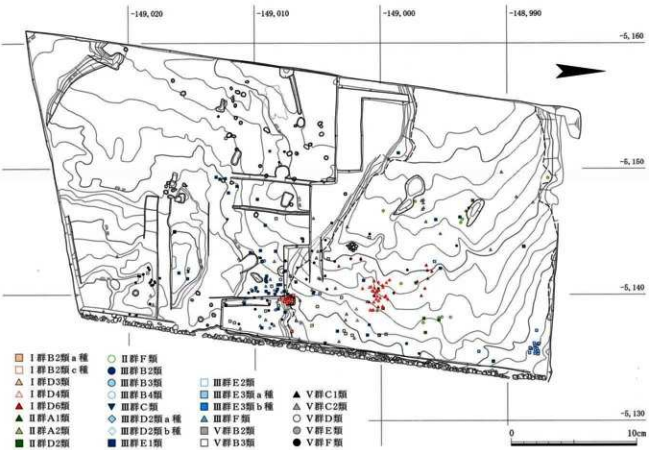


図 43　Ｄ発掘区　縄文土器平面分布図（1/300）

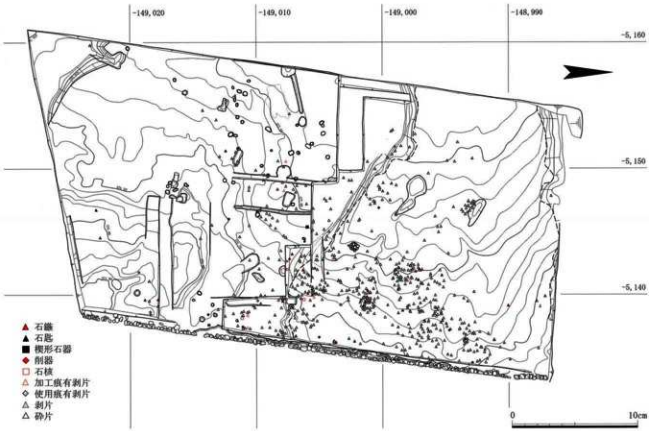


図 44　Ｄ発掘区　石器平面分布図（1/300）

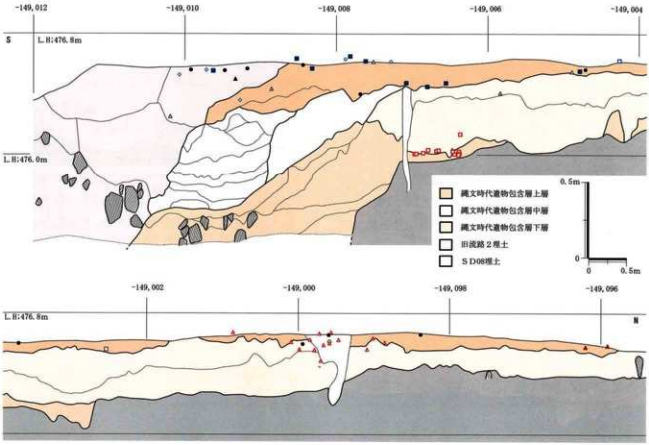


図 45　Y＝－ 5,139.5 ～－ 5,140.5 m間縄文土器垂直分布図（Y＝－ 5,140 mライン土層図に投影）

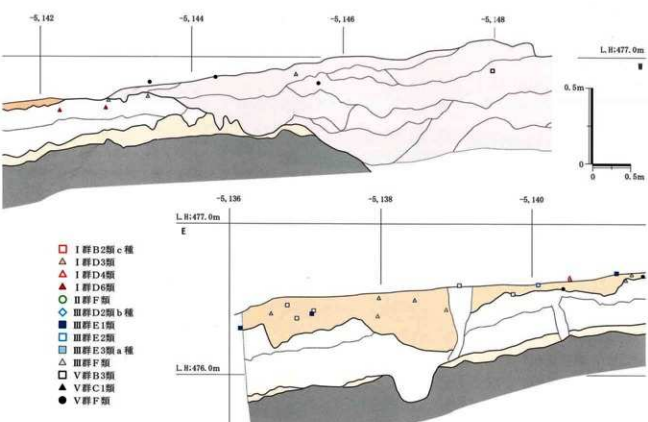


図 46　X＝－ 148,999.7 ～－ 149,004.7 m間縄文土器垂直分布図（Y＝－ 149,003.7 mライン土層図に投影）

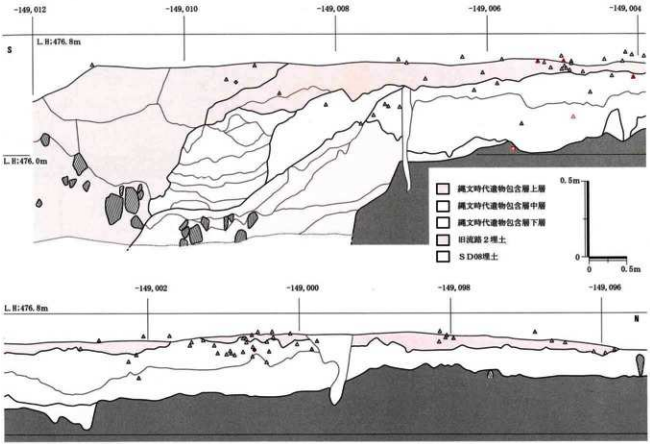


図 47　Y＝－ 5, 139. 5 ～－ 5, 140. 5 m間石器垂直分布図（Y＝－ 5, 140 mライン土層図に投影）

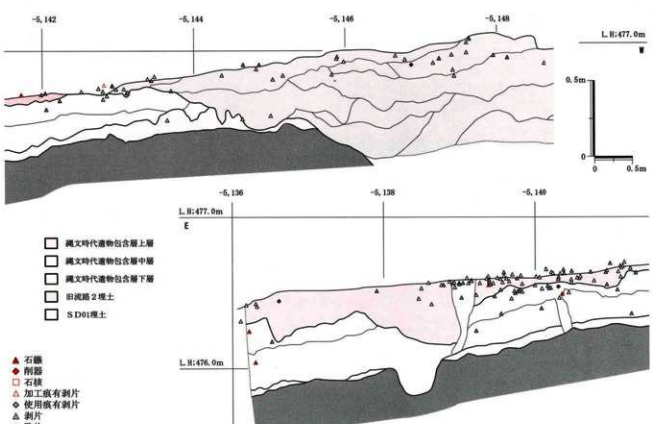


図 48　X＝－ 148, 999. 7 ～ 149, 004. 7 m間石器垂直分布図（Y＝－ 149, 003. 7 mライン土層図に投影）－

る北西側で使用されていたものではないだろうか。中期末～後期初頭の遺物に関しては、この時期の遺構がないため判然としないが、やはり地形的に上方に当たる北西方向から流入したと考えるのが妥当だろう。

（5）E発掘区

E発掘区は、微高地Aの東側先端部に位置し、もともと南西から北東へ向かう緩傾斜地を形成していたと考えられる。現状では、水田造成によって概ね上下2段に削平されている。

基本的な層序は、水田耕土以下、水田造成土、中世遺物包含層（灰色シルト）、縄文時代遺物包含層、地山（黄灰色砂礫）となるが、削平の著しい発掘区の北部や中央部、中南部では、水田造成土の直下で地山となり、遺物包含層が残存しない。縄文時代遺物包含層は基本的に5層あり、上から第1層：黄灰色シルト、第2層：暗灰色シルト、第3層：黄灰色砂質シルト、第4層：暗灰色砂質シルト、第5層：暗灰色礫混シルトである。第1層に縄文時代早期後葉の条痕文系土器、第2～4層に縄文時代早期前葉の押型文土器が包含されていると考えられる。第5層からは石器のみが出土し、土器は出土しなかった。縄文時代遺物包含層は、基本的に発掘区の西中央部で第1～5層、東部で第1層を確認した。以下、第1層を縄文時代遺物包含層上層、第2～4層を縄文時代遺物包含層中層、第5層を縄文時代遺物包含層下層とする。

遺構面は、中・近世の遺構を確認した縄文時代遺物包含層第1層上面および地山面（標高474.6～474.5m、474.0～473.5m）、縄文時代の遺構を検出した縄文時代遺物包含層第2層上面および地山面（標高474.6～473.9m、474.0～473.4m）の2面である。前者を上層遺構面、後者を下層遺構面とする。

検出遺構には、縄文時代の流路や土坑、および中・近世の掘立柱建物、流路、溝、土坑がある。以下に、主な遺構の概要と縄文時代遺物包含層の遺物分布について述べる。

i．中・近世の遺構

上層遺構面で検出した掘立柱建物4棟、溝4条、炭窯1基、土坑3基、焼土坑3基などがある。

SB02　発掘区西中央部で検出した桁行3間（5.4m）、梁間2間（3.6m）の東西棟建物で、北側に廂を設ける。廂の出は0.9mである。建物主軸は、東で南に振れる。

SB03　発掘区西中央部で検出した桁行3間（5.4m）、梁間2間（4.5m）の東西棟建物である。建物主軸は、東で南に振れる。

SB04　発掘区西中央部で検出した東西2間（3.0m）、南北2間（3.0m）の建物である。建物主軸は、ほぼ正方位を示す。

SB05　発掘区の北西部で検出した桁行3間（6.6m）、梁間2間（3.0m）の東西棟建物で、建物内部東側に間仕切の柱穴がある。建物主軸は、東で若干南に振れる。

これらの建物の柱穴埋土から12世紀頃の土器片が出土しており、その頃の建物である可能性が高い。また、重複関係から少なくとも2時期の変遷が考えられる。

SD04　発掘区北東部で検出したSD08と一部重複する流路である。幅約1.0m、深さ約0.2mで、南西から北東方向へ流れる。南西側でシルト・細砂・粗砂が互層に堆積する。埋土から、12世紀の土器が出土した。

SD05　発掘区北東部で検出した南南西から北北東に流れる溝である。幅約1.5～2.0m、深さ約0.3m。埋土から12世紀前半～13世紀中葉の土器が出土した。

SD06　発掘区西中央部で検出した北からやや屈曲して南東に流れる溝である。幅約0.4～2.5m、深さ約0.2～0.5m。後世の削平が著しく、発掘区北西部で消失する。埋土から13世紀の土器が出土した。

SD07　発掘区南東部で検出した南南西から北北東に流れる溝である。幅約1.6～3.0m、深さ約0.2～1.4m。北端で礫層に突き当たり、東へ大きく屈曲する。後世の削平が著しく、発掘区の南端で消失する。埋土から12世紀の土器とともに板材が出土した。

炭窯　南北約0.8m、東西約0.58mの楕円形掘形内に構築された小型の炭窯と考えられる。地形にあわせて、南東に焚口、北西に煙出しを設ける。炭窯の規模は、全長0.65m、焼成部幅0.4m、焚口部幅0.23mで、床面はほぼ平坦である。高さ0.05m分が遺存したのみで、上部の構造はわからない。焼成部床面から木炭が出土した以外は、出土遺物はなかった。時期不明ながら、構造的にみて近世以降の炭窯と考えられる。

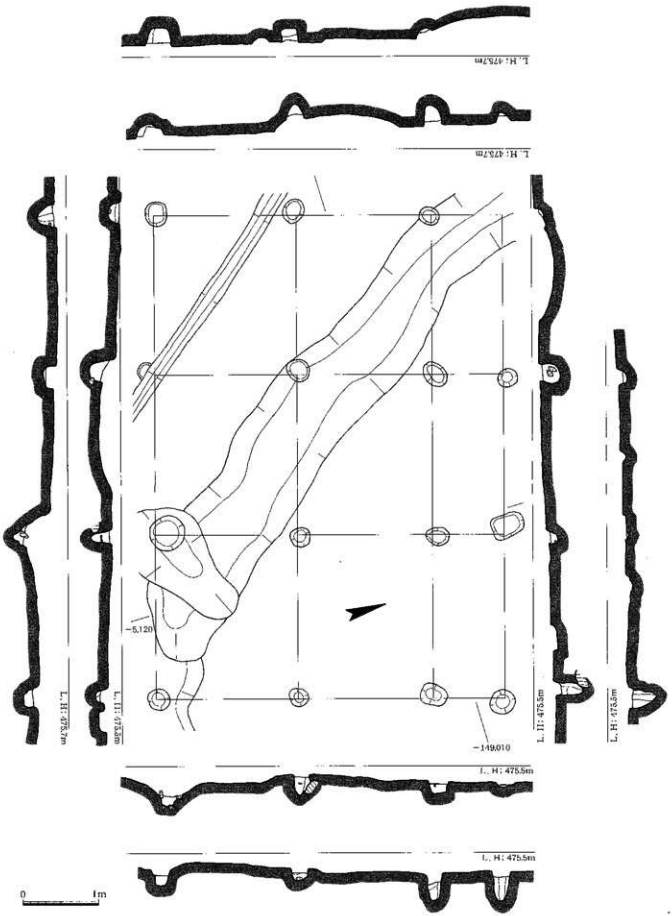


図49　ＳＢ02平面図・断面図（1/50）

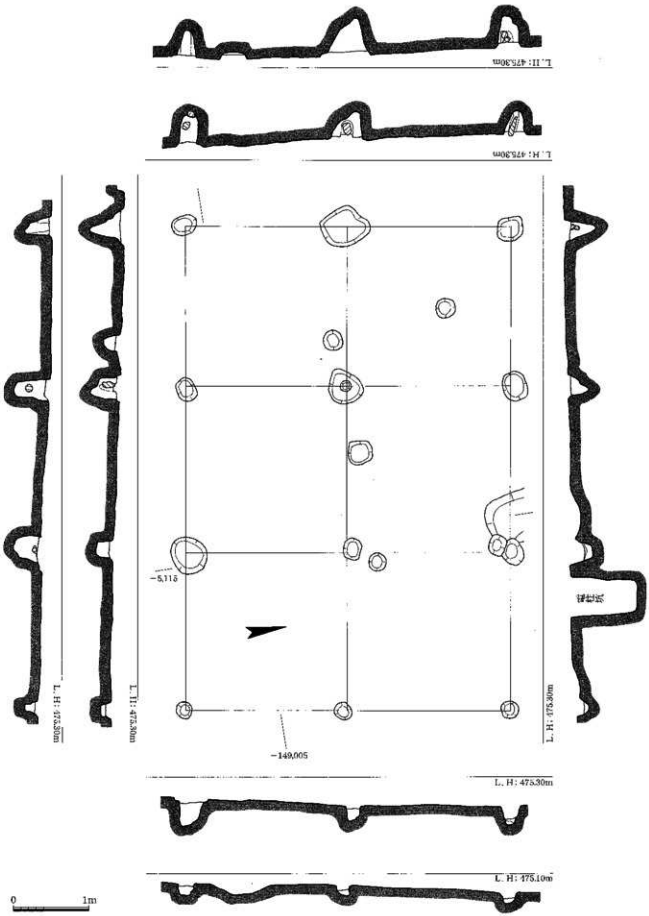
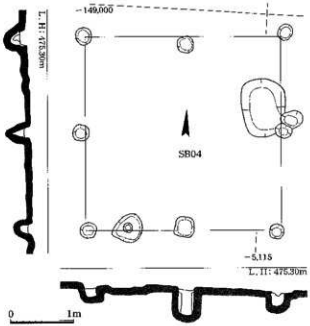


図 50　ＳＢ 03 平面図・断面図（1/50）



ＳＫ04　直径約1.3m、深さ約0.1mの円形掘形内に曲物を据え置いた土坑である。曲物は、直径102cm、高さ４cmで、扁朽して遺存状態が悪い。曲物内部に堆積する灰色砂土からガラス片が出土し、近代以降に構築された遺構と考えられる。

ＳＫ05　南北約2.5m、東西約1.5m、深さ約0.75mの不整形土坑である。埋土は砂層で、南端部の底近くから12世紀の土師器皿・羽釜片がまとまって出土した。湧水があり、北端で接続するＳＤ04はその排水溝として機能したと考えられる。

ＳＫ06　南北約２m、東西約1.5m、深さ約0.2mの隅丸方形土坑である。埋土から13世紀中～後葉頃の土器片が出土した。

ＳＫ07　南北約0.6m、東西約0.55m、深さ約0.03

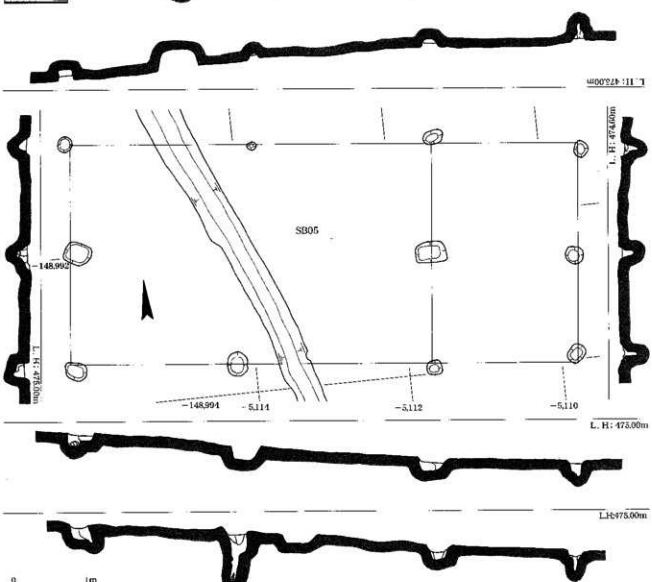


図51　ＳＢ04平面図・断面図（1/60）、ＳＢ05平面図・断面図（1/50）

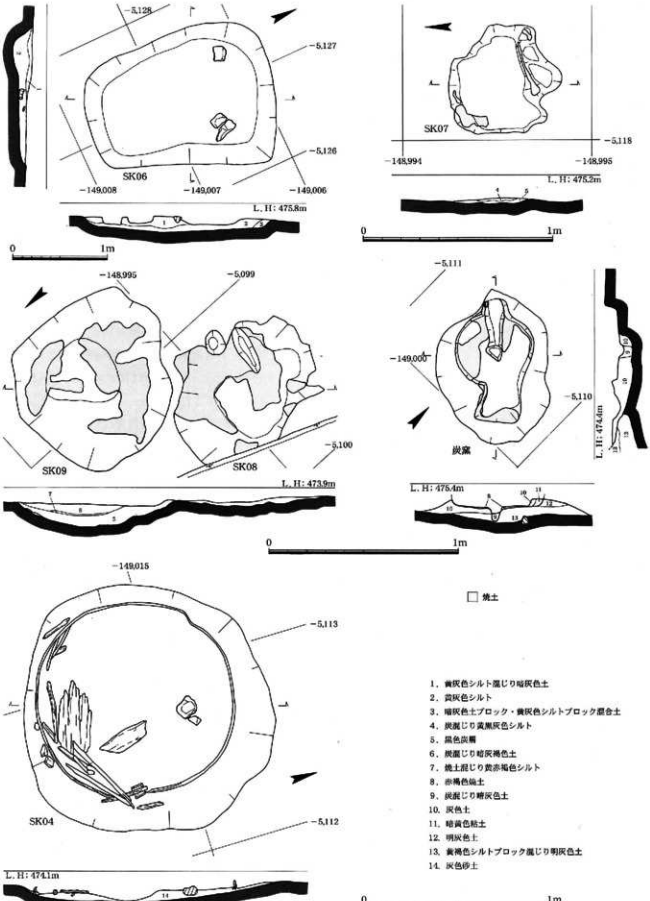


図 52　ＳＫ 04・07・08・09、炭窯平面図・断面図（1/20）、ＳＫ 06 平面図・断面図（1/40）

mの不整形焼土坑である。壁面の一部が焼けて赤変し、内部には黒色炭層が堆積する。

ＳＫ08・09　隣接して構築された2基の焼土坑である。ＳＫ08は南北0.87m、東西0.83m、深さ0.12m、ＳＫ09は南北0.83m、東西0.66m、深さ0.04mで、いずれも不整形を呈する。壁面の一部が焼けて赤変し、内部に黒色炭層が堆積する点で、ＳＫ07と共通する。なお、ＳＫ09内部に堆積した炭化物を放射性炭素年代測定した結果、cal AD 1,005 ～ 1,185年の暦年代値が得られた。

ii．縄文時代の遺構

下層遺構面で検出した流路2条、土坑1基などがある。その他、多数の土坑状の凹みを検出した。いずれも不整形な平面形を呈し、縄文時代遺物包含層第1層で埋まっている。平面形や埋土の堆積状態から風倒木痕である可能性が高い。

ＳＤ08　幅2.5 ～ 4.0m、深さ0.8 ～ 1.0mの南西から北東に流れる流路。縄文時代遺物包含層中層上面で確認した。流路内の堆積は、シルトと砂礫の互層によって形成され、試掘調査第1発掘区では良好な黄島式土器が出土している。遺物分布の項で詳述するが、縄文時代早期前葉～末・中期末～後期前葉の遺物が出土していることから、中期末～後期前葉の流路と考えられる。

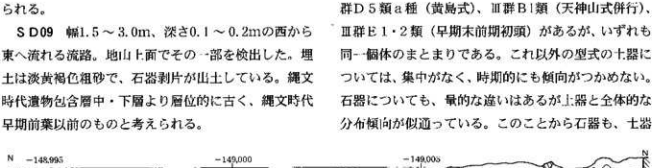
ＳＤ09　幅1.5 ～ 3.0m、深さ0.1 ～ 0.2mの西から東へ流れる流路。地山上面でその一部を検出した。埋土は淡黄褐色粗砂で、石器剥片が出土している。縄文時代遺物包含層中・下層より層位的に古く、縄文時代早期前葉以前のものと考えられる。

ＳＫ10　長軸約2.5m、短軸約1.5m、深さ約0.6mの平面不整形を呈する土坑。縄文時代遺物包含層第中層上面にて検出した。埋土から縄文時代早期後葉の土器、石器が出土している。埋土は、縄文時代遺物包含層上層と同じく黄色シルトである。

iii．縄文時代遺物包含層の遺物分布

試掘および本調査で、縄文土器438点、石器714点の縄文時代遺物が出土している。これらの遺物分布を遺構平面図や断面図に投影した。なお、時期不明の土器は、煩雑となるため分布図から除外している。土器分類の詳細は、後述の縄文土器の項（p.51 ～ 57）を参照されたい。石材別分布については、遺構や遺物包含層から出土したサヌカイト製以外の石器が、蔵石とチャート製剥片1点のみであるため示していない。ただし、旧石器時代の角錐状石器は別途示した。

平面分布を下層遺構面の地形図に投影した（図54・55）。先述のように、旧地形は後世の水田造成によって上下2段に削平されている。このため、削平の著しい段差下の平坦面では遺物包含層自体がなく、遺物分布が希薄となっている。出土した遺物には、早期中葉～前期初頭、中期末～後期前葉のものがあり、上器については、いくつかの型式で分布の集中が見られる。これらには Ⅰ群Ｂ２類ａ・ｂ種（神宮寺式新段階）、Ⅰ群Ｄ５類ａ種（黄島式）、Ⅲ群Ｂ1類（天神山式併行）、Ⅲ群Ｅ１・２類（早期末前期初頭）があるが、いずれも同一個体のまとまりである。これ以外の型式の土器については、集中がなく、時期的にも傾向がつかめない。石器についても、量的な違いはあるが上器と全体的な分布傾向が似通っている。このことから石器も、土器



1．淡褐色炭褐色土（中層）
2．灰黄色粘質シルト
3．黄色シルト
4．灰黄色シルト
5．暗灰黄色礫混シルト
6．淡黄黄色シルト・暗灰色シルト混合土
7．灰黄色シルト・暗灰色シルト混合土
8．黒灰色シルト
9．灰色砂礫
10．淡黄灰色砂礫
11．淡黄白色細砂・粗砂の互層
12．淡黄褐色細砂
13．暗灰色シルト
14．灰黄色砂質シルト
15．暗灰色シルトブロック混灰色シルト
16．黄灰色粘質シルト
17．黄灰色シルト混暗灰色シルト
18．淡灰色粗砂（SD09）
19．暗灰色シルト混灰色シルト
20．暗黄灰色礫混シルト
21．暗黄灰色砂
22．黄灰色礫混粗砂
23．淡黄褐色粗砂
24．淡黄褐色礫混粗砂（SD09）
25．暗灰色礫混シルト
26．黄灰色シルト混砂礫
※SD08 層土一 4 ～ 13 層

図53　Ｅ発掘区　縄文時代遺物包含層断面図

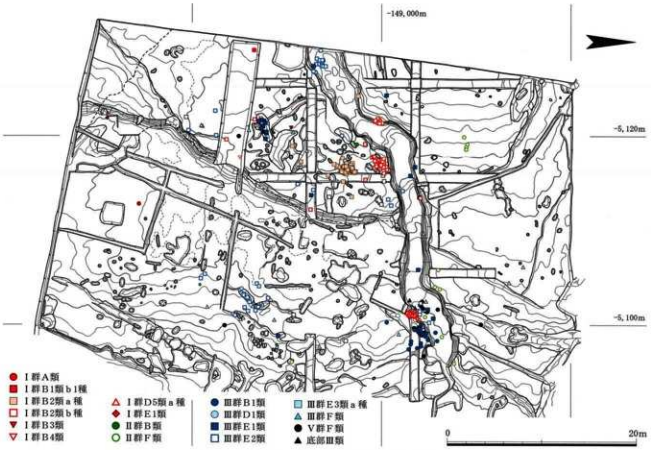


図54　E発掘区　縄文土器平面分布図（1/400）

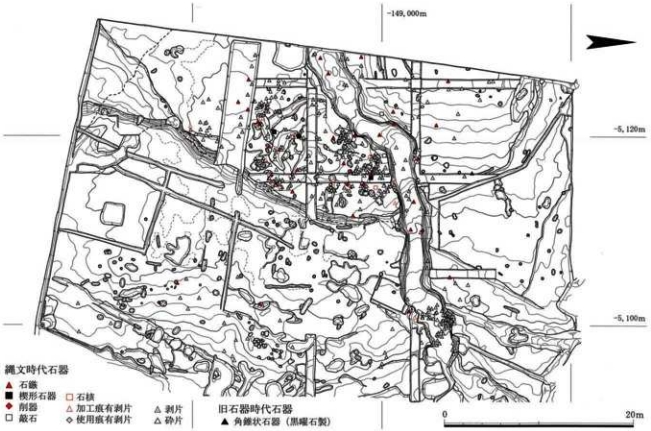
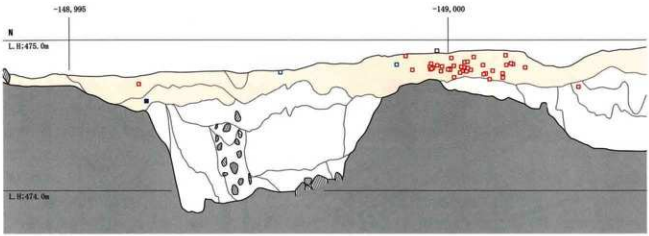
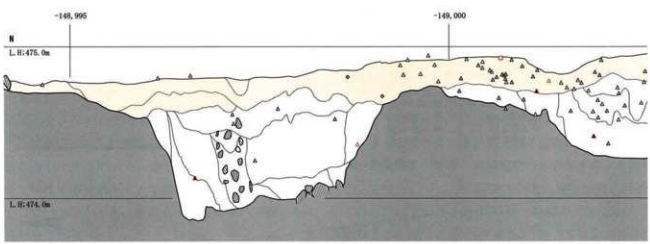


図55　E発掘区　石器平面分布図（1/400）





縄文土器
- Ⅰ群B2類a種
- Ⅰ群B2類b種
- Ⅲ群E1類
- Ⅲ群E2類
- Ⅲ群E3類a種
- Ⅲ群F類

石器
- 石鏃
- 石核
- 加工痕有剥片
- 使用痕有剥片
- 剥片
- 砕片

図 56　Y＝－ 5, 113 ～－ 5, 118 m間縄文土器垂直分布図（Y＝－ 5, 115 mライン土層図に投影）（上段）

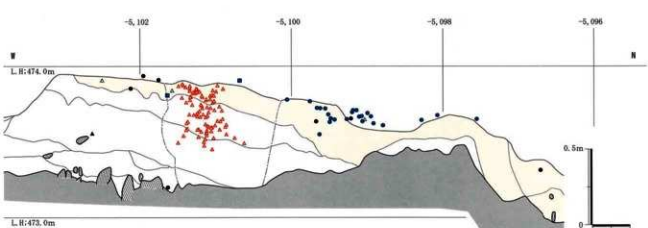
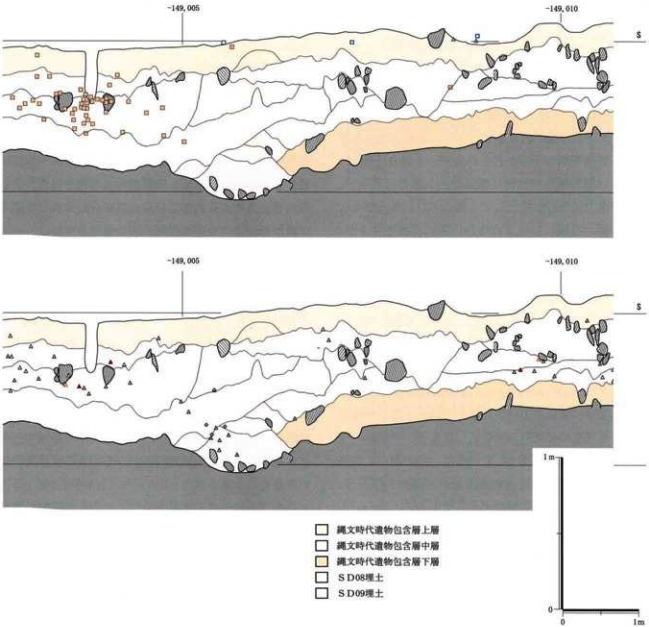


図 57　X＝－ 149, 893 ～－ 149, 898 m間縄文土器垂直分布図（X＝－ 149, 896 mライン土層図に投影）



Ｙ＝－５,１１３～－５,１１８ｍ間石器垂直分布図（Ｙ＝－５,１１５ｍライン土層図に投影）（下段）

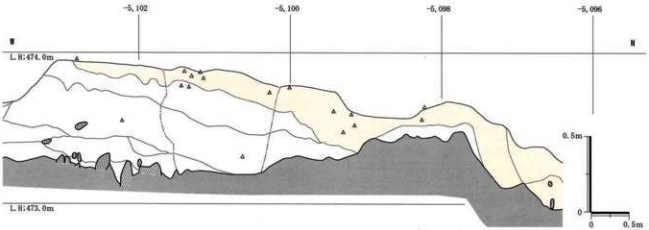


図 58　Ｘ＝－１４９,８９３～－１４９,８９８ｍ間石器垂直分布図（Ｘ＝－１４９,８９６ｍライン土層図に投影）

と同じ成因によって分布している可能性が高いと考えられる。

Ｙ＝－5,115mライン土層図に投影した垂直分布を見ると（図56）、縄文時代遺物包含層上層にⅠ群Ｂ２類ｂ種（神宮寺式新段階）の集中、および中層にⅠ群Ｂ2類ａ種（神宮寺式新段階）の集中を見ることができる。上層には他に、Ⅲ群Ｅ１・２・Ｆ類といった早期末～前期初頭の土器が含まれるが、Ⅰ群Ｂ２類ａ・ｂ種の時期関係を層位的に確認できた意義は大きい。石器分布では量的な差として上層とそれ以外の層を区別できる。石鏃については遺物の項にて後述するが、上層出上のものに早期～前期的な様相が比較的多く見られ、中層出上のものに早期的な様相を見ることができる。下層出上の石器は、この投影図には表れないが、砕片１点が出上したのみであり、中層より層位的に古いＳＤ09も、使用痕有剥片と剥片があるのみで詳細は不明である。

次にＸ＝－149,896mライン土層図に投影した垂直分布（図57）を見ると、ＳＤ08からは、Ⅰ群Ｄ５類ａ種（黄島式）の他に早期末の底部Ⅲ類と、中期末～後期前葉のＶ群Ｆ類が出土していることがわかる。底部Ⅲ類、Ｖ群Ｆ類は僅少のため混入の可能性も残るが、ＳＤ08底面からＶ群Ｆ類が出上していることから、上層からの落ち込みではないと考えた。また、縄文時代遺物包含層上層からはⅠ群Ｄ5類ａ種の他に、Ⅲ群Ｂ１・Ｆ類、Ｖ群Ｆ類が出上している。いずれの七器も層内に浮動し、層境に分布のピークを持たない。この傾向は石器においても同様である。

以上のことから、ＳＤ08は中期末～後期前葉、縄文時代遺物包含層中層は早期前葉の神宮寺式（新段階）、上層は中期末～後期前葉の堆積であり、遺物は全て２次堆積したものと考えられる。ただし、土器の同一個体がいくつも集中して出土することから、遺物はさほど原位置から遠く離れていない可能性が高い。Ｄ発掘区で、早期前葉（神宮寺式新段階）の石敷炉が出土していることから、中心的な活動箇所はＤ発掘区にあったと考えられるが、Ｅ発掘区もまた、遺跡の縁辺部として機能していたとするのが妥当と思われる。

（６）別所下ノ前遺跡の縄文時代遺物分布

以上、各発掘区の遺物分布を検討した結果、大半の遺物が原位置を遊離していることが判明した。ただし、これらの遺物がどの程度当時の様相を反映しているかは、遺物型式や組成の面から検討を加える必要がある。ここでは微高地Ａの遺物分布から遺跡の範囲についてまとめておきたい。

微高地Ａの縄文時代遺物包含層は、Ｃ発掘区に１層、Ｄ・Ｅ発掘区に３層ある。この内のＤ・Ｅ発掘区の３層は、出土する遺物の様相からそれぞれが対応関係にあると考えられる。Ｃ発掘区の層は、早期末～前期初頭・中期末～後期前葉・晩期中葉の遺物を包含し、早期前葉～後葉の遺物がない。これらのことから早期末～前期初頭・中期末～後期前葉の遺物包含層は微高地Ａのほぼ全域にあり、早期前葉、早期前葉～中葉の層は微高地Ａの東半部分に限られると考えられる。晩期中葉ついては、遺物がＣ発掘区に１点あるのみで混入の可能性を捨てきれない。このため分析不能である。

遺物分布の傾向では、中期末～後期前葉の分布が微高地Ａの西半に比較的多く見られ、東へ向かうほど少なくなることがわかる。これに対し、早期前葉の分布は微高地Ａの東半に多く、主にＤ発掘区東半からＥ発掘区西半にかけて分布する。早期末～前期初頭の分布は３発掘区を通じて見られるが、その多くはＤ発掘区にあるといえよう。

なお、石器の項で後述するが、対応する時期の遺物包含層に含まれる石器組成は、Ｄ・Ｅ発掘区を通じてよく似ている。また土器の同一個体がまとまって出土する点からも遺物がさほど原位置を遠く離れていない可能性が高いと考えたい。各層の遺物は時期の混在はあるものの、ある程度その場所の様相を反映しているのではないだろうか。Ｃ発掘区においても同一個体の土器の集中が確認できることから、同様の可能性が高いと思われる。

これらのことから、中期末～後期前葉の遺跡は微高地Ａの西半を中心に広がっていた可能性が高く、早期前葉～中葉の遺跡は微高地Ａの東半部分に限られると考えられる。早期末～前期初頭の遺跡については、この時期の遺物が中期末～後期前葉以降の再堆積であるため明確にできない。ただし、遺物の出土量やＥ発掘区で同一個体の土器がまとまって出土していることから、中心的な活動箇所はＤ・Ｅ発掘区にあり、遺跡範囲は微高地Ａのほぼ全体に広がっていたと考えるのが妥当だろう。（鑪方・大窪）

3．出土遺物

旧石器時代、縄文時代、古墳時代、中・近世の遺物が出土したが、その主体は縄文時代早期と12～13世紀の遺物である。以下、主な遺物について記述する。

（1）旧石器時代の遺物

角錐状石器（図83－1、表13）　D発掘区の掘立柱建物ＳＢ05北西隅柱穴埋土から出土した石器。石材は第４章で報告しているが、理化学分析により隠岐産の黒曜石と同定された。腹面には素材剥片の主要剥離面が残り、厚い横長剥片を素材としたことがわかる。背面中央には気泡の孔が残る。腹面側から急角度の調整を施しており、断面形はやや左に偏った三角形を呈する。稜上調整剥離はない。黒曜石製角錐状石器の出土は、奈良県内では本遺跡が初めてである。　（大窪）

（2）縄文時代の遺物

ⅰ．縄文土器

別所下ノ前・辻堂・大谷口遺跡の調査において出土した縄文土器は、早期前葉から前期前半、および中期末から晩期中葉の大きく２時期に分かれ、総数は1,423点、重量にして約9,460ｇに及ぶ。そのうち早期前葉から中葉にかけての押型文土器と、それに共伴する土器群が540点、約3,440ｇと最も多く、次いで早期末前期初頭の資料が494点、約3,240ｇ、中期末～後期前葉の資料が247点、約1,350ｇ、早期後葉の資料が138点、約1,410ｇと続く。以上の各時期の資料は、出土量の多寡の差はあるものの３遺跡で一定量出土している。これに対し、前期前半の資料は辻堂遺跡で３点、晩期中葉の資料は下ノ前遺跡で１点のみと極端に少ない。このことから該期における遺跡利用の消極性がうかがえる。

各遺跡から出土する早期前葉～後葉、早期末前期初頭、また中期末～後期前葉の資料は、巨視的にはそれぞれを同時期のものとして括ることが可能である。ただし各時期の様相には、共通する特徴の有無によって遺跡間で差異が認められることから、これが遺跡間の時期差を示すと考えられる。

Ａ．縄文土器の分類（図59～64）

これら３遺跡の資料の大半は遺物包含層からの出土であり、明確に縄文時代遺構から出土した資料は皆無である。しかし、３遺跡は非常に近接しており、遺物の出土傾向は当地域の継続的な利用を示している。そ

表２　別所遺跡群　縄文土器出土点数一覧

分類／遺跡	下ノ前							辻堂						大谷口
	3区													
	29ｇ	24ｇ	25ｇ	29ｇ	A地区	B地区	C地区	D地区	E地区	A地区	B地区	C地区	D地区	
Ⅰ類A類									1					
Ⅰ類B1類a類														84
Ⅰ類B1類b類														60
Ⅰ類B1類c類														13
Ⅰ類B1類d類														1
Ⅰ類B2類a類									1	38				1
Ⅰ類B2類b類														10
Ⅰ類B3類a類								1	57					
Ⅰ類B3類b類									65					
Ⅰ類B3類c類								33						
Ⅰ類B4類									1					
Ⅰ類B5類									1					
Ⅰ類C1類										2				
Ⅰ類C2類										2				2
Ⅰ類C3類														2
Ⅰ類C4類														1
Ⅰ類C5類								4						1
Ⅰ類D1類								33						
Ⅰ類D2類									79					
Ⅰ類D3類a類														1
Ⅰ類D3類								12						
Ⅰ類E類									1					
Ⅰ類E1類									3				1	
Ⅰ類F類					1							2		
Ⅰ類F2類						1								
Ⅱ類A1類								1						
Ⅱ類A2類								1						
Ⅱ類B類									1			2	1	
Ⅱ類C1類											1	12		
Ⅱ類C2類														2
Ⅱ類C3類												1		4
Ⅱ類D1類								6						15
Ⅱ類E類										2				23
Ⅱ類F類	1	1						75	17		1	4		17
Ⅱ類G類														2
Ⅱ類H類									31					
Ⅱ類I1類								2						
Ⅱ類I2類								1						
Ⅱ類I3類								4						
Ⅱ類I4類								2						
Ⅱ類I5類									1					
Ⅱ類I6類								2						
Ⅱ類I7類								11						
Ⅱ類I8類					2		3	54	34	1	3			
Ⅱ類I9類							4	39	62	1	7			
Ⅱ類I10類							36	24	12	4				
Ⅱ類I11類								16		1				
Ⅱ類I類						1	17	37	50	2	2	3		3
Ⅲ類A類													2	
Ⅲ類B類													1	
Ⅳ類A類							60							
Ⅳ類A1類					3									
Ⅳ類A2類					1									
Ⅳ類B1類								3						
Ⅳ類B2類								3						
Ⅳ類B3類								6						
Ⅳ類C1類								1						
Ⅳ類C2類								2						
Ⅳ類D1類								1						
Ⅳ類D2類								5						
Ⅳ類F類			1		1		17	37	59	3	3		2	21
Ⅴ類								1						
縄文1類														1
縄文2類								1	3					4
縄文3類									1					
縄文4類							10							
合計	1	1	1	2	23	2	168	390	438	66	20	22	8	29	297

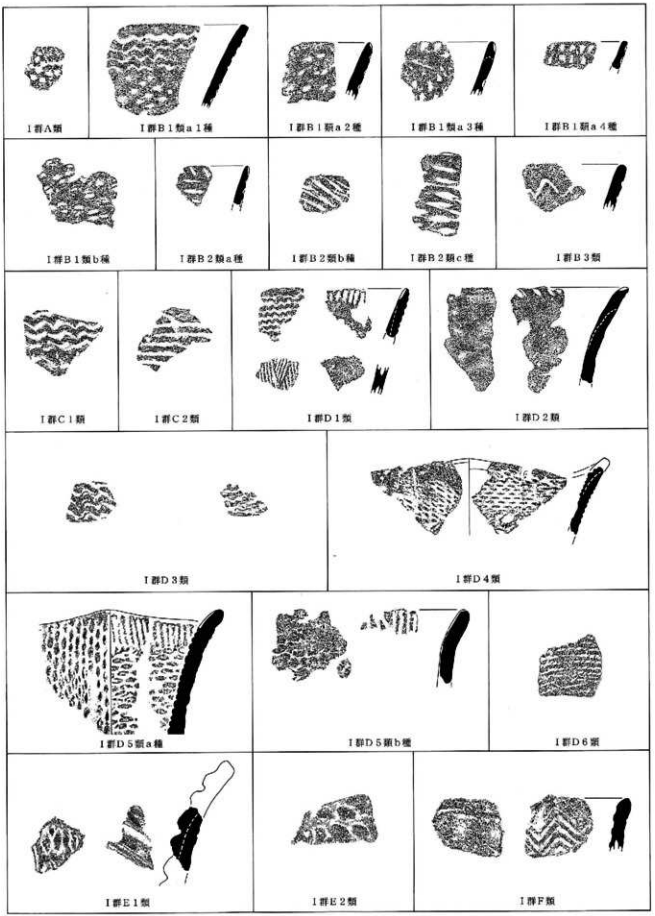


図59　縄文土器　分類模式図1

のため３遺跡を別所遺跡群として捉え、出土土器を同一定義のもとで分類を行なう。

以下、大別時期ごとに分類基準を示す[注1]。また各遺跡・地点における土器の出土点数は表２に示した。

Ⅰ群　早期前葉～中葉の土器（図59）

Ａ類　市松文を施すもの。大川式に比定。

Ｂ１類　ネガティブな楕円文・舟形沈文[注2]を施すもの。神宮寺式に比定。

Ｂ１類　ネガティブな楕円文を施すもの。

ａ種　楕円文の形状が菱形状を呈するもの。

ａ１種　口縁部に刻みを施さず、山の高さより幅がやや広い横長で緩やかな山形文を横位に施すもの。

ａ２種　口縁部外面に刻みを施し楕円文を縦位に施すもの。

ａ３種　口縁部外面に刻みを施し楕円文を横位に施すもの。

ａ４種　口縁部外面に刻みを施さずに楕円文を横位に施すもの。

ｂ種　楕円文の長軸両端が丸みをもちやや細長い形状を呈するもの。

ｂ１種　角閃石を多く含むもの。

ｂ２種　角閃石を殆ど含まないもの。

Ｂ２類　船形沈文を施すもの。

ａ種　長軸両端がやや丸く細長い文様のもの

ｂ種　文様が細長く長軸両端が鋭利なもの。

ｃ種　長軸両端が鋭利で文様が太く長いもの。

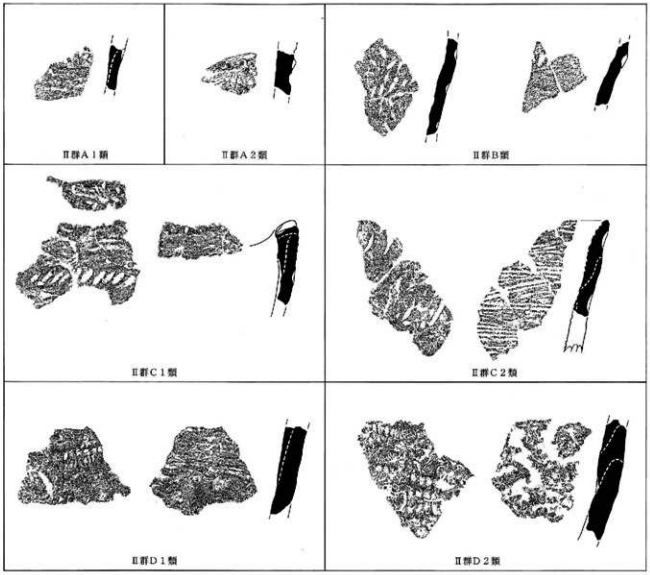


図 60　縄文土器　分類模式図２

B３類　口縁部に刻みを施さず、横幅より山の高さが長い縦長の山形文を横位に施すもの。

B４類　器壁が薄く角閃石を多量に含み、文様が観察されないもの。

C類　神並上層式併行の土器[註3]。

C１類　山の横幅が高さの倍程の横長の山形文を横位に施すもの。

C２類　平行線文を施すもの。

D類　「山芦屋期」[註4]～黄島式の土器。

D１類　口縁部内面に刻みを施し横幅より高さが長く非常に小振りな山形文と複合鋸歯文を横位に施すもの。

D２類　口縁部内面に刻みを施す無文土器。

D３類　横幅と高さが同等な山形文を施すもの。

D４類　波状口縁で、口縁端部を肥厚・端部内面を内傾させ、内外面に楕円文を施し、櫛状文を

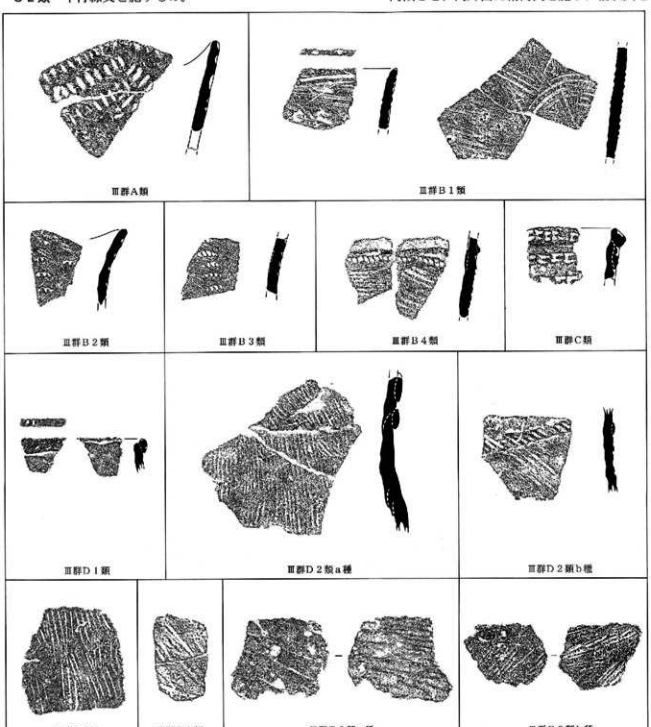


図61　縄文土器　分類模式図３

施さないもの。繊維を多く含む。

D５類　内外面に楕円文を施し、柵状文を施すもの。黄島式に比定。

a種　波状口縁で柵状文の幅が細く、小粒の楕円文を縦位に施すもの。

b種　柵状文の幅が太く、やや粒の大きい楕円文を横位に施すもの。

D６類　横位施文の撚糸文土器。

E類　器壁が厚く、粗大な楕円文を施すもの。高山寺式に比定。

E１類　内面に斜行沈線を施すもの。

E２類　内面に斜行沈線を施さない胴部片。

F類　大型の山形文を施し、繊維を多く含むもの。穂谷式に比定。

F１類　角閃石を多く含み褐色の胎土のもの。

F２類　角閃石を殆ど含まず橙色の胎土のもの。

Ⅱ群　早期後葉の土器（図60）

A類　茅山下層式併行の土器。

A１類　縄文地で頸胴部界の段に刻みを施すもの。

A２類　竹管状工具で円形刺突を施し沈線で区画を行なうもの。

B類　頸胴部界の段上に刻みを施し、波状の刺突列を施すもの。八ッ崎Ⅰ式に比定。

C類　条痕調整で、外面に平行する刺突列を施すもの。粕畑式に比定。

C１類　波状口縁で突起を有し、外面にヘラ状工具

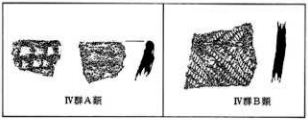


図62　縄文土器　分類模式図４

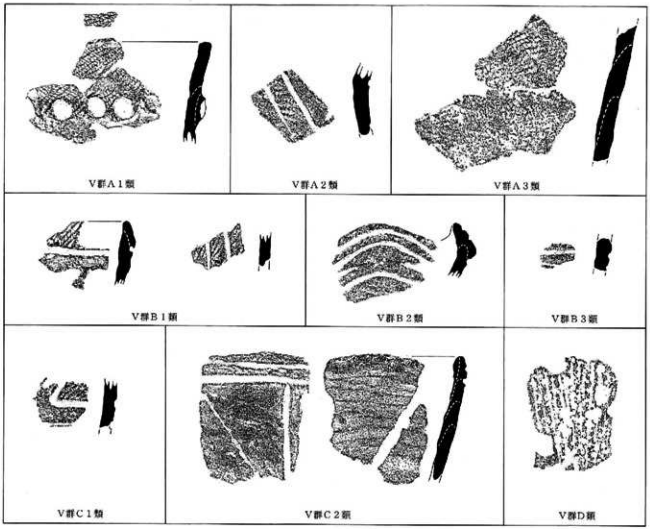


図63　縄文土器　分類模式図５

で平行に刺突を施すもの。

Ｃ２類　内面に細かい条痕を施し外面屈曲部に爪形状の刺突を施すもの。

Ｄ類　繊維を多量に含み節の太い縄文を施すもの。

Ｄ１類　内面に条痕を施すもの。

Ｄ２類　内面に条痕を施さないもの。

Ｅ類　繊維を多量に含み条痕を施すもの。

Ｆ類　胎土に繊維を多く含む無文土器。

Ⅲ群　早期末～前期初頭の土器（図61）

Ａ類　波状口縁で器壁が薄く、波状で多条の刺突列を施すもの。石山式に比定。

Ｂ類　貝殻腹縁を用いて文様を施すもの。

Ｂ１類　口縁部外面に貝殻腹縁で押引きを行ない、胴部に同心円状に条痕を施すもの。

Ｂ２類　外面に貝殻腹縁で縦位に刺突を施し、胎土に繊維を少量含むもの。

Ｂ３類　条痕地で外面に貝殻腹縁で縦位に刺突を施し、胎土に繊維を殆ど含まないもの。

Ｂ４類　外面条痕地で、微隆帯下に貝殻腹縁で横位に刺突を施すもの。

Ｃ類　口縁部に断面三角形状を呈する隆帯を貼付、上下に半截竹管状工具で連続刺突を施すもの。

Ｄ類　口縁部外面に扁平な隆帯を貼付けるもの。塩屋式に比定。

Ｄ１類　扁平な隆帯上に刺突を施すもの。

Ｄ２類　扁平な隆帯上に体部の条痕が及ぶもの。

ａ種　器壁の厚いもの。

ｂ種　器壁の薄いもの。

Ｅ類　器面内外両面ないし片面に条痕を施すもの。

Ｅ１類　細かい条痕を施すもの。

Ｅ２類　粗い条痕を施すもの。

Ｅ３類　繊維を束ねたようなものによる擦痕状の条痕を施すもの。

ａ種　擦痕状の条痕のみを内外どちらかに施すもの。

ｂ種　外面に擦痕状の条痕を施し、内面に細かい条痕を施すもの。

Ｆ類　胎土に繊維を微量に含む無文土器（摩滅したＥ類体部を含む）。

Ⅳ群　前期前半の土器（図62）

Ａ類　条痕地で、外面に半截竹管状工具の管外面を用いてＤ字状の刺突を施すもの。北白川下層Ⅰａ式に比定。

Ｂ類　器壁が薄く堅緻な胎土で、２種の縄文を用いて羽状に縄文を施文するもの。北白川下層Ⅱ式に比定。

Ⅴ群　中期末～後期前葉の土器（図63）

Ａ類　中期末の土器

Ａ１類　縄文地で隆帯上に円形状の刺突を施すもの。北白川Ｃ式に含まれる。

Ａ２類　斜行する沈線区画内に縄文を充填するもの

Ａ３類　外面に縄文を縦位車状に施すもの。

Ｂ類　中期末後期初頭の土器

Ｂ１類　縄文施文後に細い平行沈線を巡らすもの。

Ｂ２類　波状の口縁部に沿って細い沈線を施すもの

Ｂ３類　外面に沈線のみを施すもの。

Ｃ類　後期前葉の土器

Ｃ１類　縄文施文後に太い沈線で区画を行なうもの。中津式に比定。

Ｃ２類　口縁に沿って２本の平行沈線を巡らし、垂下沈線と直交させるもの。

Ｄ類　条線文を施すもの。北白川上層式に比定。

Ｅ類　胎土に砂粒を多く含んだ縄文施文土器。

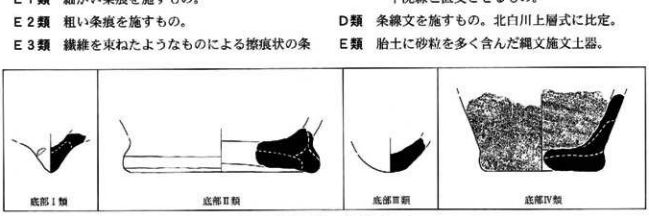


図64　縄文土器　分類模式図６

F類　胎土に砂粒を多く含んだ無文土器。

Ⅵ群　晩期中葉の土器（図67-50）

頸部が強く屈曲する器形で、口縁端部に刻みを施し、内外面を丁寧なナデで調整するもの。篠原式中段階～新段階に比定。

底部の分類（図64）

Ⅰ類　先端が乳頭状を呈するもの。ネガティブな楕円文が僅かに観察される。神宮寺式に比定。

Ⅱ類　平底で底面直上でくびれるか、そのまま直行して立ち上がるもので、繊維を多く含むもの。早期後葉に比定。

Ⅲ類　丸みを帯びた尖底で、砂粒を多く含み、若干繊維を含むもの。早期末に比定。

Ⅳ類　器壁が厚く砂粒を多く含む平底で、底面から真直ぐに立ち上がるもの。中期末に比定。

B．別所下ノ前遺跡の縄文土器（図65～82、表3～10）

別所下ノ前遺跡で出土した縄文土器は、総数1,015点、重量にして約7,100ｇである。そのうちⅠ群が282点、約2,480ｇ、Ⅱ群が48点、約320ｇ、Ⅲ群が466点、約3,095ｇ、Ⅴ群が218点、約1,194ｇである。Ⅵ群はＣ発掘区で1点のみ出土している。またⅠ群Ｆ類はＢ・Ｃ発掘区で各1点の出土である。

発掘区ごとの出土量はＥ発掘区が438点、約3,350ｇと最も多く、Ｄ発掘区が380点、約2,362ｇ、Ｃ発掘区168点、約1,140ｇ、Ｂ発掘区２点、約11ｇ、Ａ発掘区22点、約182ｇである。

概して下方の発掘区ほど出土量が多く、また古く位置づけられる資料もＤ・Ｅ発掘区に集中する傾向が指摘できる。これらの傾向には流出や流入の要素も加味しなければならないが、Ｄ発掘区において神宮寺式期の炉跡が検出されていることから、発掘区ごとの各時期の出土量は各地点の利用の実態をある程度反映していると考えられる。

以下、発掘区ごとに出土土器の報告を行なう。

試掘調査出土土器（図65-1～4）

1は第19発掘区出土土器で、胎土に繊維を含んだ胴部片である。外面は横位のナデによる屈曲が認められる。内面は摩滅のため調整不明である。早期後葉に属するものと考えられる。

2は第25発掘区出土土器で、胴部下半の破片である。外面はナデ・ユビオサエで調整され、器面内外には指頭圧痕が顕著に認められる。繊維を多く含み、特に内面には繊維痕が顕著である。早期後葉に属するものと考えられる。

3は第26発掘区出上上器で、胎土に砂粒を多く含んでいる。器面内外は摩滅が顕著であるが、外面は僅かに縄文ＬＲが観察され、内面は横位のナデによる擦痕が認められる。中期末～後期前葉に属するものと考えられる。

4は第28発掘区出土土器で、外面は左上がりの条痕、内面はナデ・ユビオサエで調整されている。胎土には細かい雲母・角閃石が多く、繊維も含む。早期末前期初頃に属するものと考えられる。

Ａ発掘区出土土器（図65-5～10）

5・6は縦位ないし斜位の沈線を平行に引いた後に縄文ＬＲを縦位に転がして区画内を充填するものである。5は頸部片と考えられ、内面には明確な稜が認められる。両者とも沈線内には明瞭に筋が認められ、上方から下方へ沈線を描いたと考えられるが、文様のモチーフは小片のため不明である。

7は深鉢胴部片で、外面に縄文ＲＬを縦位帯状に施す。外面には成形時の横位のナデによる擦痕を下→上方向の縦位のナデが切っているのが顕著に認められる。内面には右→左方向の横位のナデと指頭圧痕が認められる。

8～10は外面に条痕とナデで調整を行なった土器である。条痕中には細かい筋が認められる。9は条痕後に右下→左上方向のナデを行なっている。これらの内面は横位のナデで調整されている。

5～7は中期末、8～10は中期末から後期前葉に属するものと考えられる。

Ｂ発掘区出土土器（図65-11）

11は端部が先尖り状を呈する口縁部片で、外面は口縁部に横位のナデを行ないやや外反させ、内面には大型の山形文を横位に施す。角閃石が多く、繊維も含む。穐谷式に比定されるものである。

Ｂ発掘区では早期末前期初頭に属すると考えられる無文土器が1点出土しているが、細片であるため当資料のみ図化した。

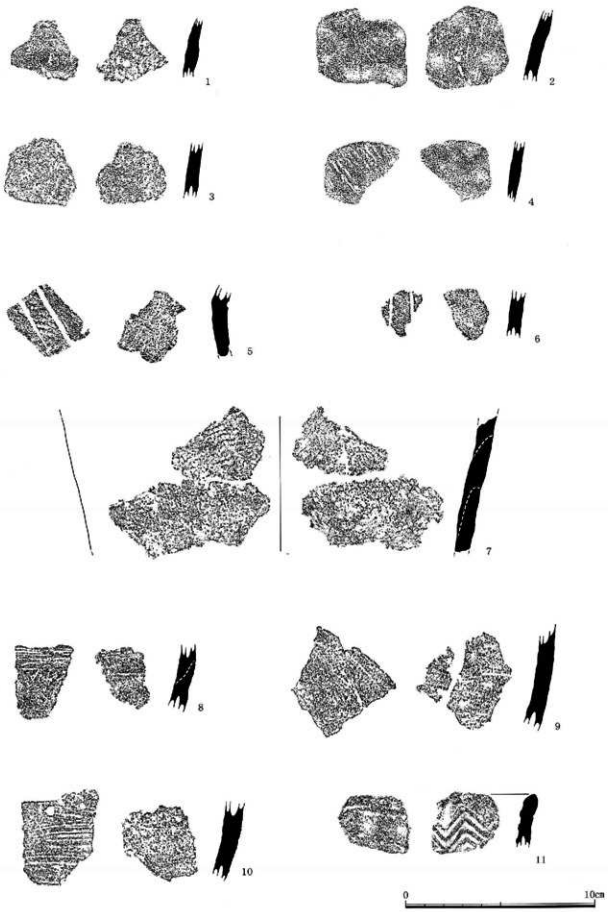


図 65　別所下ノ前遺跡出土縄文土器①（1/2）

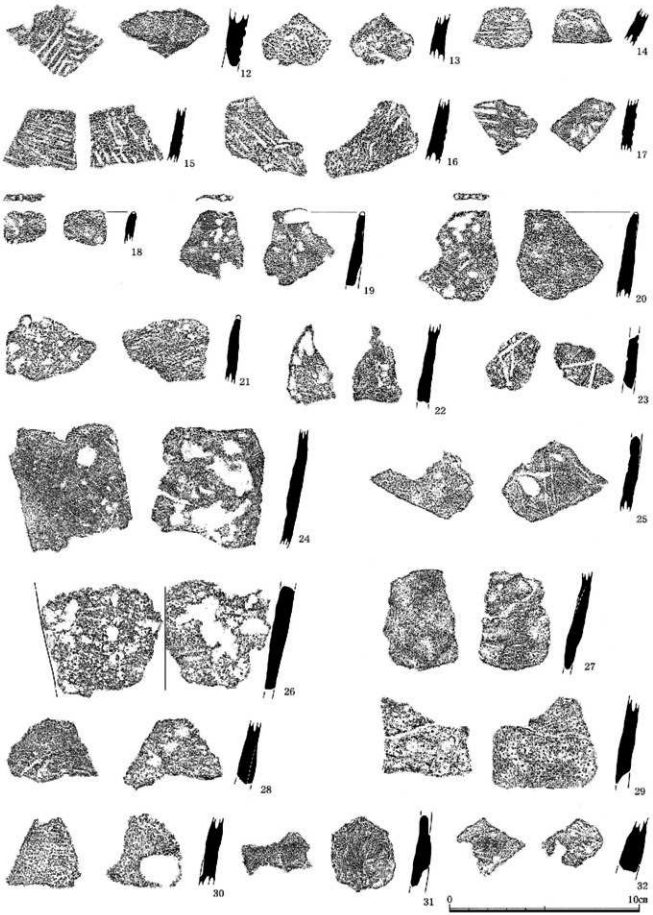


図 66　別所下ノ前遺跡出土縄文土器②（1/2）

C発掘区出土土器(図66～67)

試掘調査第20発掘区出土土器も含めて、ここに報告する。

早期中葉の土器(12)

12は外面に大型の山形文をやや左下がりに施す胴部片である。内面は横位のナデにより緩やかに彎曲している。2次焼成によるものか色調は赤く、非常に良く焼き締まっている。穂谷式に比定されるが、図65-11とは胎土中の角閃石の有無において異なる。

早期末前期初頭の土器(13～32)

13～15はⅢ群E1類としたものである。13の外面には若干量の煤が付着している。14は胴部下半片で左上がりの条痕後に横位の条痕を施している。15は外面に左上がりの条痕を施し、内面は縦位の条痕後に左上がりの条痕を施している。

16・17はⅢ群E2類としたものである。両者とも外面に左上がりの粗い条痕を施し、16内面は右上がり、17内面は横位に施す。どちらも胎土には細かい雲母を多く含む。

18～31はⅢ群E3類a種としたものである。

18～21は口縁部片で、18～20の端部はナデでつまみ上げたことによって先尖り状を呈しており、口縁部端面に水平な刻みを一定間隔を空けて施す。21は口縁部直下の破片で、端部が欠けている。いずれも砂粒を多く含んでいる。

22～31は胴部片で、23は外面に縦位→斜位の沈線が施される。沈線内には筋が観察されるが、施文方向は不明である。また内面には横位の沈線がある。明らかに焼成前に施されたものであるが、装飾的意図によるものか、偶然によるものかは不明である。24・26は右下→左上方向に擦痕状の条痕を施しており、内面は横位にナデを行なう。28・29・31は凝口縁痕が顕著に認められるもので、28外面はナデによる屈曲が認められる。24・26・28・29・31は胎土の特徴から同一個体と考えられる。25の外面は左上方向へ擦痕状の条痕を施し、内面は板状の工具による縦位のナデが行なわれている。外面には煤の付着が認められる。

32はⅢ群F類とした繊維を含む無文土器で、角閃石を多く含む。外面には若干量の煤が付着している。

中期末～後期前葉の土器(33～49)

33～42はⅤ群A1類としたものである。33～35は口縁部片で、33は太い隆帯を貼り付け、縄文RLを縦位に転がし、その後に直径1cm程の円形の刺突を施す。35は口縁端部の粘土がはみ出したところに縄文RLを施したと考えられ、断面は三角形状を呈している。いずれも端部に縄文を施し、内面はナデを行ない、横位の擦痕が顕著に認められる。

36～42は胴部片で、36・37は外面に縄文LRを縦位に施した後に横位に施す。内面は横位のナデとユビオサエによる凹凸が顕著に認められ、胎上には砂粒を多く含む。40～42は外面に縦位のナデを行なうもので、砂粒を多量に含むため器面には細かい凹凸が顕著に認められる。内面は横位のナデとユビオサエで調整される。

49は底部Ⅳ類としたもので、基壁は平底から僅かにくびれた後、外傾して立ち上がる。外面は縄文LRと縦位のナデ、内面は幅広の横位のナデを強く行なっており、稜が顕著に認められる。33～42・49は同一個体と考えられ、中期末の北白川C式に含まれる。

43～48はⅤ群F類とした無文土器である。43は成形時に粘土を追加して貼付けており、部分的に段が形成されている。44は小型の鉢の胴部下半片と考えられ、内外ともに丁寧なナデが施されている。45の内面、47の外面には指頭圧痕が顕著に認められる。

晩期中葉の土器(50)

50は深鉢口縁部で、やや丸みを帯びた端部に棒状工具によって右下がりの刻みを施し、肩曲外反する頸部は横位のナデが行なわれている。内面もまた横位のナデで調整され、外面の屈曲に対応して緩い稜が形成されている。篠原式の中段階～新段階に比定される。

D発掘区出土土器(図68～74)

早期前葉～中葉の土器(51～68)

51はⅠ群B2類a種としたものである。長軸両端が丸みを持ち、やや細長くなったネガティブ楕円文を外面に施し、内面はナデを行なう。本地区では1点のみ出土した。

52～57はⅠ群B2類c種としたもので、外面には太く長い舟形沈文を縦位に施している。文様の切合から左→右方向へ施文していると考えられる。内面は丁寧にナデが行なわれ平滑である。57は底部付近と考えられ、乳頭状の尖底になると考えられる。これらは神宮寺式新段階に比定される。

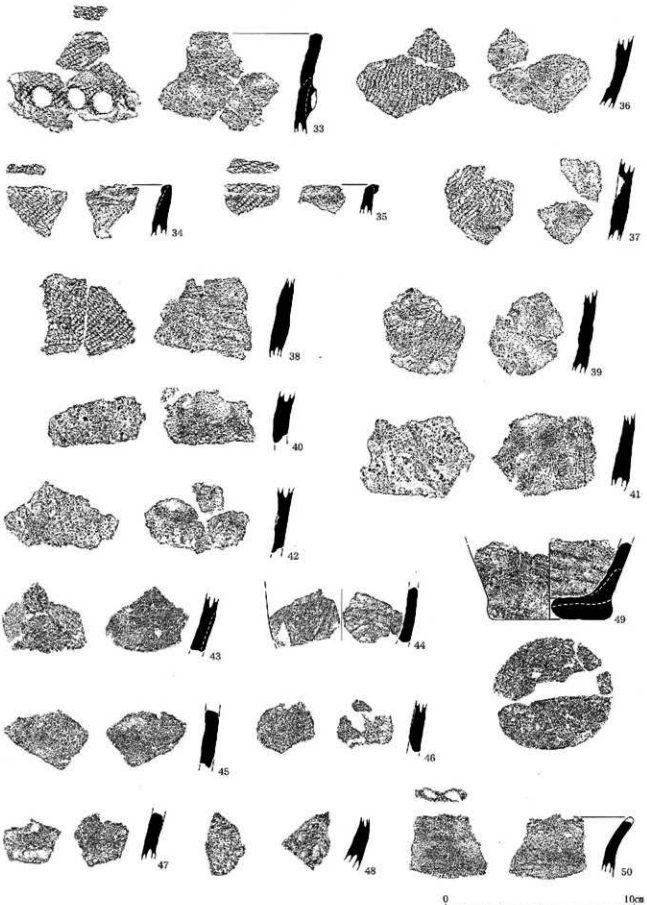


図 67　別所下ノ前遺跡出土縄文土器③ (1/2)

58～61はⅠ群Ｄ３類としたもので、外面に正三角形状を呈する山形文を施す。58はやや頂部が丸い小型の山形文を施し、砂粒が多く若干量の繊維を含む。59～61は頂部が角を持ち、幅の太い山形文を施すもので、繊維を含み；砂粒・雲母は少ない。61は底部付近の破片で、尖底になると考えられる。59～61は同一個体で、原体は２単位の可能性が高い。その場合、原体の周長は1.8cm、径は約0.57cmとなる。

62～67はⅠ群Ｄ6類としたもので、横位に撚糸文を施すものである。いずれもＲの撚糸文で、胎土は砂粒・雲母が少なく、繊維を含む。67は底部付近の破片で、尖底になると考えられる。これらは同一個体の可能性が高く、また胎土は59～61に類似する。

68はⅠ群Ｄ４類としたもので、1個体分が出土している。波状口縁で外反する器形である。口縁部はやや肥厚し、端部はナデにより丸みを帯びている。外面には小粒な楕円文を右下がりに全面施文し、内面は端部上端に横位に楕円文を施すため、端部の断面形は内傾の面取りをしたような形状を呈している。また端部上端以下にも横位に楕円文を施しており、切合によって明確な稜が形成されている。楕円文は３単位で、周長は1.7cm、径は約0.54cmとなる。胎土に繊維を多く含み、繊維痕が顕著に認められる。

早期後葉の土器（69～83）

69はⅡ群Ａ1類としたもので、深鉢の頸部片である。頸胴部界の段上に刻みを施しており、内面はナデで平滑に仕上げられている。外面の屈曲部は細かい凹凸が見られ、縄文が施されている可能性も考えられるが判然としない。70はⅡ群Ａ２類としたもので、凹線によって形成された段上に円形の刺突を施す。内面は横

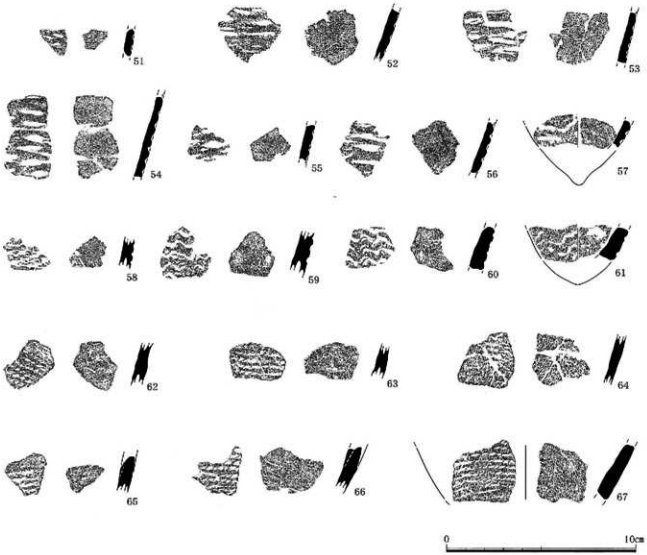


図68　別所下ノ前遺跡出土縄文土器④（1/2）

図 69　別所下ノ前遺跡出土縄文土器⑤ (1/2)

位のナデで調整されている。

71～77はⅡ群D２類としたもので、繊維を多く含んだ縄文施文土器である。71は口縁部片で、三角形状の端部内外面に刻みを入れる。また棒状工具を用いて内傾する刺突を施す。外面は縄文ＲＬを横位に施す。72は器壁が厚く繊維を多量に含む。底部から外側に開いて立ち上がり、胴部上半で口縁に向かい直立する器形になると考えられる。74は内面にナデによる擦痕が顕著に認められる。77外面は下→上の順に横位に縄文ＬＲを施しており、上方の施文がやや傾くことによって重複部分が羽状に見える。

78～82はⅡ群F類としたものである。78は口縁部片で、丸みを帯びた端部に右下がりの刻みを入れる。83は底部Ⅱ類としたものである。円形の平底から強くくびれた後、立ち上がる器形と考えられる。

早期末前期初頭の土器(84～140)

84・85はⅢ群Ｂ２類としたものである。84は波状を呈する口縁部片で、外面に貝殻腹縁を用いた横位の刺突を間隔をおいて上→下方向へ施す。内外面はナデ・ユビオサエで調整され、指頭圧痕が顕著に認められる。85は同一個体の胴部片である。

86はⅢ群Ｂ３類としたもので、横位の貝殻腹縁を上方から下方へ刺突を行なう点はⅢ群Ｂ２類に共通するが、地文が条痕である点で異なる。また胎土も堅緻で、繊維は少ない。

87～89はⅢ群Ｂ４類としたものである。87･88は細い粘土紐を貼付け、その上面に横位のナデを行なうことによって粘土がはみ出し、微隆帯が形成されている。この直下に貝殻腹縁で左→右方向へ横位の刺突を施している。外面は刺突と同一の原体を用いて左上がりの条痕を施し、内面は縦長の指頭圧痕が認められる。89は同一個体の胴部片で、僅かに刺突の端が認められる。

90・91はⅢ群Ｃ類としたものである。同一個体の口縁部片で、断面が三角形状を呈する隆帯を貼付け、隆帯上と隆帯下に半截竹管状工具を用いて左から右方向へ押引きを行なっている。内面はナデとユビオサエで調整を行なう。胎土は砂粒と雲母を多く含み、繊維は認められない。

92・93はⅢ群Ｄ２類ａ種としたもので、92は口縁部付近、93は同一個体の胴部下半にあたる。92は幅広で厚く扁平な隆帯を貼り付けるもので、下→上方向に施された縦位の条痕がそのまま隆帯上に及ぶ。平行する隆帯間に波状の隆帯を複数巡らすモチーフになると考えられる。内面には指頭圧痕が顕著に認められる。

94～96はⅢ群Ｄ２類ｂ種としたもので、94は口縁部付近、95は胴部上半、96は胴部下半片で、これらは同一個体である。94は細く薄い隆帯を斜めに貼付け、器面の左上がりの条痕がそのまま隆帯にも及ぶ。内外に成形時の指頭圧痕が認められ、内面は下から上方向に縦位のナデを施す。92～96は頸部が屈曲し内傾する器形の深鉢で、塩屋式に比定される。

97～116はⅢ群Ｅ１類としたものである。97は口縁部片で、口縁直下に凹線を施す。端部はナデによって面取りされ、外面は左上方向に条痕を施す。内面はナデで平滑に調整され、また指頭圧痕も認められる。99～103はこれと同一個体と考えられ、外面は下から上に斜位の条痕を左右交互に施し、内面は縦位にも施す。98と105は同一個体と考えられ、外面は斜位の条痕を交互に施し、内面は角度を変えて同一方向に施している。106は口縁部片で、厚く丸みをおびた先尖り状の端部形態をしている。内面はナデ・ユビオサエで調整され、指頭圧痕が認められる。これの胴部片と考えられるのが107・109・111・115で、外面に煤が付着している。外面は左上がりに条痕を施すが、111の内面は不規則に施す。胴部下半の立ち上がり方から底部は丸底になると考えられる。116は胴部下半片で、内外ともに左上がりに条痕を施すが、下から上へ角度を変えて施文している。

117～124はⅢ群Ｅ２類としたものである。117は口縁部片で、端部はやや外反し、内面はナデにより緩い面が形成され、内傾する。内外の条痕はやや左上がりに施す。118・122・123は同一個体と考えられ、外面には煤が付着する。123は胴部上半と考えられ、頸部で屈曲し、内傾する器形になると考えられる。121の内面は条痕の間にナデ・ユビオサエのみで調整する部分がある。124は内外ともに不規則に条痕を施す。

125～133はⅢ群Ｅ３類ａ種としたものである。125は外面のみに擦痕状の条痕を施し、内面は右上がりに細長い指頭圧痕を施す。126～128は同一個体と考えられ、外面には薄く広範囲に煤が付着している。内面はナデとユビオサエで調整される。129・130は同一個

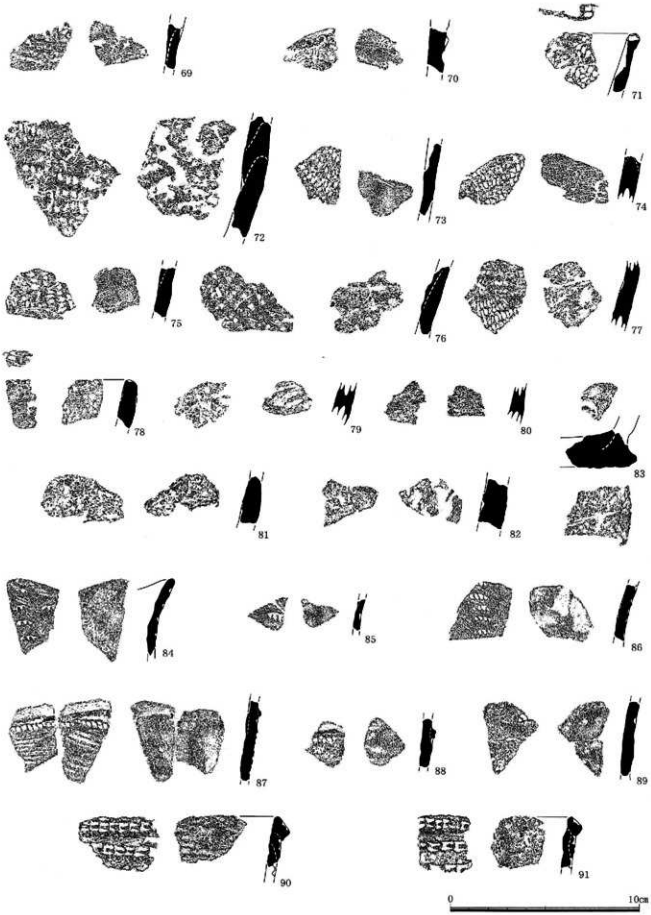


図 70　別所下ノ前遺跡出土縄文土器⑥ (1/2)

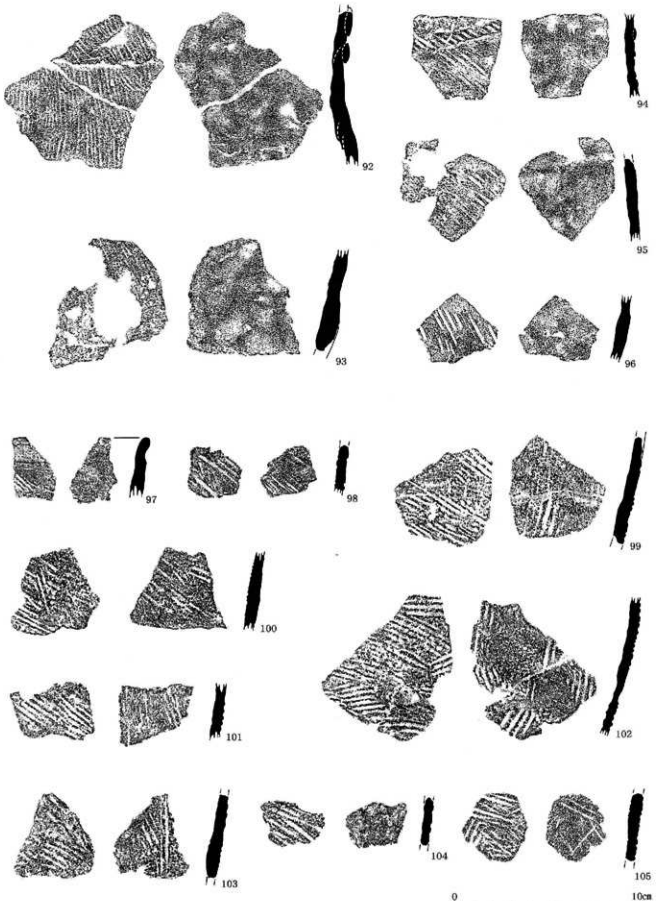


図71　別所下ノ前遺跡出土縄文土器⑦（1/2）

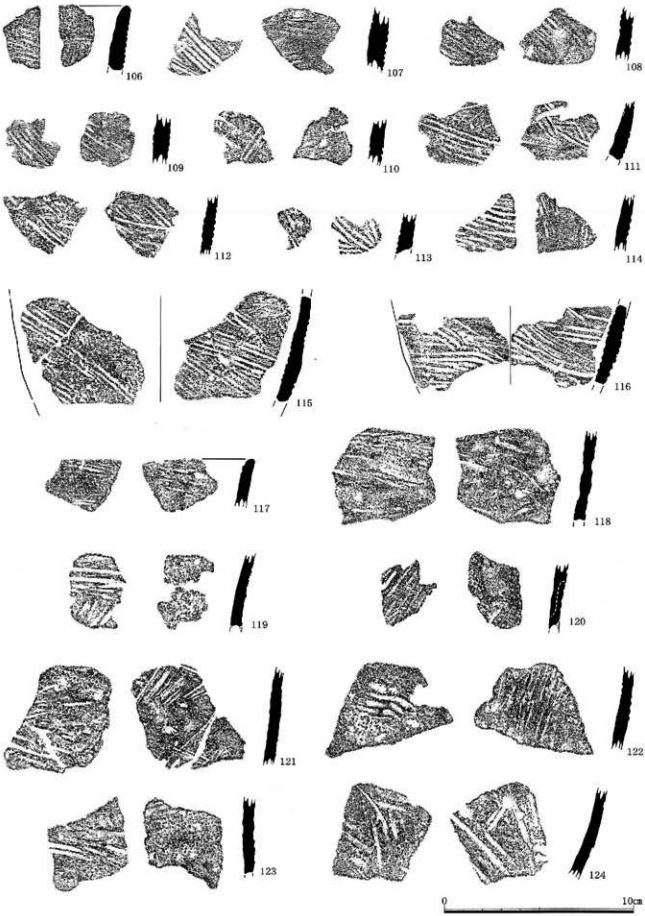


図 72　別所下ノ前遺跡出土縄文土器⑧（1/2）

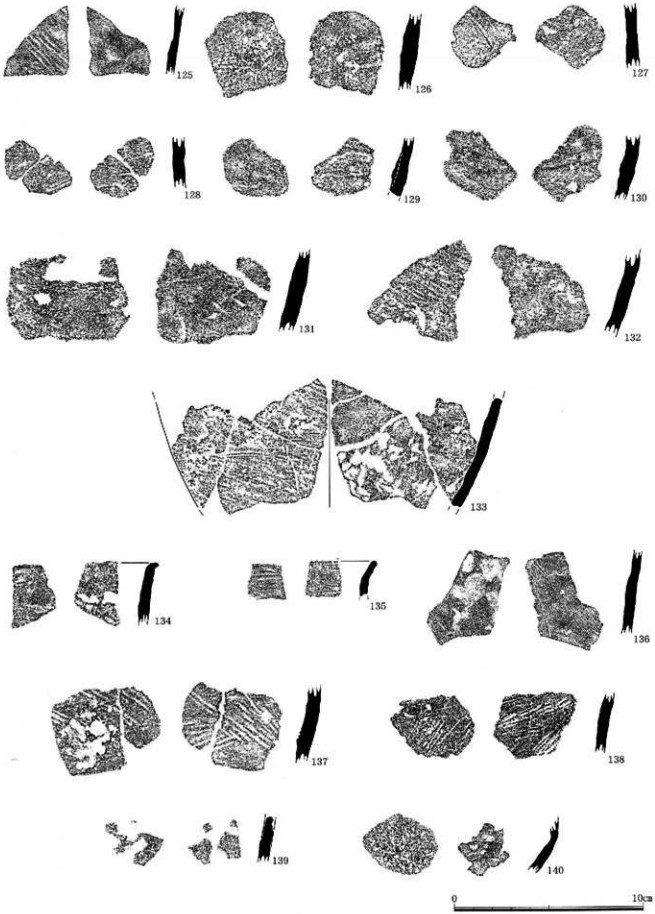


図73　別所下ノ前遺跡出土縄文土器⑨（1/2）

体で、内面は幅広のナデを施す。131・132は同一個体で、胴部下半にあたる。内面には指頭圧痕が顕著にみられる。133は胴部下半の破片で、外面には煤が付着する。薄く堅緻な胎土をしており、外面は左上がりに擦痕状の条痕を施し、内面はナデ・ユビオサエで調整している。

134～138はⅢ群Ｅ３類ｂ種としたものである。134･135は口縁部片で、134は内面端部上端にナデを行なった際に粘土がはみ出し、外側に尖った形状をしている。135は外面に強いナデを行なうことで外反させ、端部を丸く納めている。136は内面に指頭圧痕が顕著に見られる。137は外面に左上がりの擦痕状の条痕を施し、内面に細かい条痕を不規則に施す。138は内外面ともに不規則に条痕を施す。

139・140はⅢ群Ｆ類としたものである。140は底部付近の破片で、139の外面はナデ、140の内面はナデとユビオサエによって調整している。なお139の内面、140の外面は摩滅のため調整不明である。

中期末～後期前葉の土器（141～154）

141～143はⅤ群Ｂ１類としたものである。141は口縁部片で、口縁に平行して沈線を引いた後、口縁部に縄文ＬＲを横位に施している。そのため粘土のはみ出しが沈線にかかっている。沈線以下は横位のナデが認められる。内面は丁寧なナデによって平滑に仕上げられている。142・143は胴部片で、142は縄文ＬＲを横位に施文した後に平行する沈線を縦位に施している。143は縄文ＬＲを施文後、上方に沈線を施し、下方は横位にナデを行なっている。下方の幅広な沈線は水平に、上方の沈線は破片左端から垂直に上がっていく。144・145はⅤ群Ｂ３類としたもので、短い間隔で２本

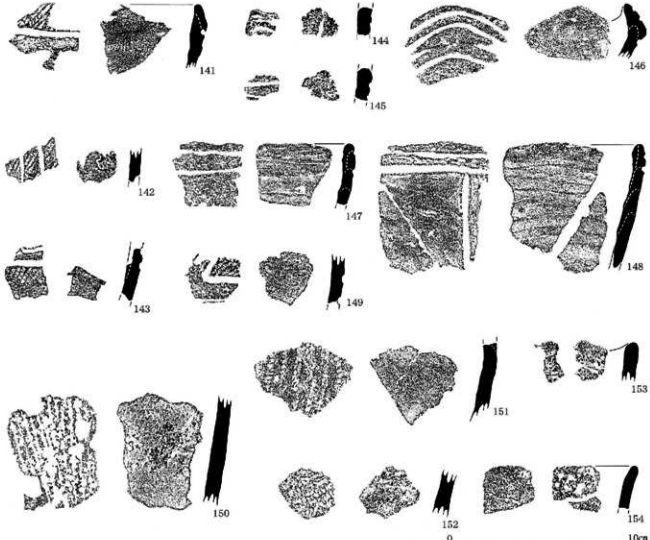


図 74　別所下ノ前遺跡出土縄文土器⑧（1/2）

の沈線を平行に引いている。146はⅤ群Ｂ２類としたもので、断面逆「く」字状を呈する波状口縁部に２本の平行沈線を巡らし、口縁の段の下に1本沈線を巡らすものである。これら141～146は中期末から後期初頭の間に属するものと考えられる。

147・148はⅤ群Ｃ２類としたもので、同一個体の口縁部片である。口縁部に平行して２本の沈線を施し、下方の沈線に直交させて垂下する沈線を引いている。外面は丁寧なナデを行なっているが、内面は幅広なナデで凹凸が顕著に見られる。端部は丸く、やや肥厚させている。後期初頭に位置づけられる。

149はⅤ群Ｃ１類としたもので、縄文ＬＲを施文後沈線で区画を行なっている。中津式に比定される。

150はⅤ群Ｄ類としたもので、外面に条線を施している。内面は丁寧にナデを行なっている。また煤が付着している。北白川上層式に比定される。

151・152はⅤ群Ｅ類としたものである。151は撚糸文Ｌを縦位に施したものである。内面は左上がりのナデで調整されている。152は細かい縄文ＬＲを横位に施したものである。内面はナデを行なっている。

153・154はⅤ群Ｆ類としたもののロ縁部である。153は端部を肥厚させ、内面上端にナデを行ない内傾させる。154はロ縁端部を内外からつまみ上げて外反させており、端部はやや丸みを帯びた先尖り状になる。

Ｅ発掘区出土の土器（図75～82）

早期前葉～中葉の土器（155～191）

155は深鉢胴部片である。Ⅰ群Ａ類としたもので、市松押型文を施しており、大川式に比定される。小片であるため原体単位や施文方向は定かでなく、また摩滅が著しく内面の調整は不明である。胎土中には細かい角閃石を多く含んでいる。本報告では最も古く位置づけられる土器であり、１点のみの出土である。

156は長軸両端が丸みを帯びたやや細長いネガティブ楕円文を施した深鉢の胴部片で、Ⅰ群Ｂ１類ｂ１種としたものである。原体長軸に対し左下がりに楕円文を刻んだ原体を縦位に施文したと考えられる。角閃石を多量に含んでおり、器壁は薄く、また堅緻な胎土である。本遺跡では１点のみの出土である。

157～173はⅠ群Ｂ２類ａ種としたものである。

157・158はロ縁部片で、口縁部外面に右下がりの刻みを施し、157はロ縁部以下に原体長軸に対し右下がりに文様を刻んだ原体を縦位に施文したと考えられる。157・158は同一個体であろう。

159～161は頸部片である。船形沈文を横位に施文後、以下縦位に施したと考えられ、これらは同一個体の可能性が高い。161の内面は丁寧なナデにより平滑に仕上げられている。

162～169は胴部片で、原体長軸に対し文様を垂直に刻んだ原体を縦位に施文したと考えられ、これらは原体・胎土の特徴などから同一個体の可能性が高い。そのうち162は４単位の原体を施した可能性があり、その場合原体の周長は約1.6cm、径は約0.5cmとなる。

170～173は原体長軸に対して右下がりに文様を刻んだ原体を縦位に施文したものである。170の内面には丁寧なナデとユビオサエが観察される。173は胴部下半の破片であるが、内外面ともに摩滅のため文様・調整が不明瞭である。

174～186はⅠ群Ｂ２類ｂ種としたものである。

174・175は原体長軸に対し左下がりに文様を刻んだ原体を縦位に施文したと考えられる。174は胴部下半の破片で、砂粒が比較的多く含まれている。これに対し、175は細かい雲母が比較的多く含まれており、角閃石のみが多く含まれるⅠ群Ｂ２類ａ種と比べ特徴的な胎土をしている。

176・177はロ縁部片で、口縁部外面に垂直に刻みを施すが、刻みは端部にはかからない。これらは同一個体と考えられるが、文様が観察されない。そのため細かい雲母を多く含む胎土の特徴からｂ種に帰属させた。同種のいずれかと同一個体であると考えられる。

178～183は原体長軸に対し右下がりに文様を刻んだ原体を縦位に施文したと考えられる胴部片であり、これらは同一個体の可能性が高い。182は胴部上半の破片と考えられ、縦位施文後に横位に施文をしており、重複によって一部矢羽状を呈している。

184～186は原体長軸に対し左下がりに文様を刻んだ原体を縦位に施文したと考えられる胴部下半の資料である。184・186は175と同一個体と考えられる。185は砂粒を多く含んでおり、胎土は174に類似する。

156は神宮寺式古段階、157～186は新段階に属するものと考えられる（矢野1993）。

187は山形文を施すロ縁部片である。端部には刻みを施さず、端部形態はナデにより丸みを帯びている。

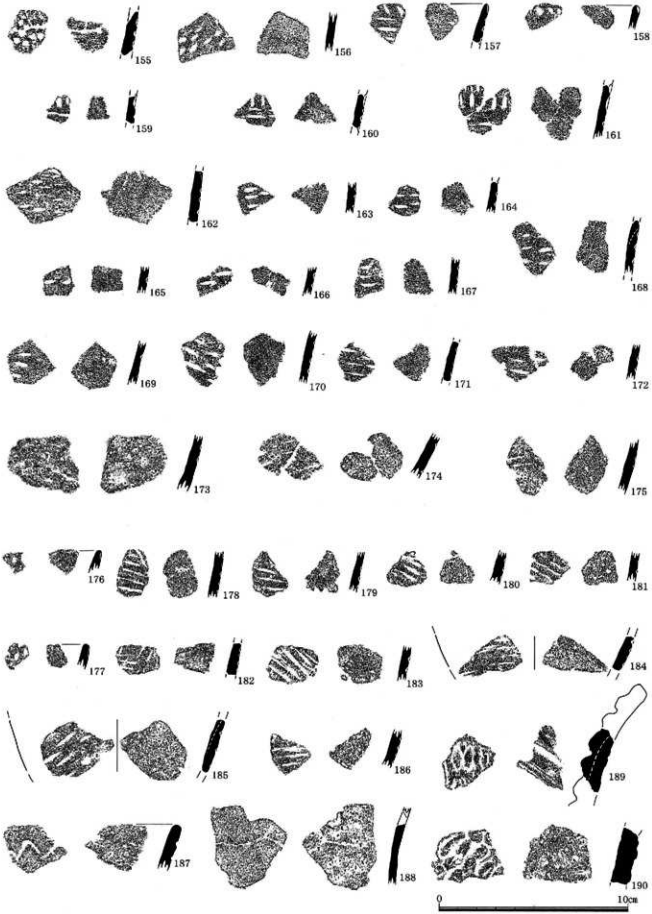


図 75　別所下ノ前遺跡出土縄文土器① (1/2)

図76　別所下ノ前遺跡出土縄文土器⑫（1/2）